

宮城県多賀城跡調査研究所年報1985

多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

本年度の調査は第4次5ヶ年計画の2年次にあたり、外郭線の構造と変遷の解明を主な目的として実施したものである。対象とした地区は第48次が南門跡のある田屋場地区、第49次が北門跡の想定された丸山地区である。

第48次調査では、当研究所が設立された昭和44年度の第7次調査で部分的に検出してい南門跡とこれに取り付く築地跡を再びとりあげたものである。今回はより広い範囲を対象として調査を実施した結果、門の規模・構造をほぼ確定、また、門と築地跡にみられた4時期の変遷は政府跡の遺構変遷と対応することが知られた。このほか、築地基礎地業の下層から7世紀後葉から8世紀初頭頃の横穴墓群が発見され、当地方における多賀城造営前の様相を知る良好な資料を得ることができた。予想外の収穫であった。

第49次調査では、外郭北辺の中央部でも区画施設が築地であったことを確認したものの、当初想定した北門跡はこの地区に存在しないことが判明した。

多賀城跡の外郭線に設けられた門については、これまで東門跡の第13次調査、西門跡の第30・33・46次調査を実施しており、これと本年度の調査により北辺を除く3辺の門の規模・構造・変遷を把握し得たといえよう。

本書は主として本年度の第48次調査(南門跡)と昨年度実施した第46次調査(西門跡)の成果を収録したものであり、第49次調査(北辺築地)については概要の記載にとどめた。

本報告書の刊行にあたり、御指導を賜わった多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生、文化庁、宮城県、多賀城市の関係各位、および発掘に従事された作業員諸氏に対し、心から感謝申し上げるものである。

昭和61年3月

宮城県多賀城跡調査研究所

所長 佐々木 光雄

目 次

I 調査の計画	1
II 第46次調査(昭和59年度分)	3
1 調査経過	3
2 層序	5
III 第48次調査	35
1 調査経過	35
2 基本層序	39
IV 第49次調査	87
V 付 章	89
1 関連研究・普及活動	89
2 研究成果刊行物	90

付図

図版

例 言

1. 本書は昭和60年度に実施した多賀城跡第48次調査の報告と第49次発掘調査の概要、および昨年度年報では概要のみを記載した昭和59年度の第46次調査の報告を収録したものである。
2. 発掘調査の測量原点は政府正殿跡(S B150B)の南入側柱列の中央に埋設したコンクリート柱である。この原点と政府南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線と定めた。南北の基準線の方向は真北に対して $2^{\circ} 34' 40''$ 東に偏している。遺構の位置は、南北・東西の基準線からの距離で示すこととし、例えば南北の基準線から東へ50mの位置はE 50ないしE 50mのように記している。
3. 政府跡の遺構期と瓦の分類基準については、宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡—政府跡本文編一』1982による。
4. 土色については『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄:1976)を参照した。
5. 本書の作成にあたっては、当研究所の佐々木光雄、進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、丹羽茂、古川雅清、後藤秀一、佐藤和彦が協議、検討を行い、執筆・編集はIを高野、IIを進藤・古川・高野、IIIを高野・IVを丹羽・Vを高野が担当した。これらの作業を平山三津子、和田容子、佐藤あさ子、伊丹早苗、田仲紀美子、浅野浩美、多田玲子、馬場ひろみ、岡田富子が受けた。

I 調査の計画

昭和 60 年度は多賀城跡発掘調査第 4 次 5 ヶ年計画（表 1）に基づく 2 年次にあたる。今年度の事業は外郭南門地区（第 47 次）と外郭南辺西端部（第 48 次）の 2 地区の調査を予定していたが、外郭南辺西端部が私有地で立木の関係で高額の補償を要するため、これに代えて次年度実施予定の外郭北門推定地の調査を繰り上げて実施することとした。また、昨年度に緊急調査が 1 件加わったため、調査次数が順次繰延べになっている。本年度の調査実施地区と実施状況は第 1 図・表 2 に示したとおりである。

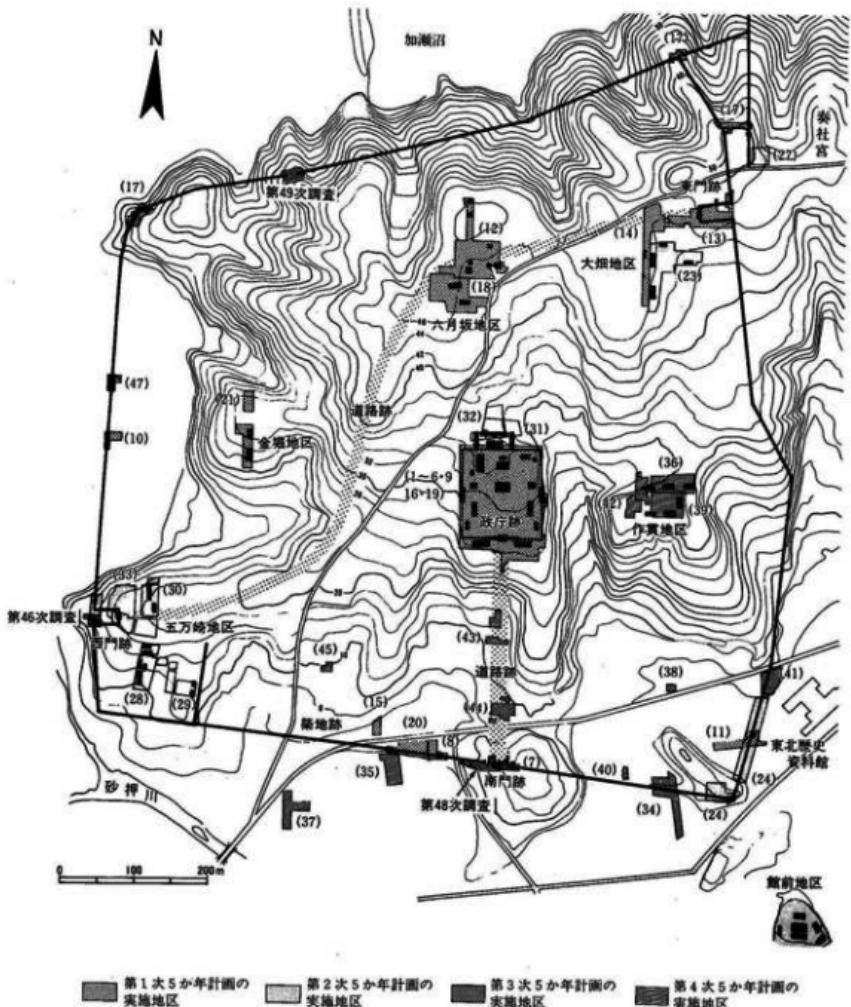
年次	計			
	次数・発掘調査地区	調査面積	予算	
59 年 度	(1) 第 45 次外郭西門地区	1,000 m ²	2,000 m ²	35,000 千円
	(2) 第 46 次外郭線西辺中央部	1,000 m ²		
60 年 度	(1) 第 47 次外郭南門地区	1,000 m ²	2,000 m ²	35,000 千円
	(2) 第 48 次外郭線南辺西端部	1,000 m ²		
61 年 度	(1) 第 49 次外郭北門推定地	1,000 m ²	2,000 m ²	35,000 千円
	(2) 第 50 次外郭線東北隅	1,000 m ²		
62 年 度	(1) 第 51 次大畠地区及び東辺外の地域	1,000 m ²	2,000 m ²	35,000 千円
	(2) 第 52 次外郭東門北東部(外郭外)	1,000 m ²		
63 年 度	(1) 第 53 次外郭東辺築地(作貫地区)	1,000 m ²	2,000 m ²	35,000 千円
	(2) 第 54 次奏社宮西辺築地(大久保地区)	1,000 m ²		
計	10 地区		10,000 m ²	175,000 千円

表 1 多賀城跡発掘調査第 4 次 5 ヶ年計画（昭和 58 年 6 月 29 日承認）

調査次数	調査地区	面積	期間
第 48 次	外郭南門地区	800 m ²	4 月 22 日～11 月 22 日
第 49 次	外郭北辺西半地区(北門推定地)	450 m ²	8 月 1 日～12 月 17 日
計	2 地区	1,250 m ²	

表 2 昭和 60 年度発掘調査実績表

このほか、年間を通して遺構データと出土遺物の整理を行った。発掘調査事業費の総計は 29,000 千円(うち 50% 国庫補助)である。



第1図 多賀城調査実施地区 () は調査次数

II 第46次調査（昭和59年度分）

1. 調査経過

多賀城跡第46次調査は多賀城市市川字五万崎38番地のうち約500m²を対象として実施した（第1図）。五万崎地区は南西に張り出す丘陵上にあり、多賀城跡の南西隅にあたる。この地区的うち外郭西門付近は、昭和52・53年度に第30次（研究所年報1977）・33次（研究所年報1978）の2次にわたる発掘調査が実施されており、SB1000外郭西門や掘立柱建物で構成される平安時代の官衙跡などを検出している。このうちSB1000は掘立式の八脚門であり、外郭西辺より約35m内側に入り込んでいる。また、これにとりつく築地の基礎地業も検出されている。一方、第33次調査で外郭線上に1箇所ではあるが礎石据穴が検出され、西門が外郭線上にも存在することが予想された。そこで第46次調査では、この外郭線上の西門の存在を確認し、SB1000を含めた外郭西門全体の構造と変遷を把握することを目的として実施した。

調査地区は山林であるため、調査に先立ち樹木の伐採や抜根を行った（4月23日）。続いて測量原点の移動を行い、農道を挟み第33次調査区の南に隣接するように外郭西辺上に南北19m、東西26mの調査区を設定した（5月23日）。

つぎに発掘を開始し（5月23日）、表土除去を行ったところ褐色ないし暗褐色の第2層が分布していた（5月31日）。さらに調査区北東部で第2層を除去したところ、ここで礎石据穴を9箇所検出した。これらは第33次調査で検出していた1個の礎石据穴と一連のものと考えられ、外郭線上にも桁行3間、梁行2間の礎石式のSB1095C西門が存在することが確認された。また、この門の東側では第33次調査で検出したSD1096溝跡が延びており、SB1095Cの礎石据穴より新しいことを確認した。さらに南では地山の碎片を多量に含む固い積土の高まりが幅2m程で南北方向に延びており、SF1471A築地の積土と考えられた。この高まりの東西両側には瓦を多量に含む褐色の第3層が堆積していた（6月2日）。

つぎに、調査区西側で第2層を除去したところ、SD1492・1493溝跡、SB1497建物跡などを検出した。このうちSD1492は底面に瓦や小石が敷かれており、通路として機能したと考えられた。一方SD1493は埋土中より中世陶器が出土したことから、中世以降の空堀であることが判明した（6月28日）。

つぎに、調査区東南部のSF1471築地付近の精査を行った。SF1471Aの東西両側には第3層下に灰白色火山灰を含む褐色の第4層が堆積しており、瓦が多量に含まれていることから、築地崩壊土と考えられた。この下層で瓦溜とみられるSK1485・1488～1490土壤

を検出した。また、調査区東端部第2層下の地山面でSK1486・1487 土壌を検出した。ついでSF1471 築地の精査を行ったところ、築地積土の東西両側に大走りの嵩上げ土とみられる盛土(整地層C・G)がみられ、寄柱穴等は検出されなかったものの築地には2時期以上の変遷があることが明らかになった(7月10日)。

引き続きSB1095門の精査を行った。SB1095Cの礎石据穴はほぼ方形であり、0.2~0.4m程の自然石が多量に突き込まれていた。また、礎石据穴の南側でこれと重複する礎石抜穴を検出し、規模は判然としないもののこれより古い礎石式のSB1095B門が存在することが予想された。この礎石抜穴には焼土や炭化物が多量に入っており、この門は火災により焼失したと考えられた。なお、先に検出したSF1471A築地積土はこの門よりも層位的に古く、この築地と対応するさらに古いSB1095A門の存在が予想された(7月16日)。この段階で写真撮影を行い、遣方を設定して実測図を作成した(8月4日)。また、この時点で報道発表(8月9日)、現地説明会(8月11日)を行い、これまでの調査成果を公表した。

引き続き、門の精査を行い、一辺が1.5m程の方形のSB1095B門の礎石据穴を検出した(8月31日)。これを写真撮影・平面実測をした後、礎石据穴や築地などの断ち割り調査を行った。この結果、前述の礎石据穴のさらに下層には一辺が1.5m~2.0m程の方形の柱穴があり、SB1095Bより古い掘立式のSB1095A門が存在することが判明した。規模は桁行3間、梁行2間の八脚門である。SB1095A・BはSB1095Cより南へ6m程ずれている。したがって、築地線上の外郭西門にはA:掘立式→B:礎石式→C:礎石式の3時期の変遷があり、いずれも八脚門であることが明らかになった。

一方、SF1471築地では、西側の嵩上げ土(整地層G)の下層にSD1473溝跡があり、この溝がSB1095A・Bの内部にまで延びていることから、西側の嵩上げの時期はSB1095A・Bより新しいものと考えられた。東側の嵩上げ土(整地層C)は盛土が一連でSB1095A・Bの部分にまで及んでおり、SB1095Bはこの上面に構築されていた。このことから、東側の嵩上げの時期は西側の嵩上げの時期よりも古く、SF1471築地にはA:築地積土の時期→B:東側の嵩上げ(整地層C)の時期→C:西側の嵩上げ(整地層G)の時期の3時期の変遷があることが判明した。門と築地の対応関係は、構築面が同じことからSB1095BとSF1471Bが対応し、これらより古いSB1095AとSF1471A、これらより新しいSB1095CとSF1471Cがそれぞれ対応すると推定した(10月3日)。

また、SF1471の北端部(門との取付部付近)では複雑な重複状況がみられた。精査の結果、まず地山碎片を含む暗褐色土の整地層Bがみられ、この上面よりSD1483溝などが掘り込まれていた。次にこれらを覆い築地東側の嵩上げ(整地層C)が行われていた。さらに

その上面より S B 1095B の礎石据穴が掘り込まれ、これが焼失した後、その埋土に焼土などを多量に含む S K 1484 土壙が掘り込まれている。次にそれを覆い、同じく焼土を多量に含む褐色土を用いた整地層 E がなされ、その上面に S D 1472 槽が構築されていた。

以上により S B 1095 門と S F 1471 築地には、A・B・C の 3 時期の変遷があるが、S B 1095 B が火災をうけた後、S B 1095 C が建設されるまでには S K 1484 が掘り込まれるなど若干の時間差が存在することなども把握できた（10月17日）。

一方、S F 1471Aは黒褐色の第7層及びその上面から掘り込まれたSD 1481溝跡の上に構築されていること、第7層下でSD 1475・1476、また第8層下でSD 1477溝跡などが存在することを確かめた。写真撮影の後、平面図、断面図を作成した(11月14日)。この後、調査区を埋め戻し、12月7日に調査を終了した。

2. 層序

調査区内の層には第1～8層の自然堆積層とA～Gの盛土整地層（以下、整地層と記す）がある。調査区西半では第1・2層下が直ちに地山になるが、門や築地のある東半部では数多くの層があり、これらは遺構と複推に重複している（第5・7・9・10・12～14・19・21図）。そこで、煩雑さを避けるため、遺構としてはSB1095西門だけを入れて、東半部における層の新旧関係を図示すれば、次のようになる。



第2図 自然堆積層・整地層の新旧関係

以下、各層の分布や特徴について記述する。

自然堆积层

地 山：調査区全面にみられる黄褐色の凝灰岩質で、本地区の基盤をなしている。

第8層：調査区東半端に設けた断面観察用のトレンチで部分的にみられる自然堆積層である。土質は黄褐色の砂質土で、最大の厚さは約 0.1m である。地山にのり、第7層によつて覆われている。

第7層：調査区東半部のほぼ全面に分布する自然堆積層である。土質は黒褐色の砂質土で、木炭粒を若干含む。南壁付近でもっとも厚く約0.2mである。第8層を覆い、また整

地層AおよびBに直接覆われている。

第6層：調査区の東南部S F 1471築地の西犬走りを中心に東西約2m、南北約5mの範囲に分布する自然堆積層である。土質は暗褐色の均質な細かい砂質土である。堆積層の厚さは約0.2mである。この堆積層は整地層B・Dを覆い、整地層Gに覆われている。

第5層：S F 1471築地の西犬走り付近に限って分布する自然堆積層である。土質は細かい褐色の砂質土で、厚さは約0.5mである。この堆積層は整地層Gを覆っており、第4層に覆われている。

第4層：第5層上の自然堆積層でS F 1471築地の西側に限って分布する。灰黄褐色(10 YR 4/2)砂質土を主体とし、中にブロック状の灰白色火山灰や瓦片を含む。厚さは0.1m前後と薄い。層中に含まれる灰白色火山灰は承平4(934)年をそう遡らない頃に降下したとみられる。

第3層：S F 1471築地の東西両側に分布する自然堆積層である。土質は褐色を基調とする比較的堅い砂質土で、中に多量の瓦を含む。厚さはS F 1471築地の東側で約0.5m、西側で約0.2m前後である。

第2層：調査区全面に分布する自然堆積層である。土質は暗褐色を基調とする柔らかい砂質土で、厚さは0.1m程である。

第1層：調査区全面に分布する明黄褐色の柔らかい砂質土で、厚さは平均0.15mで、現在の表土である。

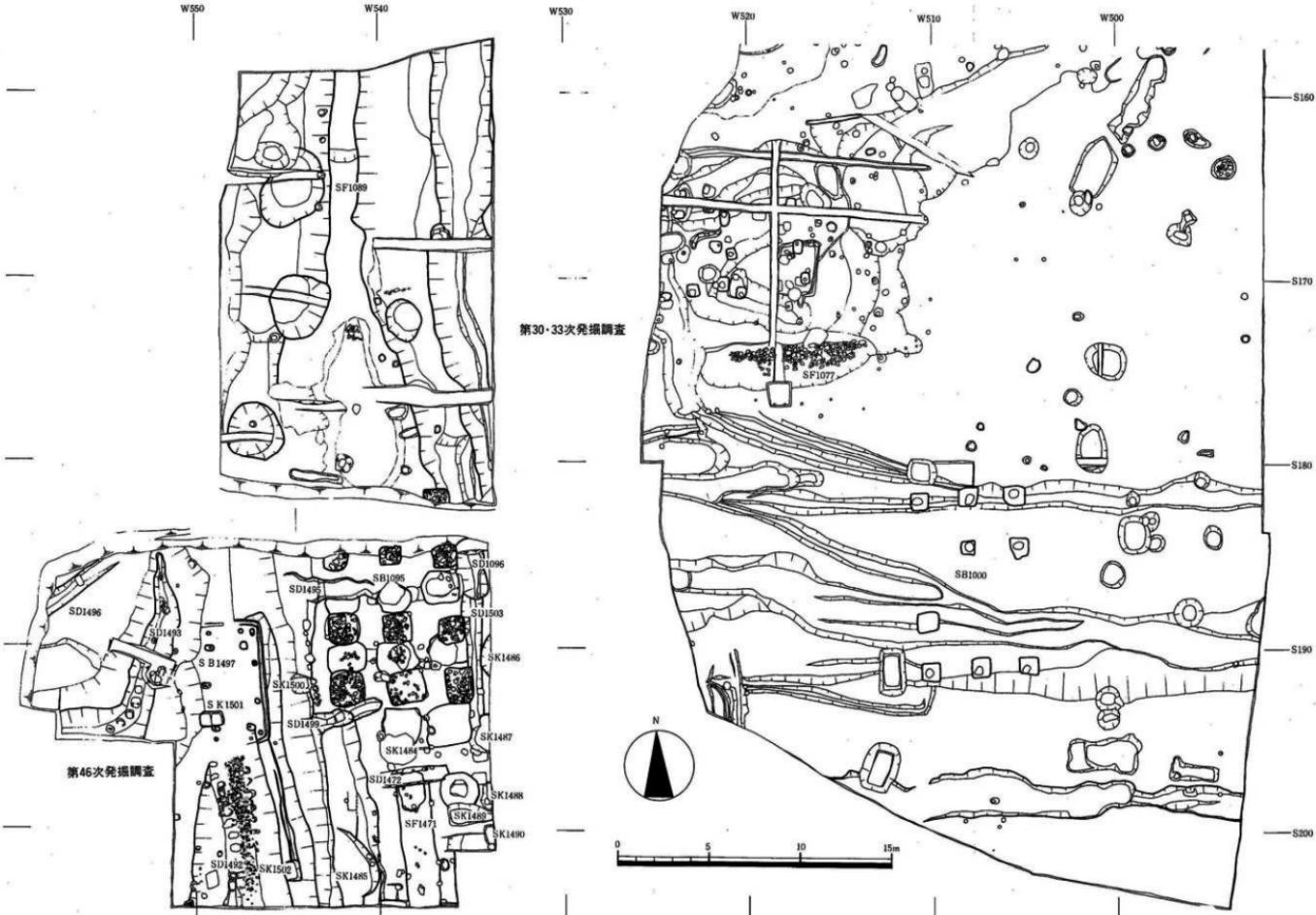
整地層

整地層A：調査区東半部やや北寄りにあたるS A 1482柱穴群付近で、東西、南北約3.5mの範囲にわたって部分的に分布する整地層で、厚さは約0.1mである。第7層を直接覆っている。

整地層B：調査区東南部のS F 1471築地付近で、東西4.6m、南北9mの範囲に分布する整地層で、S F 1471A築地の基礎地業となっている。整地層は若干の地山細粒・木炭・マンガンを含む灰褐色の砂質土と暗褐色の砂質土を主に用い、固く盛土したものである。厚さは0.3m程である。この整地層は第7層・整地層Cと重複し、第7層を直接覆い、整地層Cに覆われている。

整地層C：調査区東南部のS F 1471築地東犬走りを中心に東西約2m、南北9mの範囲に分布する整地層で、この上面がS F 1471B築地の大走り面になっている。整地層は地山粒を含む暗褐色砂質土を主に用いている。厚さは平均0.25m程である。この整地層は整地層Bを直接覆っており、整地層E・Fに覆われている。

整地層D：S B 1095門の西側柱列南1間付近を中心に、東西2m、南北5mの範囲に分



第3図 第46次調査発見造構

布する整地層である。暗褐色の砂質土を主に用いて互層に盛土したものである。厚さは最大で 0.6m である。この整地層は整地層 E・F および第 6 層と一部重複し、これらに覆われている。

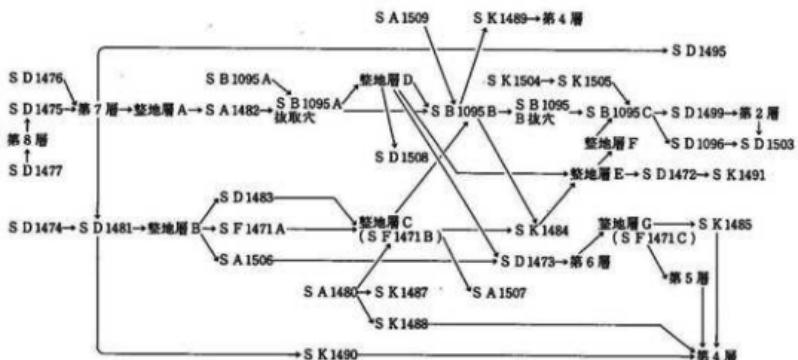
整地層 E : S B 1095 門の南妻棟通り付近の東西 4.1m、南北 3m の範囲に楕円状に分布する整地層である。整地土は多量の地山粒と焼土・木炭・瓦などを含む黄褐色土である。最大の厚さは 0.25m 程である。この整地層は整地層 D と一部重複し、これを覆っており、整地層 F に覆われている。

整地層 F : S B 1095 門の南半部付近で、東西 6.5m、南北 5.5m の範囲に分布する整地層である。土質は褐色・黄褐色・暗褐色の砂質土を用いて、粗い互層をなす。この整地層 F は整地層 D・E を覆っており、第 2 層に覆われている。

整地層 G : S F 1471 築地西側犬走り付近に限って分布する整地層である。整地土には版築土のブロックや褐色・黄褐色・暗褐色の砂質土が主に用いられており、厚さは約 0.5m 程である。この上面が S F 1474C 築地の西犬走りになっている。この整地層は第 6 層を覆い、第 5 層に覆われている。

3. 発見された遺構と遺物

本調査で発見した遺構には門跡 3、築地跡 3、柱穴群 5、建物跡 1 の他多数の溝、土壙などがある（第 3 図、図版 1）。これらの遺構はさきに述べた自然堆積層（第 1～8）や盛土整地層（A～G）と重複関係を有するものもある。これらの重複関係を模式的に図示すればつぎのようになる。



第 4 図 発見遺構の重複関係

以下、遺構の種類ごとに、その概要と出土遺物の内容について記すことにする。

なお、盛土整地層および自然堆積層については、原則的に出土遺物についてのみふれることにするが、便宜上、整地層については関係する各遺構のところで、また、自然堆積層については最後に一括して記述することにする。

(1) SB1095 西門跡

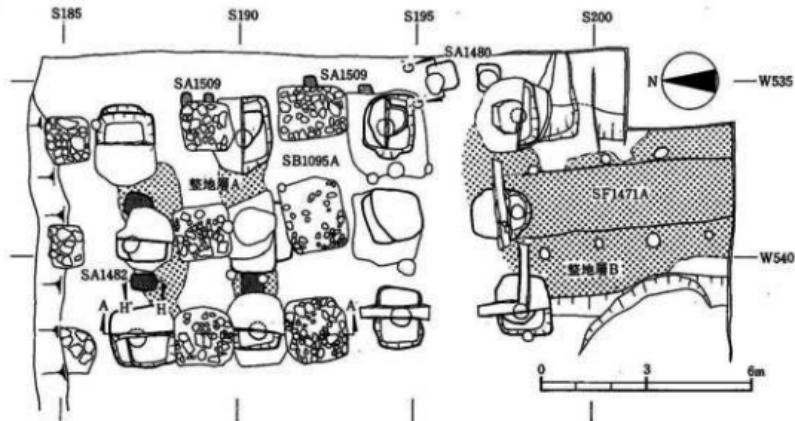
調査区東半部の北寄りで検出した門跡で、A～C 3時期の重複がある（第6図）。以下、古い順に記述する。

SB1095A（第5図）

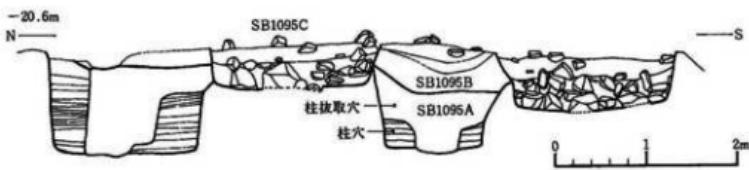
第7層の上面で検出した南北3間、東西2間の掘立式による八脚門である。柱穴はSB1095Bの礎石据穴と重複しており、その下層で検出した。また、すべての柱穴に柱抜取穴が伴っている（第6・8・10図）。

柱抜取穴中および柱穴底面に残された柱あたり痕跡で算出すると、桁行の柱間は西側柱列で総長10.91m、中央間が4.11m、北脇間が3.39m、南脇間が3.41mとなり、梁行の柱間は南妻で総長が5.53mで、西から2.78m・2.76mとなる。方向は西側柱列で発掘基準線に対し北で西へ約5°偏している。

柱穴は一边が1.6m前後の方形で、深さは1.1～1.6mで壁は垂直に掘り込まれている。埋土は灰色土や暗褐色土、褐色土などを用いた丁寧な互層をなす。柱は一部残存する柱あたり痕跡から径0.45m前後の丸柱であったと推定される。柱抜取穴は平面形が不整円形を



第5図 SB1095A・SF1471A 遺構平面図



第6図 SB1095A・B・Cの重複状況（第5図A-A'断面）

なし、その埋土はマンガン粒を多く含むやわらかな暗灰黄色土である（図版2上）。

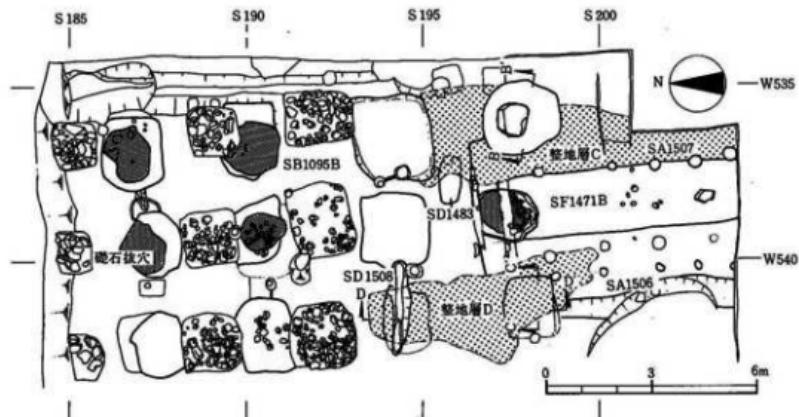
基壇の有無については判然としない。

柱穴埋土中から剥片が1点出土している。また、柱抜取穴埋土中から土師器壺・甕、須恵器甕、平瓦、丸瓦、貢岩製の插器が出土している。このうち、丸瓦には政府第II期の刻印伊が押されたものがある（第11図1）。

SB1095B（第7図）

整地層C上面で検出した南北3間、東西2間の礎石式八脚門である。前述の掘立式のSB1095Aの柱を抜き取り、同位置・同規模で建て替えたものである。この門は焼土を多量に含むSK1484土壤と重複し、これより古く、また整地層E・Fによって一部覆われている。礎石は東側柱列南端の1個が原位置を保つものであった。他の9箇所では礎石は失われていたが、据穴は残存していた。

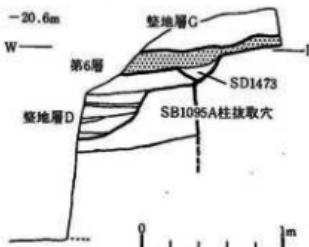
礎石据穴はSB1095Aの柱を抜き取りこれを埋めた後、門基壇部分から築地東犬走りに



第7図 SB1095B・SF1471B遺構平面図



第8図 SB1095B礎石据穴
(第7図B-B'断面)



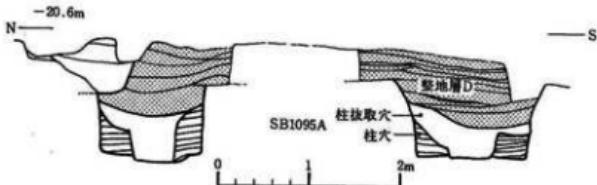
第9図 整地層D・G
(第7図C-C'断面)

かけて盛土した整地層C上に設けられている。据穴は一辺1.6~1.8mの不整方形で、深さは0.2~0.8mであり、断面形は浅い鉢状をなす。埋土は灰黄褐色土や暗褐色土の互層をなし、固く突きかためられている。現存する東南隅の礎石は根石を据えずにこの埋土上に直置きされている(第8図、図版2下)。他の礎石据穴中には玉石か見られるものがあるが、これは根石として据えられたものではなく、据穴埋土中に詰め込まれたものである。

また、整地層Cの他に西側柱列の南から2個の据穴にかけて東西2m、南北5mの範囲に厚さ0.6m程で分布する整地層Dがある。この整地層DはSB1095Aの柱抜取穴を埋め戻した後に、何らかの理由によりこの付近を大きく削平し、盛土したものである(第10図)。したがって、東側の残存礎石とのレベル関係とも合わせて考えると、SB1095B門の礎石はこの整地層上に据えられたものと推定される。

なお、整地層DはSD1471築地西大走り上を南北に延びるSD1473溝によって切られ、第6層によって覆われている(第9・19図)。

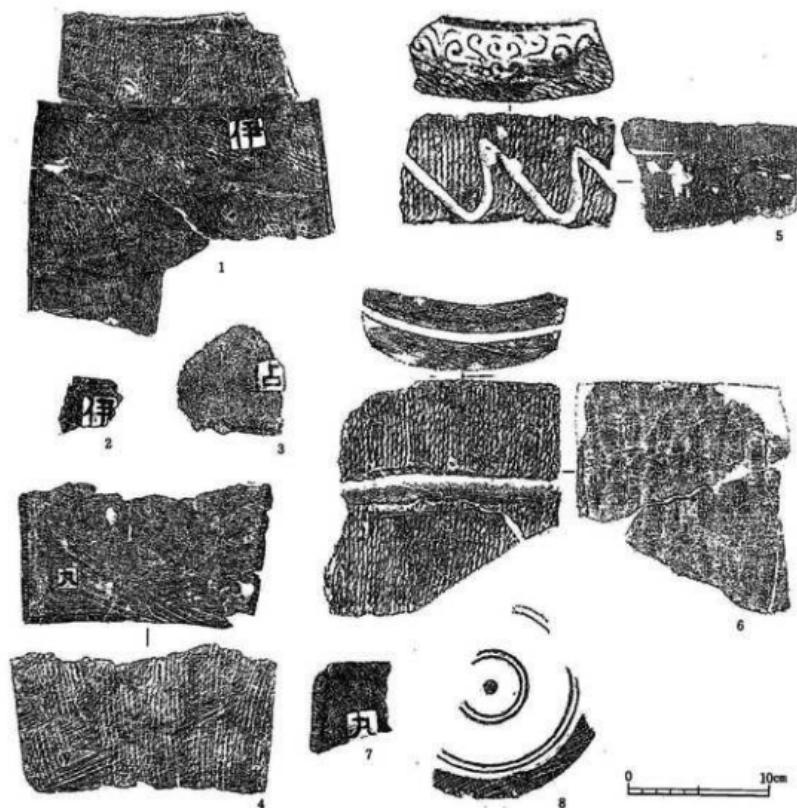
門の床面レベルが原位置を保っている東南隅の礎石の天端のレベルを参考にすると現在検出している整地層C上面より約0.5m高く、基壇は存在したものと推定されるが、そ



第10図 SB1095A・整地層D(第7図D-D'断面)

の平面規模および化粧施設については削平のため不明である。

ところで、礎石抜穴を5箇所で検出しており、その規模は直径 1.6m 程の不整円形で、深さは 0.3m 程である。埋土は焼土や炭化物などを多量に含むやわらかい暗褐色土で、このことよりこの S B1095B は火災によって焼失したことがわかる。



1	S B1095A柱抜取穴	丸瓦	刻印印	5	S B1095C礎石削穴	削平瓦 721B	
2	S B1095B礎石抜穴	丸瓦	刻印印	6	S B1095C礎石削穴	削平瓦 640	
3	S B1095B礎石抜穴	丸瓦	刻印印	7	S B1095C礎石削穴	平瓦	刻印印A
4	S B1095B礎石抜穴	平瓦	刻印印A	8	S B1095C礎石削穴	削平瓦 242	

第 11 図 S B1095 門跡出土の瓦

遺物は礎石据穴および抜穴の埋土から出土した。

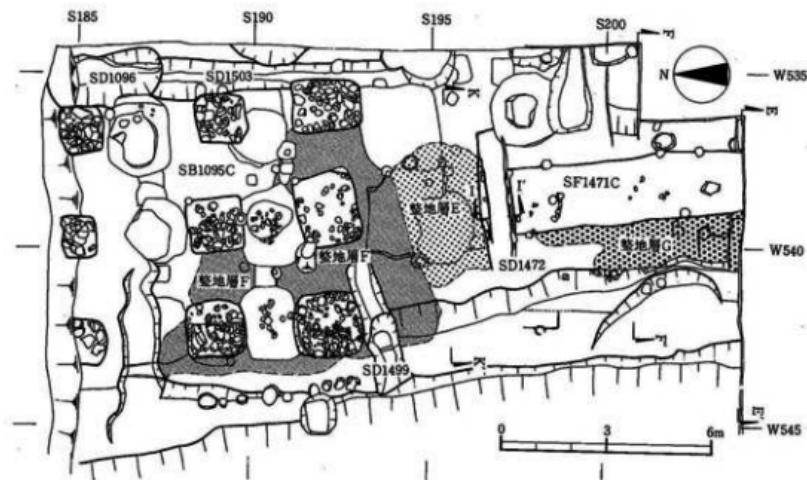
礎石据穴埋土中からは土師器坏・甕、須恵器甕、平瓦、丸瓦が出土している。このうち平瓦(45点)はすべてⅡB類で、胎土や色調から政庁第Ⅱ期に属するもの37点、Ⅱ期かⅢ期か判定できないもの8点であり、丸瓦には「伊」の刻印がみられるもの3点がある。

礎石抜穴埋土中からは少量の土器と刻印瓦を含む多量の瓦が出土している(第11図2~4)。土器には土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕があり、このうち須恵器高台坏は硯に転用されたものである。瓦には平瓦と丸瓦があり、平瓦は大部分がⅡB類で、胎土や色調から政庁第Ⅱ期157点、Ⅲ期94点、Ⅱ期かⅢ期か判別のつかないもの137点である。他に焼けた壁材が出土している。

なお、整地層Cからは土師器坏・甕、須恵器甕、平瓦が出土している。このうち平瓦はⅡB類で胎土や色調から政庁第Ⅱ期に属するものとみられる。整地層Dからは遺物は出土していない。

S B 1095 C (第12図、図版4上)

整地層Fの上面で検出した南北3間、東西2間の礎石式の八脚門で、S B 1095 A・Bより約5.6m北へ位置を移している。礎石はすべて失われているが、農道で削平された北妻の西側の2箇所を除き他はすべて礎石据穴を検出した。第33次調査で検出した根石はこの門の据穴中に敷き込まれた玉石とみられた。S B 1095 CはS B 1095 B、S D 1096・1499・



第12図 S B 1095 C・S F 1471 C遺構平面図

1503と重複し、S B1095Bよりも新しく、溝群よりも古い。

建物の規模については、礎石がすべて失われているため正確には把握できないが、据穴の中心に柱位置を推定すると、桁行の柱間は東側柱列で総長約10.0m、中央間が約4.0m、両脇間は約3.0mとなる。梁行の柱間は、南妻で総長約6.2mで、3.1m等間とみられる。方向は東側柱列で発掘基準線に対し、北で西に約10°偏している。

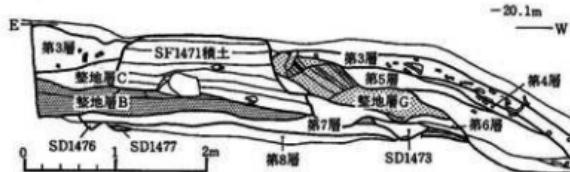
礎石の据穴はS B1095B礎石据穴を覆う整地層F上面より掘り込まれており、一辺が1.5mの方形で、深さは0.2~0.6mである。壁はほぼ垂直で、据穴の埋土は焼土や炭化物を若干量含む褐色土や暗褐色土で、中に直径0.1~0.4m程の玉石を多量につき込んでいる（第6図、図版3上）。

基壇については、S B1095Cが礎石式建物であり、据穴上に礎石を想定するとその天端レベルよりS B1095Bと同じくある程度の高さをもつものが存在したと推定されるが、削平のため、その規模や基壇化粧については不明である。

礎石抜穴については削平されており、判然としない。

遺物には礎石据穴埋土中から出土した少量の土器と多量の瓦などがある。土器には須恵器壺・甕があり、いずれも小片である。瓦には軒平瓦（640・641・721B）、軒丸瓦（242）をはじめ多量の平瓦、丸瓦がある（第11図5~8）。このうち平瓦の内訳はIA類（第I期）2点、IB類（第II期）188点、IB類（第III期）104点、IC類（第IV期）12点である。これらの平瓦IB類の中には丸A、凸の刻印がみられるものがある。

整地層Fからは須恵器の壺・蓋・甕、土師器の甕が数片と平瓦・丸瓦が出土している。土器はいずれも小さな破片で、壺はヘラキリ無調整のものである。また、平瓦はIB類（第II期）、IB類（第III期）、IC類（第IV期）がある。



第13図 S F1471A・B・C（第12図E-E'断面）

（2）S F1471 西辺築地跡

調査区南東部で検出した築地跡で、S B1095西門跡から南へ延びている（図版3下）。築地に関する遺構としては整地層B上に構築された築地積土、その東側走りの基底部を嵩

上げした整地層Cおよび西側犬走りの基底部を嵩上げした整地層Gの3つがある(第13図)。これらのうち、東犬走り上の整地層CはSB1095Bの部分まで一連に盛土されており、この門の礎石据穴はこの上面から掘り込まれていることから、これに伴うものと考えられる。これに対し、西側犬走り上の整地層GはSB1095Bに伴う整地層Dより新しいSD1473溝跡をさらに覆う。このことから西側の整地層Gは東側の整地層Cより新しいことがわかる(第9図)。したがって、SF1471築地は、A:整地層Bを基礎地業とし、その上に築いた築地→B:東側犬走りの整地層Cから推定される築地→C:西側の整地層Gから推定される築地の順に変遷することになる。以下、古い順に記述する。

S F 1471 A (第5図)

整地層Bを基礎地業とし、その上に構築した築地本体からなる最も古い時期の築地で、本体両側の整地層Bの上面が犬走りになっている。

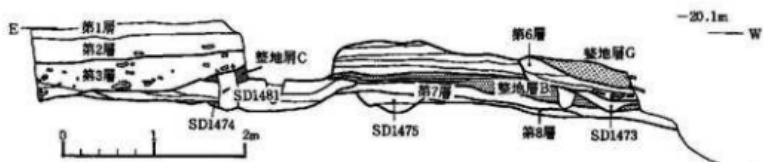
基底幅は積土の幅から約2.1mであり、方向は発掘基準線に対し北で西へ約5°偏している。

整地層Bによる築地基礎地業は調査区南端部では幅5.1mであり、門の南妻付近では削平のため幅3m程残存していた。厚さは最も厚い部分で約0.4mである。地業土は木炭やマンガン粒を含む固い灰褐色土や灰黄褐色土である。

築地積土は幅約2.0m~2.2m、高さ約0.7m程残っており、長さはSB1095A・B門の南妻より南へ約6mを検出している。積土は明褐色土、暗褐色土、黒褐色土などを用いて固く版築されている(第14図)。犬走りの幅については調査区の制約や削平のため判然としない。

ところで、東側犬走り上で2個、西側犬走り上で4個の柱穴を検出した。柱穴は径0.25m~0.4m程の円形で、柱痕跡は確認していない。柱間寸法は東側が1.55mであり、西側が北1.56m・1.55m・1.56mである。これらの柱穴はいずれも築地壁面より若干離れており、寄柱穴とは考えがたく、築地構築に関わるものと推定される。

整地層B、築地積土、柱穴から遺物は出土していない。



第14図 SF1471・整地層C・G(第12図F-F'断面)

S F 1471B (第7図)

S F 1471A 積土の東側で検出した整地層Cによる犬走りの嵩上げ地業から推定される築地跡で、S K1507と重複し、これらよりも古い。

整地層CはS F 1471Aの犬走りを覆い、S F 1471A 積土の東側に寄せて厚さ 0.3m程、幅 2 m前後に地山の碎片を含む固い灰褐色土や暗赤褐色土で盛土されたもので、S B 1471Bの犬走りを形成していたと思われる(第13図)。この時期の築地積土は検出してないが、少なくともその築地基部はS F 1471Aのそれをそのまま利用したと考えられる。したがって、方向はS F 1471Aとほぼ同じと思われる。寄柱穴については確認されていない。

整地層Cからは土師器壺・甕、須恵器甕、平瓦が出土している。このうち平瓦はII B類で胎土や色調から政庁第II期に属するものとみられる。

S F 1471C (第12図)

S F 1471A 築地本体の西側犬走り上に盛土した整地層Gによる犬走りの嵩上げ地業から推定される築地跡で、S F 1471Bと同じく方向はS F 1471Aに一致すると思われる。

整地層Gは自然堆積層の第6層上にS F 1471A 築地積土に寄せて、地山の細片を含む黒褐色土および暗褐色土を主体として厚さ 0.4mに盛土したもので、犬走りの幅は約 1.2m程と推定される(第14図)。これに伴う寄柱跡は確認されていない。

整地層Gから少量の土器と土錐(第23図1)が出土している。土器には土師器の壺・甕、須恵器の壺・蓋・甕がある。

(3) 柱穴群

柱穴群にはS A 1482、1480、1509、1507、1506がある。

S A 1482 (第5図)

調査区北東部の整地層A上面で検出した3個の柱穴である。この柱穴はS B 1095A門の柱抜取穴と重複しており、これより古い。

規模は柱痕跡を検出してないため正確さを欠くが、柱穴の中心で測定すると南北が約3.1m、東西が約 2.5mとなり、その南北方向はS B 1095A門の桁行方向にほぼ一致する。柱穴は一辺 0.6m程の方形で、深さは 0.5mである(第15図)。これらの柱穴は位置関係よりS B 1095Aとの共存はあり得ず、先述した重複関係よりこれに先行する建物があるいはS B 1095A建設時の足場組穴のいずれかの可能性がある。柱穴が小規模なこと、また3個しか検出できないことから判断すると、後者の足場組穴である可能性が強い。

なお、柱穴が掘り込まれている整地層Aはこの柱穴群付近に限って局部的にみられるものである。



整地層Aおよび柱穴埋土から遺物は出土していない。

S A 1480 (第5図)

S B 1095 A・B 門跡東南隅付近の地山面で検出した2個の柱穴である。この柱穴はS B 1095 B、整地層C、SK 1487・1488 土壌、SD 1503 溝と重複しており、これらよりも古い。柱穴は一辺約0.8~1mの方形で、柱抜取穴が伴っている(第16図)。

これらの柱穴は整地層Cに覆われることから、S B 1095 Bより古い。S B 1095 A柱穴との直接的な切り合いはないが、共存する場合はS B 1095 A門の足場組穴、また、先行する場合は建物の一部である可能性もある。遺物は出土していない。

S A 1509 (第5図)

S B 1095 門跡の東側柱列の東で地山面から検出された南北に不規則ながら並ぶ数個の柱穴群である。S B 1095 B・Cと重複し、これらよりも古い。柱穴は直径0.2~0.3mの円形で、深さは0.05~0.09mのものが多く、中には柱痕跡がみられるものもあるが、性格は不明である。遺物は出土していない。

S A 1507 (第7図)

S F 1471 A 築地積土の東側に沿って南北方向に並ぶ4個の柱穴である。S F 1471 B 築地の東犬走りを形成する整地層Cの上面で検出され、第3層によって覆われている。

柱穴は直径0.3~0.4m程の円形で、深さは0.3m程である。柱痕跡は検出できなかつた。柱穴の中心で測定すると、柱間寸法は北から1.2m・1.1m・1.1mとなり、その方向は南北基準線に対して北で西へ5°偏している。これらの柱穴は築地本体に沿い、また整地層Cを切ることからS F 1471 BまたはC築地に関わるものと思われるが、検出範囲が狭いためその性格は限定できない。遺物は出土していない。

S A 1506 (第7図)

S F 1471 築地の西犬走りにあって、整地層Bの上面で検出した南北に並ぶ5個の柱穴列である。S D 1473 溝と重複しており、これよりも古い。柱穴は直径0.2~0.4mの円形である。断割り調査をしていないため、深さや埋土の状況は不明である。柱間寸法は柱穴の中心で測定すると北から1.4m・1.6m・1.1m・1.0mである。方向は基準線に対し北

で西へ2° 傾している。遺物は出土していない。

(4) 建 物 跡

S B1497 建物跡（第3図、図版5上）

調査区北西部の地山面で検出した建物跡で、第2層に覆われている。その西半部は大きく削平をうけているが、東半部は比較的保存状況が良く、溝、柱穴、小柱穴列がみられる。

柱穴は径0.3~0.5m程の楕円形をなし、5個検出している。東西が2間以上、南北が1間とみられ、柱の間隔は北辺で東から1.9m・1.95m、東辺のそれは4.3mである。いずれの柱穴にも直径0.1~0.15mの円形の柱痕跡が認められる。

溝は、西半部が削平のため不明であるが、東半部が東で約6.3m、南で約0.5m程コの字形に残存している。溝の上幅は0.3m、深さは0.15m程であり、その断面形はU字形をなす。

小柱穴は溝に沿って、その内側0.7mの位置で一列に並ぶ。東辺で3間分、北辺では2間分、南辺では1間分検出している。小柱穴の間隔は東辺で北から1.65m・2.1m・1.65m、北辺で東から0.7m・1.7m、南辺で0.7mである。これらの小柱穴は直径約0.2m程の円形である。以上の柱穴、溝、小柱穴は一連のものと考えられるが、本建物跡の性格は不明である。

遺物は北東隅の柱穴埋土から平瓦II B類（政府第II期）が3点出土している。

(5) 溝

地形の一段高い調査区東半部で検出した溝にS D1096・1472~1477・1481・1483・1499・1503があり、一段低い調査区西半部で検出した溝にS D1492・1493・1495・1496・1498・1508がある。

S D1474~1477（第17図）

いずれもS F1471築地の断割り調査の際、その下層で部分的に検出した小規模の溝である。

規模はいずれも上幅0.2~0.3m、下幅0.1m前後、深さ0.02~0.05mと浅く、断面形は開いたゆるいU字形をなす。堆積土はいずれも均質な暗褐色砂質土であり、きわめてよく似る。

このうち、S D1474は地山上面で検出され、S D1481の埋土に覆われている。S D1475は第8層上面で検出され、第7層に覆われている（第14図）。S D1476は地山面で検出され、第7層に覆われている。S D1477は地山面で検出され、第8層に覆われている（第13図）。

なお、これらの溝からは遺物は出土していない。

S D 1481 (第17図)

調査区東半部の断ち割り調査の際、第7層上面で部分的に検出した溝である。重複状況はこの溝が第7層、SD1474を切っており、整地層Bによって覆われ、またSK1490によって切られている(第14図)。規模は上幅約2.9m、下幅2.2m、深さ0.4mで、断面形はゆるやかなU字形をなしている。堆積土は灰褐色や暗褐色の均質な砂質土である。溝の堆積土中から須恵器や弥生式土器の破片が出土している。

S D 1483 (第7図)

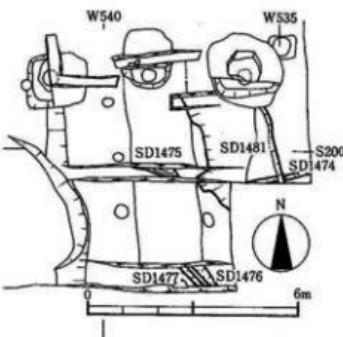
S B 1095 A・B門の南妻北側にあって、整地層Bの上面で検出した東西溝である。この溝は整地層Cによって直接覆われている。規模は長さ1.9m、上幅0.5m、下幅0.3m程度で、溝の断面形はU字形をなす。埋土は地山の細粒を多量に含む暗褐色で人為的に埋め戻されたものである。埋土中から遺物は出土していない。

S D 1472 (第12図、図版4下)

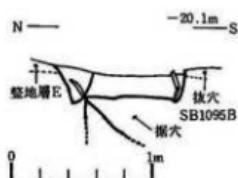
S B 1095 C門跡の南妻柱列の南約4mにある東西溝で、南北両側には瓦や須恵器甕の破片で側壁を作っている。整地層Eの上面で検出され、SK1491土壤と重複し、これよりも古い。

規模は東西3.8mで、内幅0.6m、深さ0.15mである。平瓦・丸瓦・須恵器の大甕片で側壁をなしているが、据えつけるにあたっては幅0.9mの溝を掘り、両側より0.15m控えて平瓦・丸瓦などを立てながら裏込めしている(第18図)。裏込め土は地山ブロック・焼土を含む褐色土である。この溝はSF1471築地に直交し、長さもそれを中心に全長3.8mと限られていることから、築地に関わる溝と推定される。埋土は褐色砂質土の自然堆積土である。遺物は裏込め土、および埋まり土中から出土している。

側壁に使用された遺物には須恵器甕の破片(第23図2)・軒平瓦640・平瓦II B類19点がある。平瓦II B類には物Aの刻印瓦で代表されるような政庁第II期のものと、第III期のものがみられる。埋土中からは土師器壺・須恵器の稜塊(第23図3)、政庁第II期から第IV期



第17図 SD 1481 遺構平面



第18図 SD 1472
(第12図I-I'断面)

の平瓦が約 100 点出土している。

S D 1473 (第 19 図)

整地層 D 上面で S F 1471 築地の西犬走りから S B 1095B 門跡の南西部にかけて検出した南北溝である。この溝は S F 1471A 築地犬走り、S A 1506 柱穴群と重複してこれらより新しく、第 6 層に覆われる（第 9・13・14 図）。規模は長さ 8m 以上、上幅 0.4m、下幅 0.15m、深さ 0.15m 程度で、断面形は U 字形をなす。溝の堆積土は均質な暗褐色土である。

遺物は堆積土中より平瓦 I A 類 1 点、II B 類（第 III 期）8 点が出土している。

S D 1499 (第 12 図)

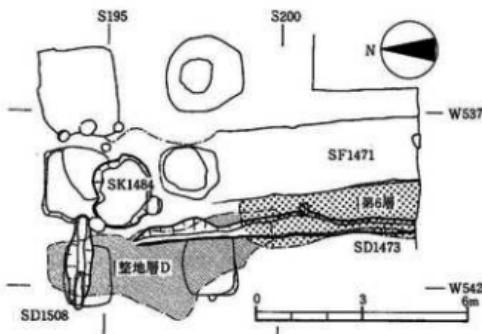
S B 1095C 門跡の南西隅にあって、整地層 F の上面で検出した東西溝である。この溝は S B 1095C 門と重複しており、これよりも新しく、また第 2 層によって覆われる。規模は長さ 3.8m 以上、上幅 0.8m、下幅 0.4m、深さ 0.35m で、断面形は U 字形をなす。底面は西に傾斜している。溝内の堆積土は上層の褐色土と下層の灰褐色土に分かれるが、いずれも自然堆積土である。

遺物は堆積土中より須恵器の高台坏と若干量の平瓦が出土している。平瓦には II B 類と II C 類があり、政庁第 II 期～第 IV 期のものである。

S D 1096 (第 3 図)

調査区北東隅の地山面で検出した浅い南北溝で、かつて第 33 次調査で検出していた築地東側の溝と一連のものである。この溝は S B 1095C 門跡、S D 1503 溝と重複しており、S B 1095C よりも新しく、S D 1503 溝よりも古い。規模は上幅 1.8m 以上、下幅 0.6m、深さ 0.5m で、調査区北端から 3.5m 付近で途切れている。断面形はゆるい U 字形をなし、底面には瓦の細片を敷きつめている。このことから、この溝は S B 1095C 廃絶後に通路として機能していたと推定される。溝内の堆積土は 3 層に細分される。

出土遺物には、堆積土 1 層から平瓦、丸瓦、2 層から土師器の甕、古式土師器の器台、須恵器の坏および平瓦・丸瓦、3 層から須恵器の甕、平瓦・丸瓦がある。平瓦は II C 類（第 IV 期）が多い。



第 19 図 SD 1473・SK 1484 遺構平面

S D 1503 (第3図)

S B 1095C門跡の東側柱列の東で第2層上面から検出した南北溝である。S B 1095C門跡、S D 1096溝と重複し、これらよりも新しい。規模は長さ11m以上、上幅1m前後、深さ0.05~0.1mであり、断面形は浅いU字形をなす。溝内の堆積土は暗褐色土である。

堆積土中から土師器の壺・高台壺・甕、須恵器の壺・甕、須恵器系土器の壺・高台壺、かわらけの他、平瓦II B類、II C類、丸瓦などが出土しているが、いずれも小破片である。

S D 1495 (第3図)

S B 1095C門跡の西側柱列中央間付近から西に延びる溝状の遺構であり、第7層上面で検出し、第2層によって覆われている。規模は長さ6m以上、上幅1.0m、下幅0.7m、深さ0.1m程度であり、底面には瓦の細片や小石が敷き詰められている。溝内の堆積土は褐色の砂質土である。

遺物は堆積土中から出土しており、若干の土師器の壺・甕、須恵器の壺・蓋・甕の他、比較的多量の平瓦・丸瓦の破片がある。平瓦にはII B類(第II・III期)とII C類(第IV期)とがあるが、後者が圧倒的に多量を占める。

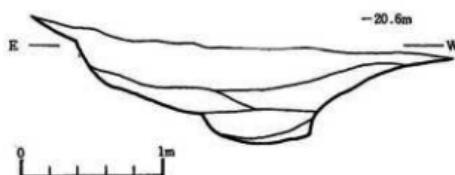
S D 1492 (第3図、図版5下)

調査区南西部にあって、地山面で検出した南北方向の溝であり、やはり第2層に覆われている。上幅は5.2m、下幅3.0mで、長さは南北に9mまで検出されている。断面はゆるいU字形をなす。なお、底面にはS D 1495と同様に瓦の破片と小石を多量に敷き詰めており、状況が極めて類似することからS D 1495と同種の遺構とみられる。さらに、両溝はバラスにIV期の細片状態の瓦を含むことから考慮すると、これらは一連の遺構で門C廃絶後の通路であった可能性が強い。

堆積土中から平瓦II B・II C類、丸瓦、軒平瓦640・721-Aなど多量の瓦と若干量の須恵器の壺・瓶、須恵器系土器鉢、灰釉陶器の瓶などが出土している。平瓦のII C類には「未」などの刻印瓦もみられる。なお、S B 1497建物跡付近は後世に削平されているため、この溝と建物跡の新旧関係は把握できない。

S D 1493 (第3図、図版6上)

調査区の北西部にあって、地山面で検出した溝である。北から南に5.5m延び、西にほぼ直角にまがり約8m延びる。上幅は5.5m、下幅1m、深さ1.7m程度で、断面形はV字形をなす。この溝はS B



第20図 S D 1493 (第3図 J-J' 断面)

1497と重複し、これよりも新しい。埋土は自然堆積層で3層に区分できる（第20図）。

堆積層から瓦、土師器、須恵器、須恵器系土器、灰釉陶器、中世陶器、かわらけ、砥石などが出土している。瓦には軒丸瓦 240・310-B・423・427、軒平瓦 640・721-B・921の他、多量の平瓦II B類・II C類、丸瓦がある。平瓦の中には田Aなどの刻印瓦もある。瓦は第II期～第IV期の瓦であり、第IV期のものが主体を占める。土師器には壺、高台壺、蓋、瓶類、甕、須恵器系土器には壺、高台壺がある。灰釉陶器は瓶の破片である。中世陶器は甕の破片で、かわらけは高台をもつものである。

S D 1496（第3図）

調査区北西隅の地山面で検出した溝である。上幅1m、下幅0.3m、深さ0.2mで約5m分を検出している。埋土は自然堆積土で、出土遺物には土師器の壺、高台壺、平瓦II B類・II C類、鉄滓がある。

S D 1498（第3図）

S D 1492の北約2.5mにあって、地山面で検出した南北溝である。上幅0.4m、下幅0.15m、深さ0.2mで長さは6.5mである。遺物は出土していない。

S D 1508（第19図）

S D 1473の北にある東西溝、整地層Dと重複し、これより新しい。上幅0.7m、長さ2.3mで、埋土中から遺物は出土していない。

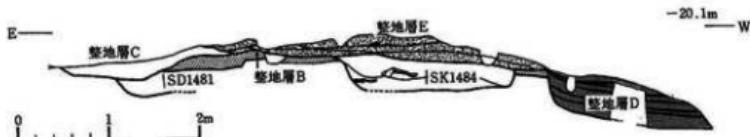
（6） 土 壤（第3・22図）

土壙にはSK 1484～1491、1500～1502、1504、1505がある。

S K 1484

S B 1095B門跡の棟通り、南妻から北1間目の礎石据穴付近の整地層Cの上面で検出した土壙で、整地層Eに覆われている（第21図）。S B 1095B門の据穴と重複しており、これより新しい。規模は東西約2m、南北約1.6m、深さ0.3mで、平面形は梢円形をなす。土壙内の堆積土は焼土や炭化物などを多量に含む暗褐色土である。

堆積土中より少量の土器と多量の瓦が出土している。土器には土師器の壺・甕、須恵器



第21図 SK 1484・整地層C・D・E（第12図K-K'）

の壺・蓋・短頸壺、甕などの器種があるがいずれも破片である。瓦には平瓦と丸瓦がある。平瓦はⅡB類であり、丸瓦の中には凸と刻印したものもある。

なお、整地層Eからは軒平瓦（640・641）のほかに多量の平瓦・丸瓦が出土している。このうち類別できる平瓦の内訳は、ⅡB類（第Ⅱ期）66点、ⅡB類（第Ⅲ期）21点、ⅡC類（第Ⅳ期）25点である。

S K 1485

調査区東南部のS F 1471 築地西側犬走り付近にあって、整地層G上面で検出した土壌で、第4層によって覆われている。犬走りの斜面に掘り込まれているため、土壌の西半部は残っていないが、残存部分の規模は東西約2m、南北約4mで、平面形は半円状をなす。土壌内の堆積土は地山の細粒を多量に含む褐色土であり、中に多量の瓦を含んでいる。その性格は多量の瓦を含むことからS F 1471C 築地崩壊後の瓦溜とみられる。

堆積土中からの出土遺物には多量の平瓦・丸瓦と微量の土師器の壺がある。平瓦にはⅡB類とⅡC類とがあり前者が圧倒的に多い。このうち、平瓦ⅡB類の中には物A、丸Aの刻印瓦がある。土師器の壺は体部破片でロクロ調整によるものである。

S K 1486

調査区北東部のS B 1095 門跡の東側で地山面から検出した土壌である。この土壌はSD 1503溝と重複し、これよりも古い。また、第3層によって覆われている。規模は東西0.6m以上、南北1.6mで、東半部分は調査区外となるが、平面形は梢円形をなすとみられる。土壌内の堆積土はにぶい褐色土であり、後に述べるSK 1487～1489 土壌のそれと共に堆積土中より若干の平瓦・丸瓦片が出土している。

S K 1487

S K 1486 土壌の4m南の地山面で検出した土壌である。この土堆はSA 1480 柱穴、SD 1503溝と重複しており、SA 1480 よりも新しく、SD 1503 よりも古い。規模は東西1.3m以上、南北2.1m、深さ0.1m程で東半部分は調査区外となる。平面形は不整円形をなすとみられる。土壌内の堆積土はにぶい褐色土である。

堆積土中から須恵系土器の壺1点、高台壺1点の他若干の平瓦ⅡC類が出土している。

S K 1488

S K 1487 土壌の南約3mの地山面で検出した土壌である。この土壌はSA 1480と重複しており、これよりも新しい。また第4層によって覆われている。規模は東西0.6m以上、南北1.5m、深さ0.2mで、東半部分は調査区外となるが、平面形は梢円形をなすとみられる。土壌内の堆積土はにぶい褐色土である。

堆積土中より土師器の壺1点、甕1点、須恵器の壺1点、軒丸瓦（分類番号不明）、平瓦

Ⅱ B 類、Ⅱ C 類が総計 84 点出土している。

S K 1489

S K 1488 土壙の南約 1 m にあって、S D 1481 溝の堆積土上面で検出した土壙である。この土壙は S D 1481 溝、S B 1095 B 門跡の据穴と重複しており、これらよりも新しい。また第 4 層によって覆われている。規模は東西 2.4m 以上、南北 1 m、深さ 0.2m で、東半部分は調査区外となる。平面形は先端がすぼまる長楕円形をなすとみられる。土壙内の堆積土は暗褐色土である。

堆積土中より平瓦が出土している。平瓦はⅡ B 類（第Ⅱ期）7 点、Ⅱ B 類（第Ⅲ期）1 点とⅡ C 類（第Ⅳ期）3 点である。

S K 1490

調査区南東隅にあって、S D 1481 溝の堆積土上面で検出した土壙であり、S D 1481 よりも新しい。また、第 4 層によって覆われている。規模は東西 0.6m 以上、南北 1.3m、深さ 0.1m で東半部分は調査区外となる。平面形は楕円形をなすとみられる。土壙内の堆積土はにぶい褐色土である。

堆積土中より土師器の甕 1 点と平瓦Ⅱ B 類（第Ⅱ・Ⅲ期）が若干出土している。

S K 1491

S B 1095 A・B 門跡の南妻棟通り柱穴付近で検出した土壙で、S D 1472 溝と重複し、これよりも新しい。規模は東西 2.2m、南北 2.3m、深さ 0.15m で、平面形は円形をなす。土壙内の堆積土は地山の細片を多量に含む軟らかい褐色土である。

堆積土中から軒平瓦 640、平瓦、須恵器の坏（第 23 図 4）が出土している。平瓦にはⅠ A 類、Ⅱ B 類、Ⅱ C 類がある。

S K 1500

調査区のほぼ中央の S B 1497 建物跡の東約 2 m にあって、地山面で検出した土壙である。規模は東西 1.2m、南北 1 m、深さ約 0.8m で、平面形は方形をなす。土壙内の堆積土中から若干の丸瓦片が出土している。

S K 1501

調査区西側中央部の地山面で検出した土壙で、S B 1497 建物跡と重複しているが、その新旧関係は不明である。規模は東西 0.8m、南北 1.3m、深さ 0.2m で、平面形は方形をなす。土壙内の堆積層は底面にうすい炭化物層がみられ、その上に地山の細粒を多量に含む褐色土がのり、人為的に埋められたものとみられる。

堆積土中より土師器の甕の破片が出土している。

S K 1502

調査区西半部の南端付近の地山面で検出した土壌で、SD1498 溝と重複し、これよりも新しい。土壌の西半部分は削平されているが、規模は東西 0.8m、南北 1.1m で、平面形は方形をなす。土壌内の埋土は第 2 層に似た褐色土である。

堆積土中より玉縁部に「常」と記した丸瓦の破片が出土している。

S K 1504

調査区北東部の地山面で検出した土壌で、SK1505 土壌、SB1095C 門の礎石据穴と重複し、これらよりも古い。現状の規模は東西約 0.6m、南北 1 m、深さ 0.3m 程であり、平面形は円形をなすとみられる。土壌内の堆積土は第 7 層に酷似する黒褐色土である。

遺物は出土していない。

S K 1505

SK1504 土壌の東の地山面で検出された土壌で、SK1504 および SB1095C 門の礎石据穴と重複し、SK1504 土壌よりも新しく、SB1095C 門よりも古い。現状の規模は東西 1.1m、南北 1.6m、深さ 0.25m 程で、平面形は円形をなすとみられる。土壌内の堆積土は SK1504 と極めてよく似た黒褐色土である。遺物は出土していない。

(7) 自然堆積層の出土遺物

第 8 層

須恵器の甕・蓋、土師器の坏・甕がある。須恵器の甕は体部の破片 3 点であり、蓋 1 点は端部の破片で返りはない。土師器の坏は内黒の小破片である。甕は胴部の小破片である。

第 7 層

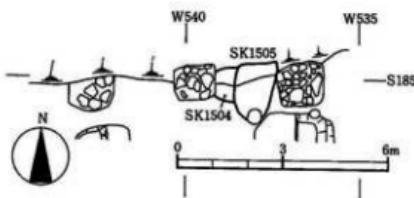
土師器の坏・甕の破片が各 1 点あるが、小破片でしかも磨耗しているため詳細は不明である。

第 6 層

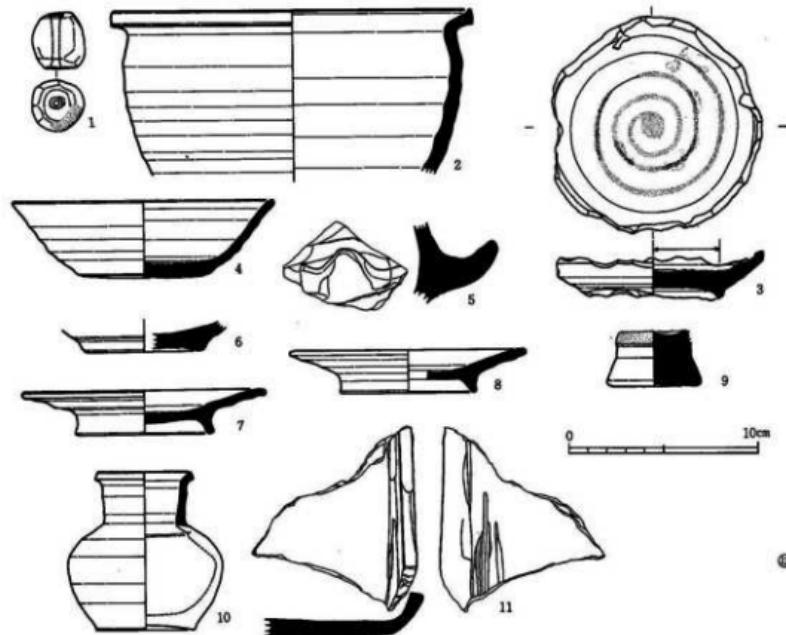
平瓦、丸瓦がある。平瓦の内訳は I A 類 1 点、II B 類（第 II 期）34 点、II B 類（第 III 期）12 点、II C 類（第 IV 期）2 点、不明 20 点である。

第 5 層

平瓦、丸瓦がある。平瓦は II B 類（第 II 期）24 点、II B 類（第 III 期）11 点、II C 類（第 IV 期）



第 22 図 SK1504・1505 遺構平面図



1	紫地滑G	土師	7	第3層	須恵器土器皿	
2	S D1472	須恵器甕	8	第3層	須恵器土器皿	
3	S D1472	須恵器高台甕	9	第3層	須恵器土甕	鉢器
4	S K1491	須恵器甕	10	第2層	須恵器小甕	
5	第3層	須恵器甕把手	11	第1層	甕字鏡	
6	第3層	須恵器土器高台甕				

第23図 第46次調査出土土器

2点、不明 17点である。

第4層

平瓦、丸瓦、須恵器の甕・甌・高台甕・蓋、土師器の甕・高台甕・甕、灰釉陶器の皿、弥生式土器がある。平瓦はⅠA類4点、ⅡB類(第Ⅱ期)134点、ⅡB類(第Ⅲ期)104点、ⅡC類(第Ⅳ期)82点、不明 124点である。須恵器の甕3点のうち1点は糸切り無調整、2点は回転ヘラケズリ調整のものである。甕・高台甕・蓋はいずれも破片であり、詳細はわからない。土師器の甕5点はすべて糸切り無調整である。高台甕・甕は底部の破片である。

灰釉陶器の台付皿は削り出し高台である。弥生式土器は後期の壺の体部破片である。

第3層

平瓦が平箱で48箱分、丸瓦が28箱分出土している。整理が完了していないため瓦の類別と具体的な数量については不明である。総じて、平瓦ではⅡB類、ⅡC類が圧倒的に多く、IA～ID類はほとんどない。この他に須恵器甕（第23図5）や須恵系土器（6～9）が出土している。

第2層

平瓦14箱分、丸瓦8箱分の他、若干量の須恵器、土師器、須恵系土器、灰釉陶器、近世陶器、風字硯が出土している。平瓦、丸瓦については、整理が完了していないため、種別ごとの具体的な数量を把握していないが、平瓦では第3層の場合と同様にⅡB、ⅡC類が多く、IA～ID類（第I期）は極めて微量である。須恵器には壺・高台壺・甕・長頸瓶・小型の瓶（第23図10）の器種がある。壺は底部で11点あり、これには糸切り無調整のもの、ヘラキリ無調整のもの、切り離し後手待ちヘラケズリを施したものなどがある。糸切り無調整の壺の1点には底部に「X」のヘラ記号が認められる。底部は回転糸切り無調整で無高台のものである。甕は体部の破片である。土師器には壺・甕がある。壺は底部で19点あり、いずれも糸切り無調整による。体部の破片では、内外両面をヘラミガキし、黒色処理したものがわずかにみられる。須恵系土器には壺・高台壺・皿がある。灰釉陶器は瓶の底部から体部にかけての破片である。近世陶器は染付けの塊である。

第1層

平瓦40箱分、丸瓦15箱分と若干量の須恵器、土師器、須恵系土器、砥石、風字硯（第23図11）、石硯、現代陶器が出土している。平瓦・丸瓦は整理が完了していないが、組成の傾向は第2層、第3層と同様である。須恵器、土師器には壺・高台壺・甕があるが、いずれも破片である。須恵系土器には高台壺・壺・皿の器種がある。石硯は粘板岩製で、裏面に「官」と刻字し、周囲を方形の二重線で囲んでいる。

4. 考察

（1）第46次調査検出遺構の変遷と年代

今回の調査で検出した遺構には門跡3、築地跡3、柱穴群5、建物跡1の他多数の溝や土壙などがある。以下では、まず門と築地の変遷を整理し、これを基準として他の遺構を位置づける作業を行うことにより本地区の遺構変遷を考え、ついでこれらの年代を検討す

ることとしたい。

遺構の変遷

門跡には、掘立式の S B 1095A → 磁石式の S B 1095B → 磁石式の S B 1095C という変遷がみられ、いずれも八脚門であることが確認された。S B 1095A と S B 1095B はほぼ同位置にあるが、S B 1095C は南妻でみるとこれらより北に約 5.6m 寄っている。このうち S B 1095B は S B 1095A の掘立柱を抜いた直後に建て替えられたもので、火災により廃絶したことが知られた。これらの構築に関する遺構・層をみると、S B 1095A には足場組穴と思われる S A 1482 が伴い、S A 1482 が掘り込まれている整地層 A も同様にこの門の構築時のものとみてよいであろう。S B 1095B には S F 1471B の犬走り嵩上げ土でもある整地層 C と門の南西部に部分的にみられた嵩上げ土である整地層 D が伴う。S B 1095C には整地層 F が伴い、この直下の整地層 E も整地層 F と一緒に S B 1095C に伴う可能性が高いものと考えられる。なお、このほか S B 1095A か S B 1095B のいずれかの構築に関するとみられるものに S D 1483 溝がある。

一方築地跡には、整地層 B を基礎事業とし築地積土の残る S F 1471A → 犬走りの嵩上げ土である整地層 C から推定した S F 1471B → 犬走りの嵩上げ土である整地層 G から推定された S F 1471C、という変遷があることが確認された。また、S F 1471C には暗渠と思われる S D 1472 が伴うと考えられる。

門と築地の組合せについては、まず S B 1095B 門と S F 1471B 築地とともに整地層 C を基礎としていることから同時期に構築されたものとみられる。また、門とそれに取り付く築地は同じ変遷をたどる可能性が高いことから、これらより古い S B 1095A 門と S F 1471A 築地、新しい S B 1095C 門と 1471C 築地がそれぞれ組むものと考えられる。したがって、門と築地跡には以下のようないろいろな 3 時期の変遷をとらえることができる。

- ① : S B 1095A 門・S F 1471A 築地、整地層 A・B、S A 1482 柱穴群
- ② : S B 1095B 門・S F 1471B 築地、整地層 C・D
- ③ : S B 1095C 門・1471C 築地、整地層 E・F・G、S D 1472 溝

その他の遺構・層について、門・築地の変遷との新旧関係を整理すると、①～③のほかに、①より古いもの、②より新しく③より古いもの、③より新しいものがあることが知られ、今回の調査で検出した遺構は以下の a ~ f の 6 時期に分けて把握することができる。

- a 期 : ①より古い時期…………… S D 1474～1477・1481 溝、(第 7・8 層)
- b 期 : ①の時期……… S B 1095A 門・S F 1471A 築地、S A 1482 柱穴群、整地層 A・B
- c 期 : ②の時期……… S B 1095B 門・S F 1471B 築地、整地層 C・D
- d 期 : ②と③の間の時期…………… S K 1484 土壙、S D 1473 溝、(第 6 層)

e 期 : ③の時期……S B1095C門・S F1471C築地、整地層E・F・G、S D1472溝
f 期 : ③より新しい時期……S D1096・1499・1503溝、1485・1491土壌、

(第2～5層)

このほかの所属時期を限定できない遺構については、a～f期との関係を整理しておくと、つぎのようになる。

- ・c期以前のもの………S A1480・1509柱穴群
- ・e期以前のもの………S K1504・1505土壌
- ・b期以後でd期以前のもの………S A1506柱穴群
- ・c期以後のもの………S A1507柱穴群、S D1508溝、S K1489土壌
- ・関係が不明なもの(a期以後あるいはc期以前としか限らざりきものを含む)………
………S B1497建物、S K1486～1488・1490・1500～1502土壌、
S D1492・1493・1495・1496・1498溝

遺構の年代

これまでの重複関係を軸とした整理に基づき、a～f期、所属時期の不明な遺構の順に遺構の年代を検討する。

a期(門・築地の構築前)：S D1481と第7・8層から少量の須恵器などが出土したもの、小破片のため年代の限定は困難である。

b期(S B1095A門・S F1471A築地の時期)：S B1095Aの抜取穴から政府第I期の刻印瓦が出土したことにより、この門の廃絶は政府第II期が造営された8世紀中頃以降であることが知られ、門には第II期の瓦が葺かれていた可能性が高いものと推定される。さらに、c期がb期に連続して建て替えられたものであることから、この期の廃絶は後述するc期の構築年代と同じく8世紀末頃とみられる。一方構築年代については、掘立式の存続期間を考慮すると、8世紀末頃を大幅に遡らず、8世紀後半のうちと考えられる。したがって、この門と築地は8世紀後半に構築され、8世紀末頃まで存続したと考えられる。

c期(S B1095B門・S F1471B築地の時期)：S B1095Bの礎石据穴から出土した多量の瓦をみると、製作時期のわかるものはすべて第II期のものであることから、この期の構築年代は政府第III期の造営年代である8世紀末頃とほぼ同じである可能性が高いものと思われる。また、廃絶年代については、今回の調査区からは第IV期の瓦が多量に出土しているにもかかわらず、S B1095Bの礎石抜穴から出土した瓦は第II期・第III期のもので、第IV期の瓦が全く含まれない状況からみると、政府第IV期が造営された貞觀11(869)年の大地震直後よりは古いものと考えられる。したがって、この期の門と築地は8世紀末頃に構築され、おそらくとも9世紀中頃までには廃絶したものと考えられる。なお、この期の門は

礎石抜穴に焼土・木炭が含まれることから火災で焼失したとみられる。

d期（本調査区に門のない時期）：SK1484は多量の焼土・木炭が入ることからSB1095Bの焼失直後のものとみられ、また、第6層は第IV期の瓦が出土しており、貞觀11（869）年以降であることが知られる。これに後述するe期の年代を考慮すると、この期の遺構はおよそ9世紀中頃から9世紀後半にかけてのものと考えられる。

e期（SB1095C門・SF1471C築地の時期）：SB1095Cの礎石据穴および構築に伴う整地層E・Fには第IV期の瓦が多量に含まれており、この期の構築は政府第IV期の造営された貞觀11（869）年の大地震直後の頃よりさらに遅れた時期とみられる。一方廃絶年代については、SF1471Cの整地層Gが第5層を挟んで後述する灰白色火山灰を含む第4層に覆われていることから、10世紀前半以前であることが知られる。したがって、この期の門と築地は9世紀末頃から10世紀初頭頃までのものと考えられる。

f期（門・築地の廃絶以降）：第4層は灰白色火山灰を含む層で、火山灰の降下した10世紀前半頃（934年以前でこれに近い時期）のものとみられ、これに覆われる第5層とSK1485は10世紀初頭頃のものと思われる。また、第2層からは近世陶器が出土し、SD1503は第2層より新しいことから、ともに近世以降のものであることが知られる。このほかのSD1096・1499、SK1491、第3層は年代を限定する遺物がない。

所属時期の不明な遺構：まず、客期の遺構と重複関係からある程度年代を限定できるものをみると、c期以前のSA1480・1509は9世紀中頃以前、e期以前のSK1504・1505は10世紀初頭頃以前、b期以後でd期以前のSA1506は8世紀後半から9世紀後半までの間、c期以後のSA1507、SD1508、SK1489は8世紀末以降となる。このうちSK1489については、第IV期の瓦が出土したことと、第4層に覆われることから、9世紀後半から10世紀前半までの間のものと考えられるが、他の遺構は遺物が全く出土しておらず、これ以上の限定ができない。

つぎに遺構期との関係が不明なものを出土遺物からみると、SK1486・1500・1502は堆積土中の瓦から8世紀前半以降、SB1497は柱穴埋め土中の第II期の瓦から8世紀中頃以降、SK1490は堆積土中の第III期の瓦から8世紀末頃以降、SK1487・1488、SD1492・1495・1496は堆積土中の第IV期の瓦から9世紀後半以降、SD1493は堆積土の中世陶器から中世以降であることが知られる。SK1501とSD1498には時期を限定できる遺物がない。これらのうちSK1488とSK1490は、灰白色火山灰を含む第4層に覆われることから下限が10世紀前半におさえられる。また、SD1492とSD1493は先にf期に位置づけたSD1096と規模や形態などが類似することから、同じ性格の空堀かと思われ、SD1493の出土遺物を重視すれば中世のものと思われる。なお、SD1495は底面にバラスが敷かれている

点で S D1492 と共に、これらの空堀と同時期の可能性が高い。

これまで検討してきた遺構の変遷と年代をまとめるとつぎのようになる。

a 期：本地区に門・築地が構築される前の時期で、これに属す遺構には、S D1474～1477・1481 溝がある。また、この時期には第7・8層の自然堆積層がみられる。年代は8世紀後半以前であるが、これ以上の限定はできない。

b 期：掘立式 S B1095A 門と S F1471A 築地の時期で、構築に整地層 A・B、門の足場組穴と思われる S A1482 柱穴群が伴っている。この門と築地は8世紀後半に構築され、8世紀末頃まで存続したとみられる。

c 期：b 期に連続して建て替えられた礎石式の S B1095B 門と S F1471B 築地の時期で、構築には整地層 C・D が伴う。この門と築地は8世紀末頃に構築され、9世紀中頃までには火災により廃絶したとみられる。

d 期：S K1484 土壌や S D1473 溝が掘られ、その後に第6層が自然堆積した時期であり、調査区内には門がみられない。年代はおよそ9世紀中頃から後半にかけての頃と思われる。

e 期：礎石式の S B1095C 門と S F1471C 築地の時期で、構築には整地層 E・F・G が伴い、また築地に伴う施設として S D1472 溝がある。この門と築地は9世紀末頃に構築され、10世紀前半以前には廃絶している。

f 期：e 期の門と築地が廃絶した以降で、この期に属す遺構には S D1096・1492・1493・1495・1499・1503 溝、S K1485・1491 土壌があり、この時期に第2～5層が自然堆積している。このうち S K1485 と第5層は10世紀初頭頃、第4層は10世紀前半、S D1096・1492・1493・1495 は中世、第2層と S D1503 は近世以降のものとみられる。

(2) 外郭西門の変遷

多賀城外郭西門についてはこれまで第30次調査⁽²⁾と第33次調査⁽³⁾が実施されている。今回の調査の目的は、これら両次調査で得られた成果を踏まえ、外郭西門全体の構造と変遷を解明することにあった。そこで、ここでは第30・33次調査と今回の第46次調査の成果を総合的に整理し、外郭西門全体の構造と変遷について検討を加えてみたい。

従来の調査成果の概要

第30次調査では今回の調査地の東約35mの地点で、掘立式の八脚門 S B1000 を検出した。この門は柱穴のうち9個が検出され、桁行2.7m・4.0m・2.7m、梁行2.7m等間と復原できるものであった。また、門の柱抜取穴から政府第III期の瓦が出土しており、S B1000 門は第III期以降に廃絶していること、さらに、この門が残存する西辺築地の内側約35

mに位置することから、東門と同様に築地がコの字状に内側に折れ込み、西門に取り付くであろうと想定した。

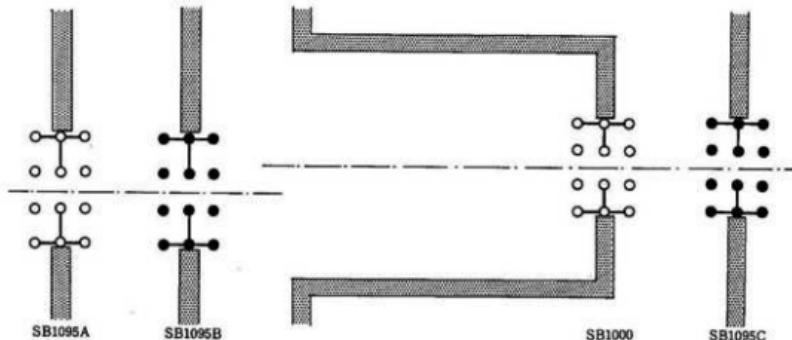
第33次調査では第30次調査の成果を基に、西辺築地がコの字状に内側に入り込むかどうかの確認を目的の一つとして、SB1000門の北半にあたる地域を調査した。その結果、東西に延びる築地の基礎地業かとみられる施設を検出した⁽⁴⁾。また、同調査では西辺築地線上で1個の礎石据穴(SB1095C)を発見し、この付近には第IV期の瓦が集中することから、外郭西辺築地に直接取り付く第IV期の門の存在を想定するに至った。

西門の変遷と年代

第46次調査で、外郭西辺築地線上でSB1095A・B・C門が発見されたことにより、内側に入り込んだ位置にあるSB1000門と合わせて4時期の外郭西門が存在することが明らかになった。そこで、SB1000とSB1095A・B・Cの前後関係を検討する。

まず、SB1000の廃絶年代とSB1095Bの構築年代との関係をみると、SB1000の柱抜取穴には第III期の瓦が含まれるのに対し、SB1095Bの礎石据穴から出土した瓦は第II期に限られ第III期のものを含まない。このことからSB1000の廃絶はSB1095Bの構築より新しい時期とみられ、SB1000はSB1095Bより新しい門と考えられる。SB1000とSB1095Cとの前後関係については、これを決める直接的な資料はないが、西辺築地線上のSB1095BとSB1095Cの間に門のない時期(d期)があることを重視すれば、この時期に門の位置が移動し、西辺築地線の内側で検出したSB1000がこれにあたる可能性が高いものと思われる。

以上により、外郭西門はSB1095A→SB1095B→SB1000→SB1095Cの順に変遷したものと考えられる。各門の構造・位置・年代をまとめておくとつぎのようになる。



第24図 外郭西門変遷図 (○掘立式 ●礎石式)

S B1095A：掘立式八脚門で、西辺築地線上に位置する。構築は8世紀後半、廃絶は8世紀末頃とみられる。

S B1095B：礎石式八脚門で、S B1095Aに連続して同位置・同規模で建て替えられている。構築は8世紀末頃、廃絶は9世紀中頃以前とみられる。

S B1000：掘立式八脚門であり、西辺築地線より約35mの内側に位置し、門の南妻はS B1095Bの南妻より北に約5.6m寄っている。構築年代は前項で述べたd期の年代観から9世紀中頃から9世紀後半までの間とみられる。

S B1095C：礎石式八脚門であり、位置は再び西辺築地線上に戻っているが、門の東西中心線はS B1000と一致し、その南妻はS B1095B南妻より北に約5.6m寄っている。構築は9世紀末頃を中心とした時期で、廃絶は10世紀前半以前とみられる。

註1 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡－政府跡本文編－』1982

註2 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡－昭和52年度発掘調査概報告－』宮城県多賀城跡調査研究所年報1977 1978

註3 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡－昭和53年度発掘調査概報告－』宮城県多賀城跡調査研究所年報1978 1979

註4 この施設はS B1000門の北西で検出した東西に延びる積土層であり、第33次調査ではこの北縁がS B1000門の北妻に平行することなどから、西辺築地から内側にコの字状に折れ曲がってS B1000門に取り付く築地の基礎地業と考えた。しかしながら、このほかに道路の北肩の施設の可能性もあると思われ、現段階ではその性格付については保留しておきたい。

III 第48次調査

1. 調査経過

多賀城跡第48次調査は多賀城市市川字田屋場40-1、42-2、53の約800m²を対象として昭和60年4月22日から11月22日まで実施した。この地区は政府地区的東南部から南へ延びる細い尾根の南端にあたり、政府南門跡から南約310mの位置にある。この地区を対象とした昭和44年度の第7次調査により多賀城外郭の南門跡の東端部とその東へ延びる築地跡が検出されている。⁽¹⁾

第7次調査では南門の東妻とみられる礎石据穴3個を検出し、2時期の重複があることを確認し、両時期の門とも政府中軸線を基準に東西対称のものとすると八脚門になると想定された。また、その東では築地積土1、寄柱穴1、寄柱礎石1を検出し、築地跡に3時期の重複があることを確認した。これらの組み合わせの検討により、南門と築地には、(1)門跡不明・SF202A築地跡(積土と寄柱穴)→(2)礎石式のSB201A門跡・SF202B築地跡(寄柱礎石)→(3)礎石式のSB201B門跡・築地不明→(4)門跡不明・SF202Cという変遷があり、(1)~(4)はそれぞれ政府の第I期~第IV期に対応するものと考えることができた。ただし、調査区の制約により(2)(3)の門の規模・構造は推定に留まり、(1)と(4)の門の把握ができなかつた。

今回の調査の目的は、第7次調査で充分な把握ができなかつた門の規模・構造・変遷を解明するとともに、門跡の西方に残る築地状高まりの構造・変遷を把握することにあつた。

4月22日から樹木の伐採などの準備作業にかかり5月2日には地区設定を行って、東半部(南門周辺部)の表土の除去を開始した。ついで表土下の第2層の上面で遺構がないことを確認した後、これを除去した(以下第25図参照)。

6月8日から南門跡の精査にかかり、新たに3個所の礎石据穴を検出し、SB201Bが予想通り八脚門であることが判明した。これより古いSB201A礎石据穴については第7次調査で検出した1個以外に遺存しておらず、規模の確定は困難かと思われた。両門跡の検出面の検討を行った結果、東半ではSB201Aが【状のSX205掘込地業上に構築されていることが知られたが、西半部では基礎地業の存在を確認したもののその輪郭ははつきりしなかつた。また、これと並行して進めた東の築地跡の再検出で、第7次調査の際に第I期とみた築地積土の下から東西に並ぶ2個の大きな柱穴(SA1538)を発見したことにより、第I期とした築地より古い区画施設がある可能性が出て來た(後日柱穴を覆うこの築地積土は第III期以降のものと判明)。この段階で記録する必要が生じたため、7月12日か

ら遺り方を設定し、実測・写真撮影を行った。

8月9日からは門の西半部付近の精査を再開し、門の西半の基礎地業には■形のものと、この西に接して新しく掘り込まれたト形のものがあることを確認した。前者は門東半のSX205と対称の形をなすことからこれと一連のものとみられ、SB201Aの基礎地業であるSX205の全体形は■となること、後者はその西に新たに継ぎ足すかたちで行われており、SB201Bの基礎地業(SX1551)と考えられた。また、SX205の上面で、東方の築地下層で検出したSA1538柱列と一連とみられる柱穴を検出し、これがSB201Bの礎石据穴に切られることを確認した。これにより、SA1538柱列はSB201AとSB201Bの間の時期のものであること、創建期とみた東の築地積土がSA1538柱列以降のものであることが知られた。このほか門の周辺で多数の土壙(SK1547・1550など)や溝(SD1543・1548など)を検出した。

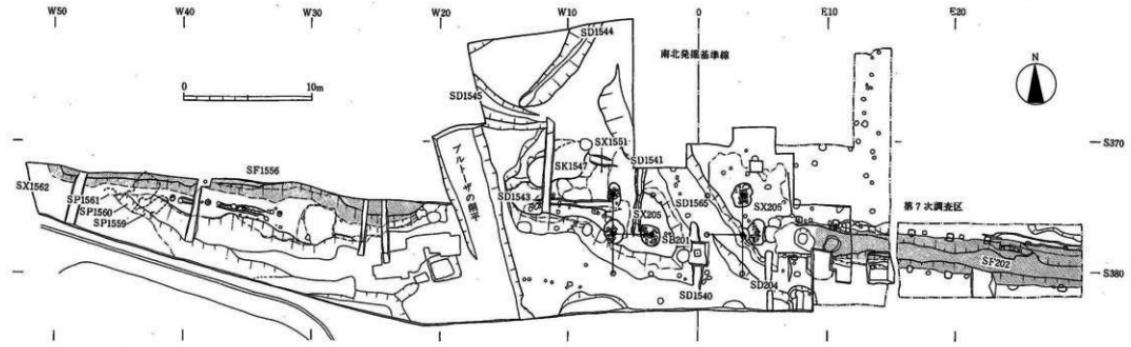
その後、SX205基礎地業を部分的に除去した結果、下層の地山面で柱穴1個(SA1536)を検出した。創建期の南門跡かと思われたが、築地との位置関係が不自然であり、また残存状況が悪いため、断定できなかった(10月10日)。

一方、門の東側では築地の変遷および門との関係を把握するため10月4日から東側に調査区を拡張し、その精査および築地積土の断ち割りを実施した。その結果、築地跡には地山面に構築されたSF202A(寄柱穴)→SX205基礎地業上に構築されたSF202B₁(積土と南側寄柱礎石)→SX1539基礎地業上に構築されたSF202B₂(積土と北側寄柱礎石)という変遷があること、SA1538柱列はSF202B₁とSF202B₂の間の時期のものであること、SF202B₁積土下の地山面に性格不明の小柱穴群が見られることなどが知られた。また、SF202B₁がSB201A門と同様にSX205上に構築されていることから両者は同時期のものと理解され、これより新しいSF202B₂はSB201B門に組む可能性が高まった。その後第7次調査で検出していた築地跡との関係を整理するため、さらに東方に小地区を設定して補足調査を実施し、10月24日には南門跡と東側の築地跡の調査を終了した。

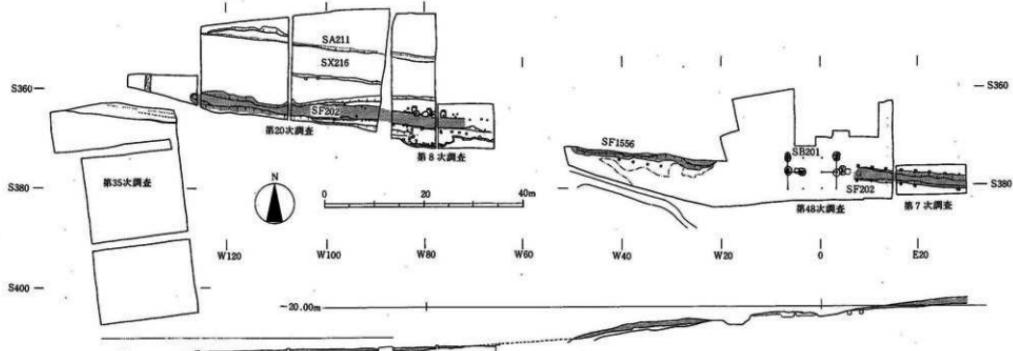
調査区の西半部については、6月から東半部と並行して表土除去にかかり、SX1562築地基礎地業やその上に構築された新旧の築地積土(SF1556A・B)および寄柱穴(SA1557)などを確認したほか、8月30日には調査区の西端で築地基礎地業の下層から横穴墓を3基発見した。9月3日より築地跡の平面実測(1/100)・写真撮影を行った後、寄柱や南側に認められた堆積層の検討などの補足調査を実施し、側面図・断面図の作成をした。

横穴墓については、10月2日より精査を開始し、堆積層を順次除去していった。その結果、西側のSP1561は遺存状況が極めて悪いが、東側のSP1559・1560は玄室と羨道が遺存することが知られた。また、両横穴墓では玄室を中心として整地層が認められ、さらに

〔第48次調査区全体図〕



〔第7・8・20・35・48次調査発見造構略図〕



第25図 第48次調査発見造構

その下で前方に広がる炭化物層の上面では完形に復原できる土器が多数発見された。両横穴墓にみられた炭化物層上面の土器群は追葬に関するものと思われた。ついで床面の精査を行い、S P 1560 の羨道部で上下に重ねられた完形の須恵器平瓶と土師器杯を発見したが、これ以外の遺物はみられなかった。11月15日から横穴墓の最終的な実測・写真撮影を行い、22日に埋め戻しを除く一切の調査を終了した。

なお、南門と築地の構造と変遷について一応の見通しが得られた9月12日に報道機関に調査成果を発表し、14日には一般を対象とした現地説明会を開催した。

註1 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡－昭和44年度発掘調査概報一』(宮城県多賀城跡調査研究所年報1969) 1970 P.5

宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡－昭和45年度発掘調査概報一』(宮城県多賀城跡調査研究所年報1970) 1971 P.10~12、40・41

2. 基本層序

本調査区の南半は全体に大規模な削平を受けており、表土(第1層)下はすぐ地山(第4層)であるが、破壊を免れた北半の基本層序は、その東半部で第1層、第2層、地山であり、西半部では第1層、旧表土(第3層)、地山であった。

第1層：厚さ10~30cmの表土である。

第2層：東半部のうち西側を中心として東西15m、南北18mの範囲(EW0~W15m、S361~S379m)に分布する厚さ10~30cmの暗褐色土である。この上面では遺構は検出されていない。出土遺物から近世以降の堆積層とみられる。

第3層：旧表土で、西半部のうち東側を中心として東西12m、南北4mの範囲(W22~34m、S374~378m)に分布する厚さ15cm未満の黒褐色土である。層中に極めて小さな土器の破片が含まれていたが、土器の種類を限定するに至らなかった。

第4層：地山で、黄褐色粘質土とその下の黄橙色凝灰岩からなる。粘質土はW3~W39mまでの範囲にみられるが、その西では凝灰岩が露出している。岩盤のレベルは西に向かってかなり低くなる。

なお、このほかに門や築地の基礎地業、整地層、堆積層があるが、遺構と関連するものであるため、これらの説明は次項で行うこととした。

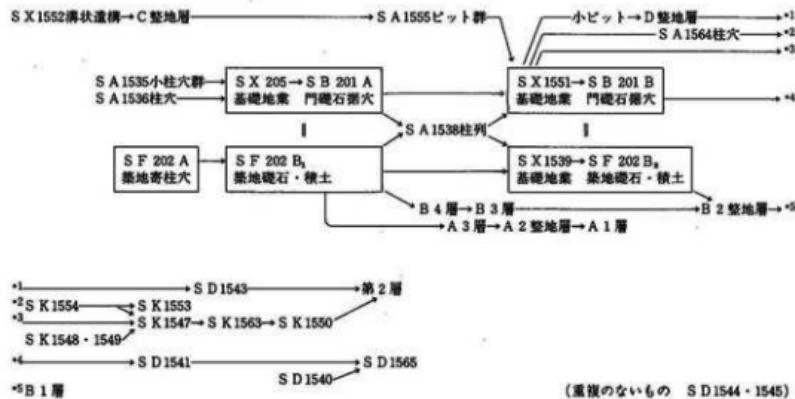
3. 発見された遺構と遺物

今回発見した遺構には、門跡、築地跡、横穴墓のほか多数の土壙・溝などがあり（第25図）、出土遺物には多量の瓦のほか、若干の土師器、須恵器、須恵系土器、陶磁器、鉄器、石器がある。

遺構は調査区南半を中心で大きく削平され、また、ブルドーザーによる南北方向の溝状の削平により東西に分断されており、東と西の遺構の対応関係が不明確である。このため以下では門跡を中心とする東半部と築地跡のある西半部とに分けてそれぞれの遺構と出土遺物を述べ、最後に第1・2層の出土遺物について記すこととした。

(A) 東 半 部

東半部で検出した遺構には、門跡、築地跡、門や築地の基礎地業、柱列跡、多数の土壙、溝などがあり、下図のような重複関係がみられた。これらの検出面は地山、基礎地業ないし整地層であり、第2層より新しいものはない。

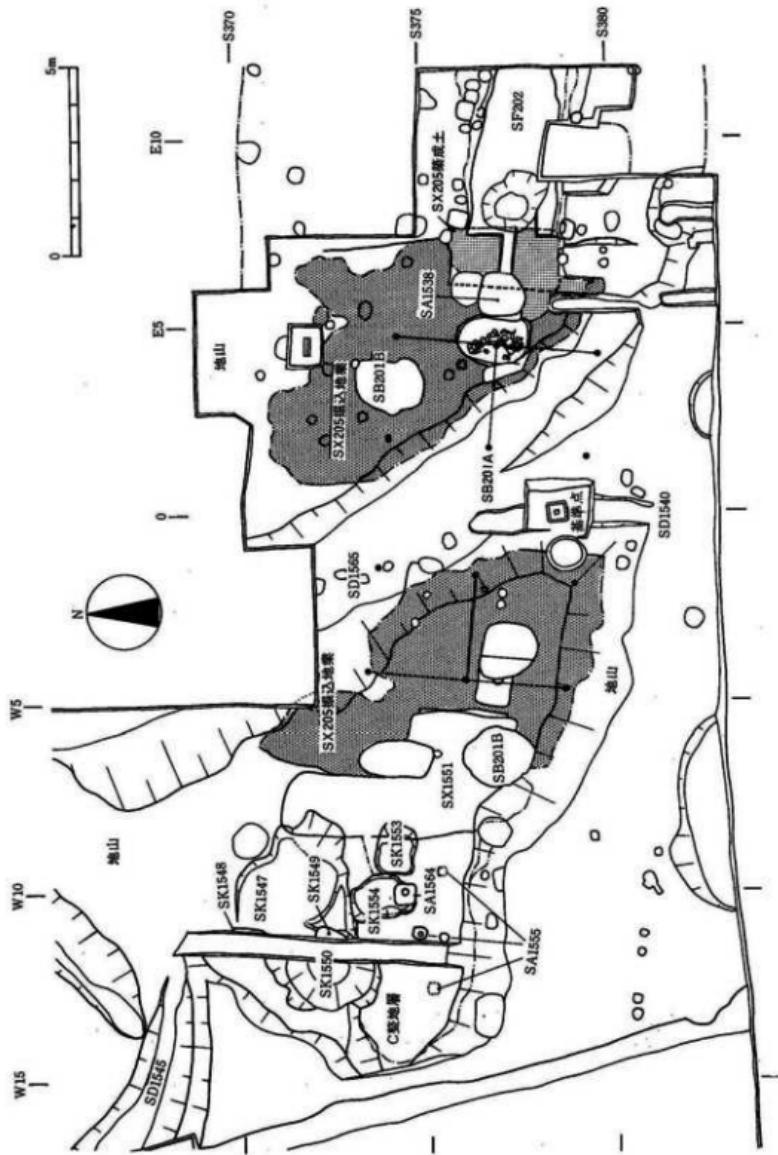


第26図 東半部遺構の重複関係模式図

以下、(1)門跡、(2)築地跡と両側の堆積層、(3)その他の遺構・整地層の順に記載する。

(1) 門 跡

外郭南門跡は、ほぼ南北発掘基準線上で政庁南門跡から南約310mの位置で検出された。門跡には、S X 205 基礎地業の上面で検出した礎石式の S B 201 A と S X 1551 基礎地業の上面で検出した礎石式の S B 201 B がある。門跡には S B 201 A → S B 201 B、基礎地業



第27図 SB201A門跡と周辺の遺構

にはS X205→S X1551という重複がみられ、両基礎地業は層位関係および門の礎石据穴との位置関係などからみてそれぞれSB201A、SB201B門の基礎地業と考えられる。

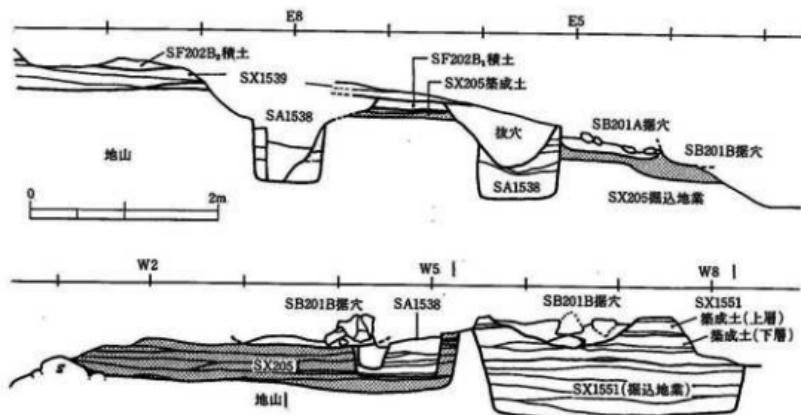
したがって、門にはSB201A→SB201Bという2時期の変遷があったことが知られる。

なお、S X205の下層の地山面でSA1536柱穴を、また、S X205の上面でSB201Aの礎石据穴より新しく、SB201Bの礎石据穴より古いSA1538柱列を検出しているが、もに門跡とは考えにくいため、(3)その他の遺構で扱うことにする(第37・38図)。

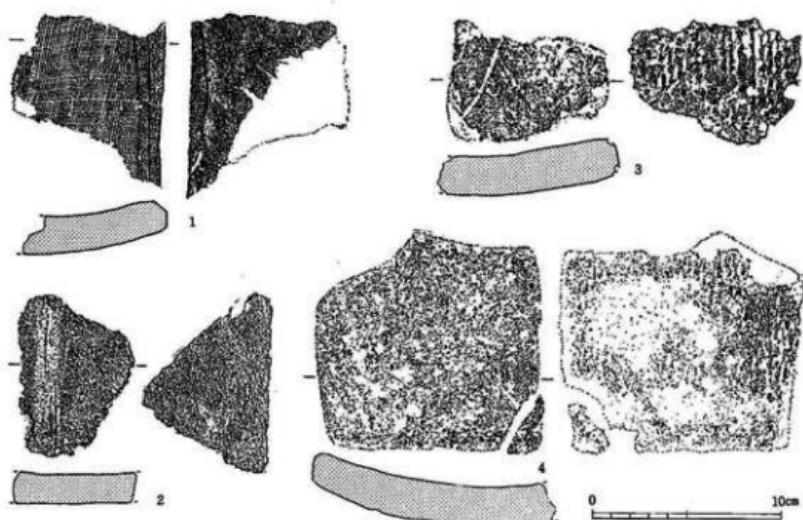
S B201A門跡・S X205基礎地業(第27図、図版7~9)

SB201AはS X205基礎地業の上面で検出した1個の礎石据穴から確認した礎石式門跡であり、S X205はその基礎地業である。SB201AはSA1538柱列跡、SB201B門跡と重複し、これらより古い。また、S X205はSA1535小柱穴群、SA1536柱穴(以上第37図)、SA1538柱列跡、S X1551基礎地業と重複し、SA1535、SA1536より新しく、SA1538・S X1551より古い。

S B201A: 級石据穴はS X205の掘込地業の東辺がコ状に内側へ入り込む部分からさらに0.5m程内側の位置にあり、掘込地業の東端との距離関係および築地跡との位置関係からみて東妻で棟通り下の礎石据穴と考えられる。S X205の掘込地業の形がほぼ東西対称の~~コ~~とみられることを考慮すると、西妻の据穴もやはり掘込地業の西辺がコ状に内側へ入り込む部分から0.5m程内側の位置にあったものと推定される。これによりこの門の東西規模は9m程で、桁行3間の門と推定することが妥当かと思われる。南北の規模はS



第28図 S X205基礎地業の東西断面図



第29図 南門・基礎地業の遺物

X205の規模から梁行2間と推定される。以上のようにS B201Aは極めて遺存状況が悪いが、掘込地業との位置関係から八脚門とを考えることができる。その場合、方向は発掘基準線に対し東で6°前後南に偏していたものと推定される。

礎石据穴は長径1.9m、短径1.3mの楕円形で、深さ約20cmである。内部には径20cm前後の根石が遺存している。埋土から遺物は出土していない。

S X205：地下の掘込地業部分と地上の基壇築成土部分からなる（第28図）。

掘込事業は東西に二分されているが、全体で東西約14.3m、南北は棟通り下の据穴から北に6.0m、南に3.5mの範囲で地業土が遺存している。東半部の東辺と西半部の西辺では、ともに内側に南北約3.0m、東西1.3～1.9mの範囲が□ないし□状に掘り残されており、当初の掘込地業の形は、東西の中央にみられる幅約2mの掘り残し部分を挟んで東西ほぼ対称の△□と推定することができる。深さは南西部分が0.6mと最も深く、北東に向かって次第に浅くなる。深さが一定でないのは、安定した岩盤に到達するまで掘り下げたためとみられる。地業土は厚さ5～10cmを単位とし、黄橙色土や明褐色土を用いて版築されている。

築成土は、掘込地業の東辺の掘り残し部分を中心として東西2.5m、南北4.0mの範囲

に認められ、東端は掘込地業の範囲をこえ約30cm東まで延びている。西はS B 201Aの礎石据穴まで分布するが、これとの前後関係は判然としなかった。厚さは約15cmで、灰黄褐色砂質土や明褐色粘質土を用いて版築されている。

遺物は築成土のみから出土しており、平瓦I A類2点（第29図2）、I B類1点（1）、丸瓦3点がある。いずれも政庁第I期のものである。

S B 201B門跡・S X 1551基礎地業（第30図、図版7～10）

S B 201Bは、S X 1551・S X 205基礎地業の上面で検出した5個の礎石据穴から確認した門跡であり、S X 1551はその基礎地業である。S B 201BはS B 201A門跡、S A 1538柱列、S D 1543溝（第25図）と重複し、S B 201A、S A 1538より新しく、S D 1543より古い。また、S X 1551は多数の遺構と重複し、S X 1552溝状遺構、C整地層、S A 1555ピット群（第27図）、S X 205基礎地業より新しく、D整地層、S A 1564小柱穴（第27図）、S K 1547・1554土壤、S D 1541・1543溝より古い。

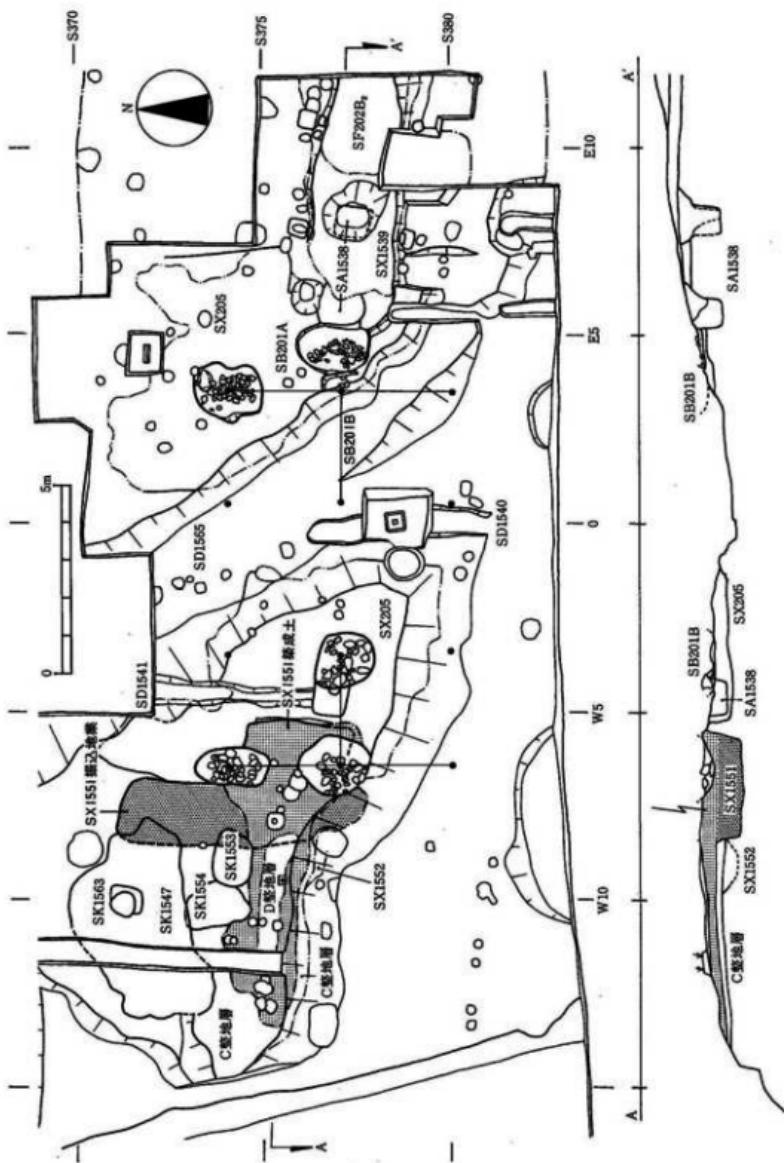
S B 201B：遺存状況は悪いが、S F 202築地およびS X 1551との位置関係から南側の3個の礎石据穴は棟通り下のもの、北側の2個の据穴は北側柱列のものと考えられ、八脚門と推定される。礎石据穴のほぼ中心に柱位置を想定すると、桁行総長約9.9mで、柱間は中央間が約3.9m、両脇間が約3.0m、梁行柱間は約3.0mで、総長約6.0mとみられる。方向は東西発掘基準線とほぼ一致している。礎石据穴は長径1.8m前後の楕円形で、深さは最大30cmである。内部には径20cm～40cmの根石が遺存している。いずれの据穴埋土にも焼土ないし焼瓦が含まれていた。

埋土から出土した遺物には、政庁第I期の平瓦I B類1点、第II期のII B類3点（第29図3・4）、丸瓦2点、須恵器甕の体部破片4点がある。

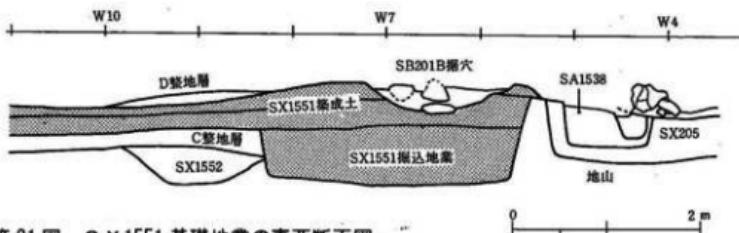
S X 1551：S B 201Bの西妻付近から西側にのみ行われた基礎地業で、掘込地業部分とその上にのる築成土部分からなる（第31図）。

掘込地業は南半が完全に削平されているため現状の平面形がL字形に近いが、当初の形はD形であったと推定される。西側の溝状部分の規模は東西幅1.6m、南北6.7m以上、東の突出部は東西1.6m、南北2.7m前後である。この東辺はS X 205基礎地業の西辺にほぼ接し、両基礎地業の凹凸が組み合っている。これは、S B 201BがS B 201Aより西に約1m寄せて構築されたのに伴い、以前のS X 205を利用しながらその西側に地業を拡張する形で行われたためと考えられる。掘り込み面のレベルは東端が西端より約30cm高く、深さは東端で90cm、西端で60cmである。地業土は明黄褐色土や淡黄色土を用いて厚さ5～20cmの単位で版築されている。遺物は出土していない。

築成土はS B 201Bの西妻棟通り下の礎石据穴付近から西へ帯状に延びる層で、掘込地



第30図 SB201B門跡と周辺の遺構



第31図 SX1551基礎地業の東西断面図

業の東端から西 8.2mまで分布する下層と、下層の中ほどから掘込地業の東端より若干東まで分布する上層からなる。厚さは下層が約 25cm、上層が約 15cm の計 40cm であり、明褐色土、淡黄色土、灰白色土、暗褐色粘質土などを用いて版築されている。遺物は出土していない。

なお、この築成土は SB201B の西妻より西へ 7m の位置まで延びていることから、門の基壇築成土であるとともに、門の西側に取付く築地の基礎地業でもあったと考えられる。

(2) 築 地 跡

門東側の築地の遺構としては、SX1539 基礎地業下で SX205 基礎地業の直上にのる旧積土と SX1539 上の新積土、積土の両側で地山面検出の寄柱穴、積土南側で寄柱穴の上にのる寄柱礎石、積土北側で SX1539 上にのる寄柱礎石がある。また、築地南側には A1～A3、B1～B4 の堆積層がみられた。このうち新積土と北側の寄柱礎石はともに SX1539 の直上にのることから、SX1539 を基礎地業として構築された最も新しい築地跡と考えられる。南側の寄柱礎石については、北側の礎石と対の位置にあるものの、旧積土の基礎地業である SX205 と同様に焼土を多量に含む A2 整地層に直接覆われることから、旧積土に伴うものとみられる。寄柱穴は南側の寄柱礎石より古いもので、これと組む積土は残っていない。

以上により、この築地には寄柱穴→旧積土と南側の寄柱礎石→新積土と北側の寄柱礎石という3時期の変遷があったものと考えられる。以下では古い順に SF202A、SF202B₁、SF202B₂として記載する。

なお、第7次調査では、寄柱穴と積土全体を SF202A、南北の寄柱礎石を SF202B、東方（今回の調査区外）で確認した SF202B の崩壊土上に敷かれた2条の瓦列から推定した築地を SF202C として理解したが、再調査の結果に基づき SF202A・B の遺構把握および名称を上記のように変更した。また、SF202C については今回対応する明確な築地遺構を確認できなかつたため、最後に触れることとした。

S F 202A 築地跡（第32図）

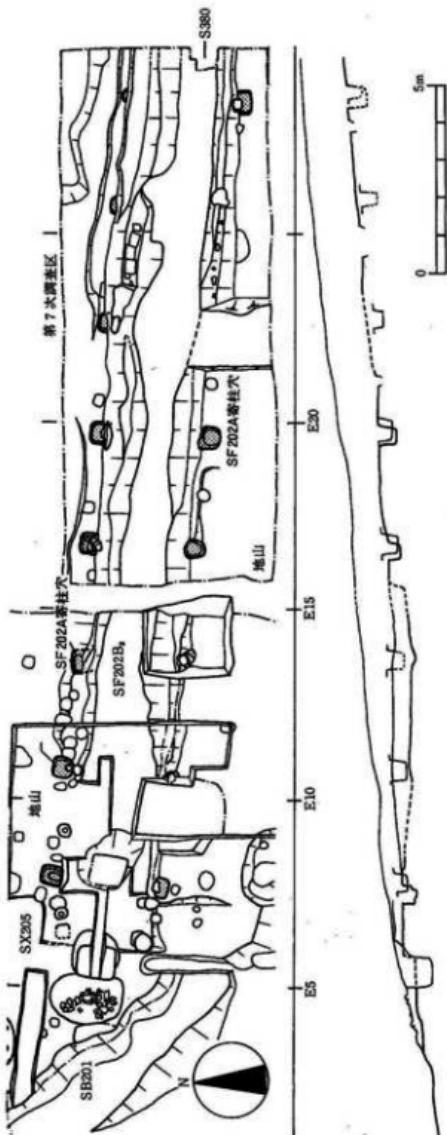
S F 202Aは地山面で検出した寄柱穴により確認した最も古い築地跡である。この寄柱穴はS F 202B₁の寄柱礎石、S X 1539 基礎地業と重複し、これらより古い。

寄柱穴は今回北側の2個と南側の1個を再検出しており、一辺約0.5mの方形で、深さは約0.4mである。北側2個では楕円形の抜き取り穴を確認した（第36図）。築地の基底幅は南北の寄柱穴の間隔から約2.7mとみられる。桁行柱間は第7次調査で確認した東方の寄柱穴を合せると3.0m等間とみることができる。方向は東西発掘基準線に対し東で6°強南に偏している。柱穴検出面のレベルは西端が東端より1.3m低く、約4°の傾斜を持つ。また、南北でもレベル差があり、南側が0.1~0.3m低い。なお、西への延びについてはS X 205や後世の削平のため不明であった。

遺物は寄柱穴の抜き取り穴から丸瓦が1点出土したのみである。丸瓦は胎土、焼成などからみて政庁第I期のものとみられる。

S F 202B₁ 築地跡（第33図、図版11・12）

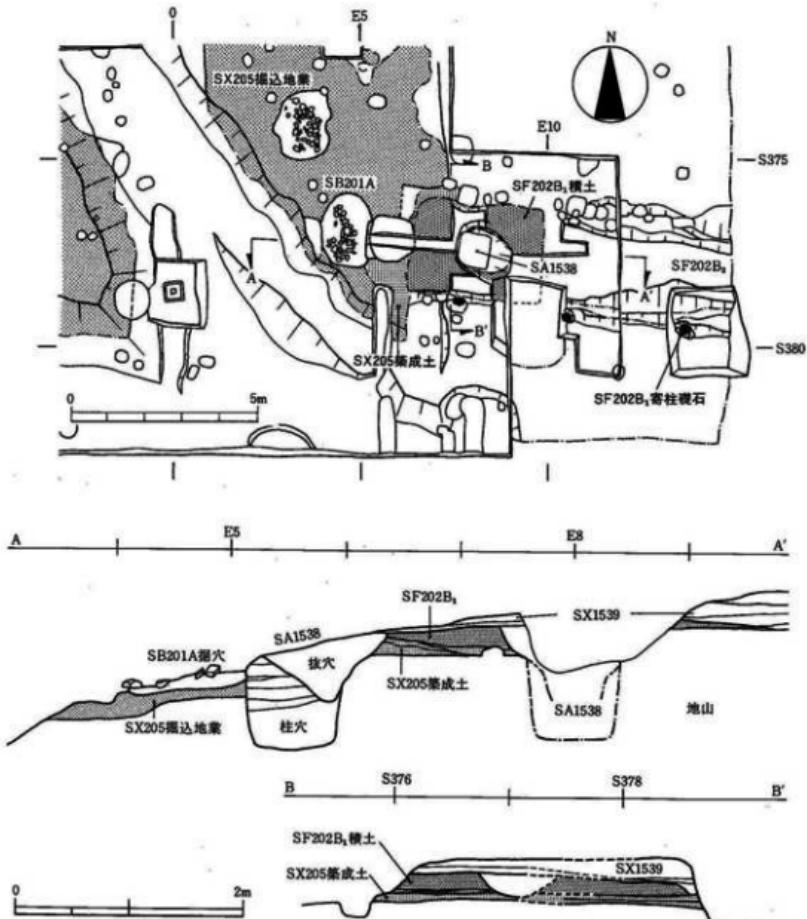
S F 202B₁は部分的に遺存する積土とその南側で検出した寄柱礎



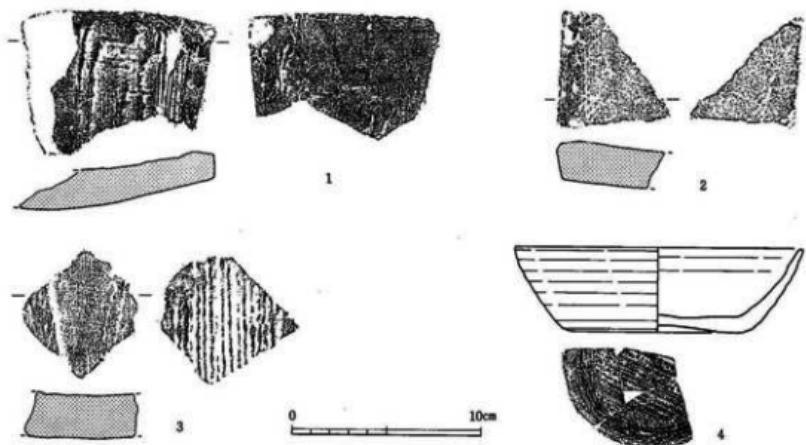
第32図 S F 202A 築地跡

石により確認した築地跡である。積土は S A 1538 柱列、S X 1539 基礎地業と重複し、これらより古い。また、寄柱礎石は S F 202A の寄柱穴、A 2 整地層と重複し、S F 202A より新しく、A 2 整地層より古い。

積土は最大の幅 2.6m、高さ 15cm で、東西 3.7m の範囲 (E 6 ~ 9.7) に遺存している。構築面は、E 7.5m を境に西側では S X 205 の築成土上面、東側では地山面である。積土



第 33 図 S F 202B₁ 築地跡と S X 205 基礎地業



1	S F 202B1 積土	平瓦 I A型	3	S F 202B1 積土	平瓦 II 各型	
2	S F 202B1 積土	平瓦 I B型	4	S X1539 亂磧地業	亂磧器坪	静止系切り

第34図 築地積土基礎の遺物

は黄褐色土で、こまかい層の状況はみられなかった。なお、E 7.5~15mの範囲では積土の南縁以南の地山が深さ 20~50cmで削平され、積土南縁に沿った段が形成されている。この削平部分では前述した S F 202A の寄柱穴が遺存していないことと、S F 202B1 寄柱礎石がこの削平面に据えられていることからみると、この段の形成は S F 202B1 の構築に伴うものと考えられる。

寄柱礎石は今回 E 10.5 と E 13.5m 付近で 2 個再検出した。長径 25cm 前後の楕円形の自然石で、ともに上記の削平面に浅い穴を掘って据えられており、この北に接する地山の段は寄柱の当たる部分が抉られている。桁行柱間は約 3.1m で、築地の基底幅は、北側寄柱礎石を検出していないため明確でないが、南側寄柱礎石と積土の北端との距離から 2.7m 程と思われる。

第7次調査では、両礎石の西 1 間目と東 5 間目の位置で寄柱礎石を検出している。西の礎石はレベルからみてこの築地に伴うことが明らかであり、東側の礎石についても、S F 202A の寄柱穴の直上にあり、方向や桁行柱間からみた位置関係に矛盾が無いことからやはり同時期とみてよいであろう。この場合、桁行柱間は平均 3.0m となり、方向は発掘基準線に対し東で約 6° 南へ偏している。寄柱礎右上面のレベルは、西 3 個はほぼ同じであるが、この東 15m にある礎石はこれらより 1.7m 高くなる。

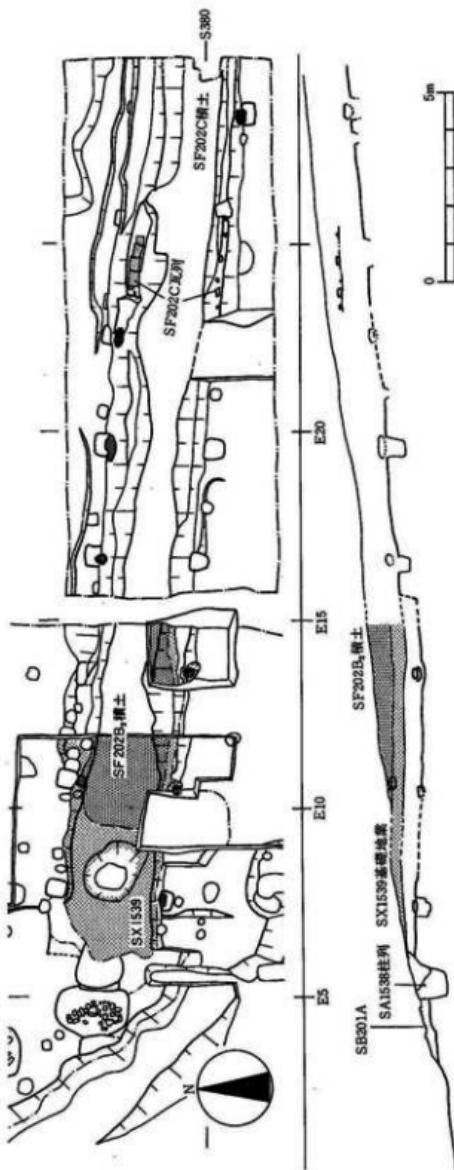
遺物は積土から若干出土しており、丸瓦3点、平瓦IA類4点（第34図1）、IB類1点（2）、IAないしIB類1点、II B類2点（3）がある。IA・IB類は軒平瓦511に、II B類は軒平瓦660に組むもので、すべて政府第I期のものである。

S F 202B₂ 築地跡・S X 1539 基礎地業（第35・36図、図版12）

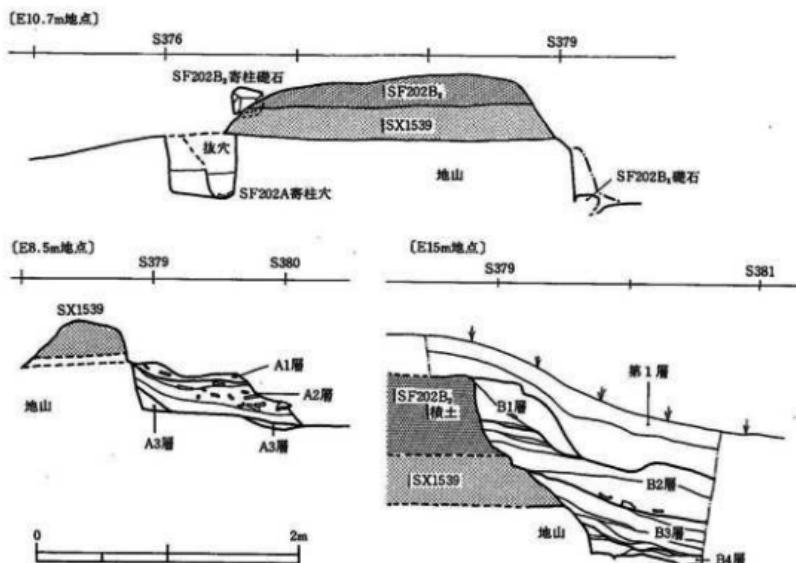
S F 202B₂は、S X 1539基礎地業上に構築された積土と北側の寄柱礎石から確認した築地であり、S X 1539はその基礎地業である。積土はB2整地層と重複し、これより古い。S X 1539はS F 202Aの寄柱穴、S F 202B₁の積土、S A1538柱列、B2整地層と重複し、S F 202A、S F 202B₁、S A1538より新しく、B2整地層より古い。

S F 202B₂：積土はE9.5からE15mまでの範囲で遺存している。最大の幅2.1m、高さ0.6mで、均質な黄褐色土が用いられており、版築の層は顕著ではない。第7次調査で検出している東方の築地跡の大部分はレベル関係からみてこの時期のものと思われる。遺物は出土していない。

寄柱礎石は今回北側の1個を検出した。長径25cm程の自然石で、



第35図 S F 202B₂・C 築地跡



第36図 S F 202B₂築地跡と南側の堆積層

S X 1539 基礎地業の上に浅い穴を掘って据えられている。この礎石と積土の南端の距離からみて、築地の基底幅は約 2.4m とみられる。

第7次調査ではこの東方に3個の寄柱礎石を検出している。この延長線上に S F 202B₂ の礎石が位置していることや、柱間・方向が S F 202B₁ と若干異なることからみて、これらは S F 202B₂ の時期のものである可能性が高い。この場合、S F 202B₂ の桁行柱間は西から 5.95m (2間分) · 2.97m · 2.95m で、平均は 2.97m となる。方向は東西発掘基準線に対し東で約 5° 南へ偏している。礎石上面レベルは西端が東端より 0.5m 低い。

S X 1539 : E 6 ~ 15m の範囲で確認した最大幅 3.2m、厚さ 0.5m の基礎地業であり、東は調査区外に延びている。この南端は積土の南端よりやや外側に位置している。一方北端は寄柱礎石より 0.7m 北まで延びており、犬走り状の段を形成していた可能性がある。地業土は黄色凝灰岩ブロックや黄橙色砂質土などを用いて互層に積んでいる。

遺物は須恵器杯 1 点が出土した (第34図4)。この杯は静止糸切りの後、周縁を回転ヘラケズリしたものであり、内面に磨耗痕と墨の付着がみられ転用硯と考えられる。

S F 202 の両側の堆積層 (第36図)

S F 202 の両側の堆積土は第7次調査の際大部分が除去されているが、今回南側に残さ

れた2箇所の畔で断面観察が可能であった。以下ではE8.5mとE15mの位置での南北断面図をもとに説明する。なお、第7次調査の記録によると、北側には表土下に築地の崩壊土が堆積していたことが知られるが、詳細は不明である。

〔E8.5m地点の堆積層〕

表土下の堆積層は上からA1～A3の3層に大別される。いずれもSF202B₁に伴う地山削り出しによる段の形成後に堆積したものであるが、SF202B₂との前後関係は把握できなかった。

A1層：厚さ10cm程の自然堆積層であり、瓦片を含む。

A2層（A2整地層）：厚さ40cm程の整地層であり、上層の焼土、炭、瓦片を少量含む暗褐色土、中層の焼土、炭、瓦片を多量に含む褐色土、下層の混入物のない黄褐色土からなる。層中に多量の焼土などを含むことと、直下のA3層上面が焼けていることから、この整地層は火災の直後に形成された可能性が高いと考えられる。

なお、第7次調査の記録によると、この層は門の南東に東西約5mの範囲で分布していたこと、SF202B₁の寄柱礎石、SX205基礎地業を直接覆っていたことが知られる。また、その際出土した遺物としては多量の瓦がある。このうち軒瓦と文字瓦についてみると、軒丸瓦には222が1点、241が1点の計2点があり、軒平瓦には511が3点、640が3点、660が1点の計7点がある。刻印の文字瓦には物Aの平瓦が4点、物Cの平瓦が1点、矢Aの平瓦が1点、丸Aの平瓦が1点、文字不明の丸瓦1点の計8点がある。これらのうち軒平瓦の511と660は政庁第I期のものであり、他はすべて第II期のものである。

A3層：地山削り出しによって形成された段の裾と地山面の部分的なくぼみにみられた薄い自然堆積層である。南半部で上面が焼けている状況が観察された。遺物は含まれていない。

〔E15m地点の堆積層〕

表土下の堆積層は上からB1～B4の4層に大別される。E8.5m地点の堆積層と同様にいずれもSF202B₁の構築に伴う地山削り出しによる段の形成後に堆積したものである。各層と西のA1～A3層との関係ははつきりしない。

B1層：SF202B₂の積土のきわにみられた厚さ30cm程の自然堆積層で、SF202B₂構築以降の崩壊土と考えられる。層中には瓦片や土器片を少量含む。

B2層：(B2整地層)：明褐色砂質土や極暗褐色砂質土を用いた厚さ30cm程の整地層である。築地ぎわの上面レベルがSF202B₂の積土基底面より約25cm高いことから、この整地層はSF202B₂より新しい時期のものとみられる。層中には軒平瓦640など若干の瓦を含む。

B 3 層：厚さ 25cm 程の自然堆積層で、S X1539 より新しいことから S F202B₂構築後のもとのと考えられる。

B 4 層：岩盤上にのる厚さ 7 ~ 20 cm の層で、S F202B₁の寄柱礎石との関係はとらえられなかつたが、その構築に伴う整地層の可能性がある。

以上のように築地南側の堆積層はすべて S F202B₁以降のもので、B 1 ~ B 3 層は S F202B₂よりも新しいことが知られた。このうち B 2 層は、S F202B₂構築後に築地ぎわに自然堆積した B 3 層の上に盛土された整地層であることから、S F202B₂より新しい時期の築地修復に伴つてなされた犬走りの嵩上げ土である可能性が強い。

第 7 次調査の S F202C (第 35 図)

第 7 次調査では、今回の調査区の東方で S F202B の崩壊土上に南北 2.1m の間隔で並行する 2 条の瓦列を検出したことにより、S F202B より新しい時期に基底幅約 2.1m の築地が構築されたと推定し、これを S F202C とした。

第 7 次調査で S F202B とした築地は今回の S F202B₂ にあたるとみられ、また、瓦列のレベルが付近の S F202B₂ の寄柱礎石より約 0.8m も高いことから、この瓦列はやはり S F202B₂ 以後の最も新しい築地の時期のものとみて差支えないであろう。

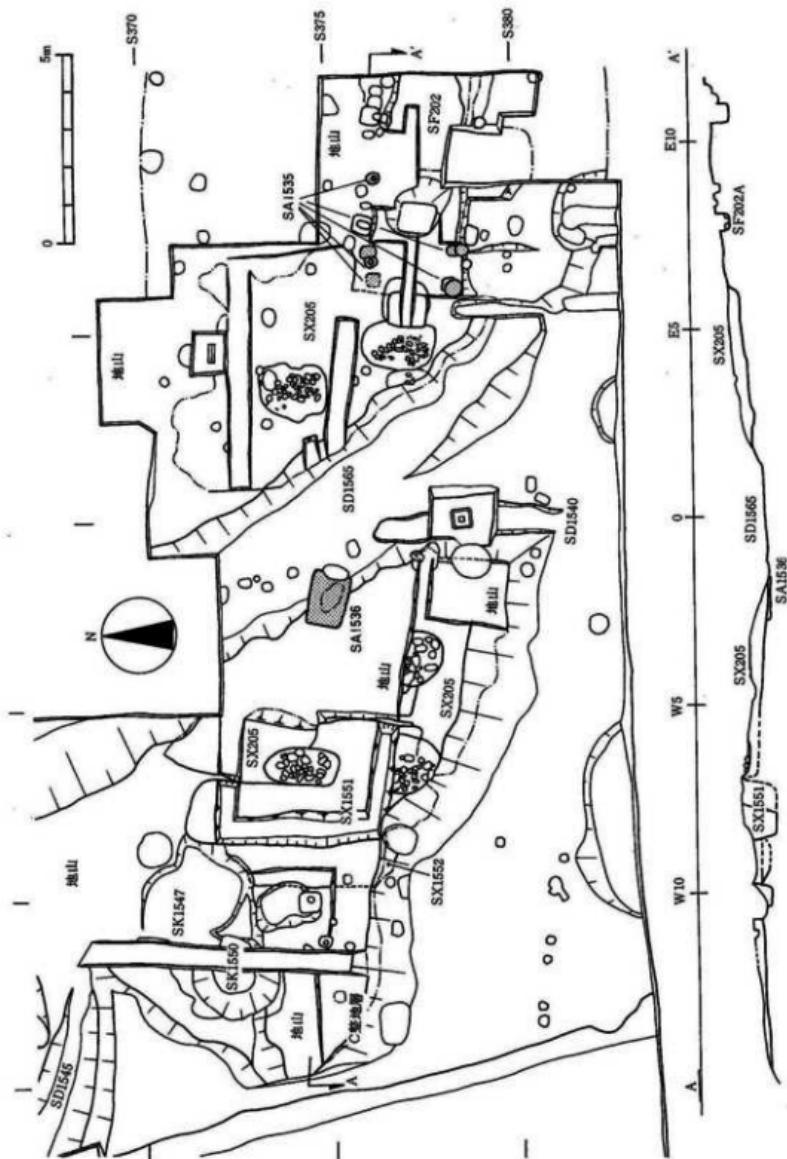
今回の調査でも、築地南側の B 2 整地層の存在から S F202B₂ 以降の築地修復が推定されており、第 7 次調査の S F202C と同時期の可能性がある。両者の厳密な対応関係は明確でないが、ここでは今回の B 2 整地層と第 7 次調査の瓦列を S F202C として理解しておきたい。

(3) その他の遺構・整地層

門・築地以外の遺構や整地層については、門跡あるいはその基礎地業と重複しこれらとの前後関係がとらえられるものが多く、S B201A 門跡 (S X205 基礎地業)、S B201B 門跡 (S X1551 基礎地業) との関係を整理すると次のようになる。

- A. S B201A より古いもの S A1535・1536
- B. S B201A より新しく、S B201B より古いもの S A1538
- C. S B201B より古く、S B201A との関係が不明なもの S X1552・S A1555
 - C 整地層
- D. S B201B より新しいもの D 整地層、S A1564、S K1547・1550・1553・1554・1563、S D1541・1543・1565
- E. 門跡との関係が不明なもの S K1548・1549、S D1540・1544・1545

以下この順に説明する。



第37図 SA1535 小柱穴群と SA1536 柱穴

〔A : SB201Aより古いもの〕

これには、門位置で検出したSA1536柱穴とその東側で検出したSA1535小柱穴群がある。

SA1536柱穴（第37図、図版8下）

SA1536は、SB201A門の基礎地業SX205下の岩盤面で検出した1個の柱穴である。柱穴は1.5m×1.0mの方形で、深さは5~10cmである。遺存状況が極めて悪いため、構造・性格は不明である。調査時には最も古い掘立式門跡かとみたものであるが、柱穴底面レベルと周辺地形の検討および東の築地との位置関係から門とは考え難いとの結論に達した。遺物は出土していない。

SA1535小柱穴群（第37図、図版8下）

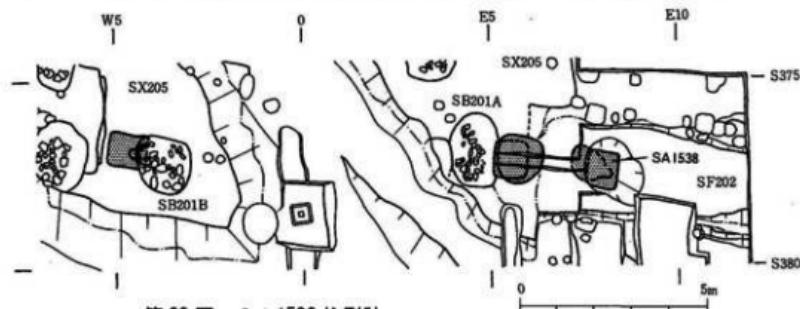
SB201A門の基礎地業であるSX205の築成土下およびSF202B₁の積土下の地山面で検出した7個の小柱穴で、SF202築地の南縁と北縁の内側に沿って並んでいる。これらの性格については不明である。遺物は出土していない。

〔B : SB201Aより新しく、SB201Bより古いもの〕

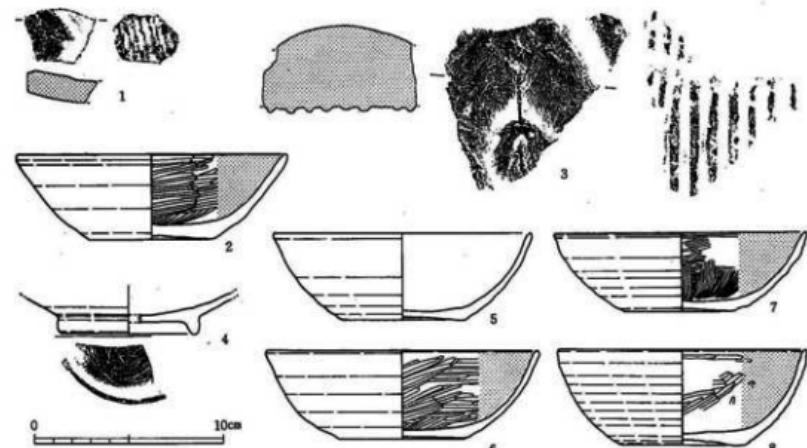
これには、門位置から東の築地位置まで延びるSA1538柱列跡がある。

SA1538柱列跡（第38図、図版13下）

SX205基礎地業の上面とSF202B₁築地の積土上面で検出した3個の柱穴により確認した東西方向の柱列であり、いずれにも抜取穴がみられた。柱穴はSB201A門の礎石据穴と重複し、これより新しい。また、抜取穴はSB201B門の礎石据穴、SF202B₂築地の基礎地業であるSX1539と重複し、これらより古い。柱穴は一辺約0.9mの方形であり、深さは0.5~1.0mで、底面のレベルはほぼ一定している。抜取穴のなかには柱のあたりが確認されるものがあり、これによると柱の径は約20cmと推定される。柱間は西から約10.1m、2.7mである。方向は東西発掘基準線に対し東で約3°南へ偏している。



第38図 SA1538柱列跡



第39図 その他の遺構の遺物

この柱列の当初の規模・構造については、新しい遺構や後世の削平のため不明確であるが、若干検討を加えておきたい。西側の柱間 10.1m の部分は東の柱間 2.7m を基準とするとおよそ 4 間分に相当するが、西端柱穴から東へ 4 m までの範囲には明らかに柱穴がなかったことが確認されていることから、削平が著しいこの東に柱穴を想定しても、この部分の柱間が東に較べかなり広くなることが知られる。柱間の広い部分は通路位置にあたる可能性もある。また、この柱列は東と西にはそう延びそうもないことが知られ、多賀城の全体を区画するようなものではないと考えられる。したがって、あえて推定すれば、簡易な門と部分的に設けられた塀の複合かと思われるが、判然としない。

柱穴埋土からは丸瓦 2 点と第 I 期の平瓦 II B 類 1 点 (第 39 図 1) が、抜き取り穴からは平瓦とロクロ調整の土師器杯の小破片が出土している。

〔C : S B 201 B より古く、S B 201 A との関係が不明なもの〕

これには C 整地層、S A 1555 ピット群、S X 1552 溝状遺構がある。C 整地層は門跡の西側に分布する層であり、S A 1555 はその上面で、S X 1552 はその下層の地山面で検出した。

S X 1552 溝状遺構 (第 37 図、図版 13 上)

S X 1552 は地山面を検出した南北溝状の遺構である。C 整地層に覆われ、東辺は C 整地層とともに S X 1551 基礎地業により切られている。規模は東西約 1.1m、南北 4.1m 以上、

深さ 40 cm 程で、断面は U 状をなす。埋土は灰黄褐色砂質土、明黄褐色粘質土などを用いて厚さ 10 cm 前後の単位でつきこまれており、硬くしまっている。遺物は出土していない。

C 整地層（第 37・40 図）

C 整地層は、S X1551 の掘込地業の西端から西方に分布する層で、東西 6.0 m、南北 3.2 m の範囲に最大の厚さ 30 cm で分布する。東端は S X1551 の掘込地業により切られ、また、その築成土により覆われている。この整地層は黒褐色土と明黄褐色粘質土を用いて互層に版築されており、版築は 2~5 cm を単位とした丁寧なものである。この状況と分布範囲からみて C 整地層は門の西側の築地基礎地業かと思われる。遺物は出土していない。

S A 1555 ピット群（第 27 図）

S A 1555 は、S X1551 の築成土下、C 整地層の上面で検出した 4 個のピットである。このうち中央 2 個のピットは径 30 cm 前後の円形に近いもので、埋土に焼土ないし焼瓦を含んでいる。これに対し東西両端のピットは一辺約 25 cm の方形で、埋土に遺物や焼土はみられない。

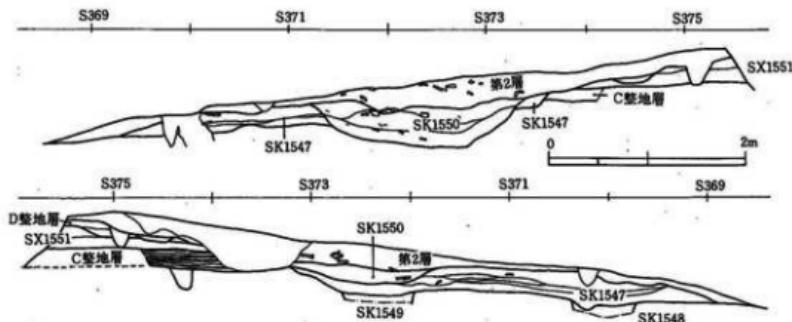
遺物は、円形のピットから丸瓦 1 点と平瓦 12 点が出土している。平瓦はすべて II B 類で、政庁第 II 期のものである。このなかには焼瓦がみられる。

〔D : S B 201B より新しいもの〕

これには D 整地層、S A 1564 柱穴、S K1547・1550・1553・1554・1563 土壌、S D 1541・1543・1565 槽がある。

D 整地層（第 30・31 図）

D 整地層は、門跡の西方に東西 4 m、南北約 1 m の範囲で帯状に分布する厚さ 15 cm 前後の整地層である。S X1551 の築成土の上面に直接のっており、分布範囲からみるとこれと



第 40 図 W12m 地点の南北畦断面図

一連の可能性も生ずるが、両層の間の面で小ビットが検出されていることから、時期の異なるものと考えておきたい。この層には瓦混じりの明黄褐色砂質土、炭混じりの焼土、明褐色砂質土が用いられ、互層をなしている。

出土遺物には丸瓦 17 点と平瓦 13 点がある。平瓦は IA 類 3 点、IB 類 1 点、II B 類 9 点である。IA 類、IB 類は政庁第 I 期であり、II B 類の大部分は第 II 期のものとみられる。

S A 1564 柱穴、S K 1553・1554 土壙（第 27 図）

これらは門跡の西で S X 1551 の築成土の上面で検出した遺構である。相互に重複しており、前後関係は S A 1564 → S K 1554 → S K 1553 となる。

S A 1564：一辺 0.4m の方形の柱穴で、径 18 cm の柱痕跡が認められた。深さは 35 cm である。遺物は出土していない。

S K 1554：S A 1564 を切る不整円形の土壙で、S K 1547・1553、SD 1543 とも重複し、これらより古い。規模は東西 1.2m、南北 1.7m、深さ 40 cm である。

堆積土からロクロ調整の土師器、須恵器、瓦が出土している。土師器には糸切り無調整の壺 4 点（第 39 図 2）と甕体部の小破片がある。須恵器には糸切り無調整の壺 1 体と甕体部の小破片がある。瓦には軒平瓦 1 点、丸瓦 36 点、平瓦 33 点があり、軒平瓦は 621 で、平瓦は IA 類が 4 点、IB 類が 1 点（以上第 I 期）、II B 類が 27 点（第 II・III 期）、II C 類が 1 点（第 IV 期）である。

S K 1553：S K 1554 の東に接しこれを切る椭円形の土壙である。SD 1543 とも重複し、これより古い。規模は東西 2.2m、南北 1.4m、深さ 20 cm である。

堆積土からロクロ調整の土師器壺、須恵器甕・瓶の小破片、丸瓦 18 点、平瓦 15 点が出土した。平瓦は IA 類 4 点、IB 類 2 点（以上第 I 期）、II B 類 4 点（第 II・III 期）、II C 類 5 点（第 IV 期）である。

S K 1547・1550・1563 土壙（第 27・30・40 図）

これらは門跡の北西で検出した土壙である。相互に重複しており、前後関係は S K 1547 → S K 1563 → S K 1550 である。

S K 1547：C 整地層の上面で検出した不整円形の大土壙である。多数の遺構と重複し、S K 1548・1549・1554 土壙、S X 1551 の掘込地業より新しい。規模は東西 5.3m、南北 3.2 m、深さ 30 cm である。堆積土は焼土を多量に含む明赤褐色土や黄橙色粘質土である。

堆積土から須恵器壺・甕の小破片と比較的多量の瓦が出土している。瓦には軒丸瓦 2 点、軒平瓦 4 点、鬼瓦 1 点、のし瓦 1 点、丸瓦 65 点、平瓦 127 点がある。軒丸瓦は 222・240（第 II 期）、軒平瓦は 511（第 I 期）、640・641（第 II 期）、721A（第 III 期）の各 1 点である。鬼瓦は大型の重弁連花文を表したもので（第 39 図 3）、裏面には竜の子の圧痕がみら

れ、第Ⅱ期の953かと思われる。平瓦はIA類29点、IB類13点（以上第Ⅰ期）、ⅡB類85点（第Ⅱ・Ⅲ期）、不明2点である。このうち軒丸瓦240の裏面には物Aの刻印が、また、平瓦ⅡB類では物Aが1点、丸Aが2点、矢Aの刻印が1点含まれていた。

S K 1563：S K 1550を掘り上げた後S K 1547の堆積土上面で検出した小土壙で、一辺約0.8mの方形のもの（A）と、これを切る長径0.7mの楕円形のもの（B）が重複している。深さはともに30cmである。堆積土から若干の瓦が出土した。

S K 1550：S K 1547とほぼ同位置で、C整地層の上面で検出した不整形土壙である。S K 1547・1554・1563土壙、SD 1543溝と重複し、S K 1547・1554・1563より新しく、SD 1543より古い。規模は東西4.6m、南北2.6m以上である。深さは全体としては30cm前後であるが、西の円形部分では約60cmと深くなっている。堆積土はほぼ土壙全体に広がる褐色土（1層）、黄褐色粘質土（2層）と円形の深い部分にみられる灰黄褐色土（3層）からなる。

遺物は各層から土器、瓦が比較的多く出土している（第39図）。このうち土師器はすべてロクロ調整のもので、坏はすべて内黒のものである。

堆積土1・2層の遺物には、土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、瓦がある。土師器には坏、甕があり、坏は糸切り無調整のもの4点（5・6）と底部全面を手持ヘラケズリしたもの1点で、甕は糸切り底の小型のもの1点と体部破片である。須恵器も坏と甕があり、坏は糸切り無調整の坏1点とヘラキリ無調整の坏3点で、甕は体部の破片である須恵系土器は坏1点である。灰釉陶器は皿の1点（4）で、釉は底部を除き内外面にかけられている瓦には軒丸瓦3点、軒平瓦3点、のし瓦2点、丸瓦207点、平瓦200点がある。軒丸瓦は243（第Ⅱ期）、450・451（第Ⅳ期）の各1点、軒平瓦は640・641（第Ⅱ期）、650（第Ⅲ期）の各1点である。平瓦はIA類15点、IB類7点（第Ⅰ期）、ⅡB類152点（第Ⅱ・Ⅲ期）、ⅡC類26点（第Ⅳ期）である。丸瓦の中には刻印④と物Aが各1点、平瓦ⅡB類には矢A、丸Aが各1点みられる。

堆積土3層の遺物には、土師器、須恵器、瓦がある。土師器は糸切り無調整の坏3点（7・8）と甕底部1点であり、須恵器は坏の小破片である。瓦にはのし瓦1点、丸瓦22点、平瓦22点がある。平瓦はIA類1点（第Ⅰ期）とⅡB類21点（第Ⅱ・Ⅲ期）である。平瓦ⅡB類の中には刻印矢Aが3点、物Aが1点含まれていた。

S D 1541・1543・1565溝（第25図）

SD 1543は門跡西側にみられた幅0.5mの東西溝、SD 1541は門跡西半部で検出した幅約1.5mの南北溝である。また、SD 1565は門跡の東半部で検出した幅約6mの南北溝である。これらは多数の遺構と重複し、いずれもその中で最も新しい。このうちSD 1565は

近世の通路跡とされているもので、今回堆積土から近世の瓦が出土した。

[E : 門跡との関係が不明なもの]

これには S K 1548・1549、S D 1540・1544・1545 がある。

S K 1548・1549 土壌（第 27 図）

S K 1548・1549 は門跡北西部の S K 1547 土壌下の地山面で検出した小土壌である。全形を検出してないため詳細は不明であるが、ともに一辺 0.9m 程の方形とみられ、深さは 15 cm である。遺物は出土していない。

S D 1540 溝（第 27 図）

S D 1540 は門跡のほぼ中央の地山面で検出した幅約 0.7m、長さ 5 m、深さ 5 ~ 10 cm の南北溝である。S D 1565 と重複し、これより古い。遺物は出土していない。

S D 1544・1545 溝（第 25 図）

S D 1544・1545 は門跡北西の地山面で検出した幅 2.0m 前後の溝であり、他の遺構との重複はみられない。両溝の堆積土は第 2 層に極めて類似する。S D 1544 から出土した主な遺物には軒丸瓦 221~228 のいずれかに含まれるもの 1 点（第 II 期）と 451 の 1 点（第 IV 期）があり、また、S D 1545 では刻印 丸 A の丸瓦が 1 点ある。

(B) 西半部

西半部で検出した遺構には、築地跡 2 、築地の基礎地業 1 、横穴墓 3 などがあり、下図のような重複関係がみられた。以下築地跡とその関連遺構、横穴墓の順に記載する。

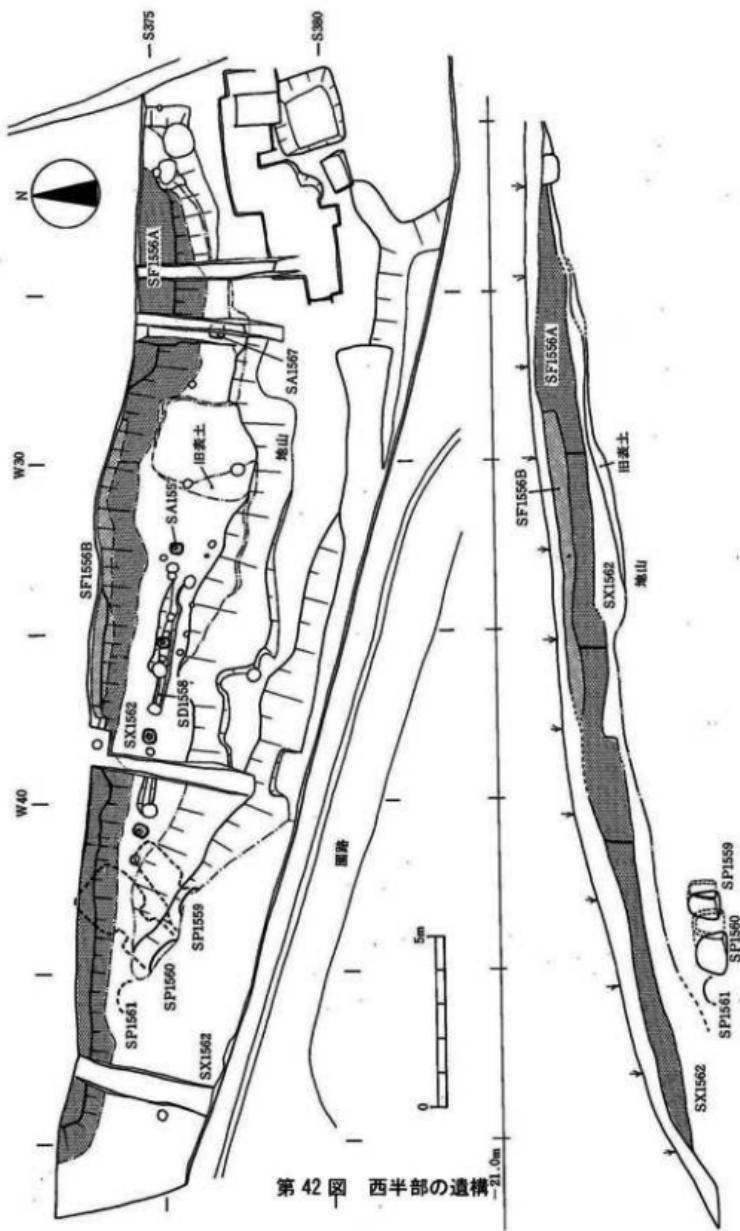


第 41 図 西半部遺構の重複関係模式図

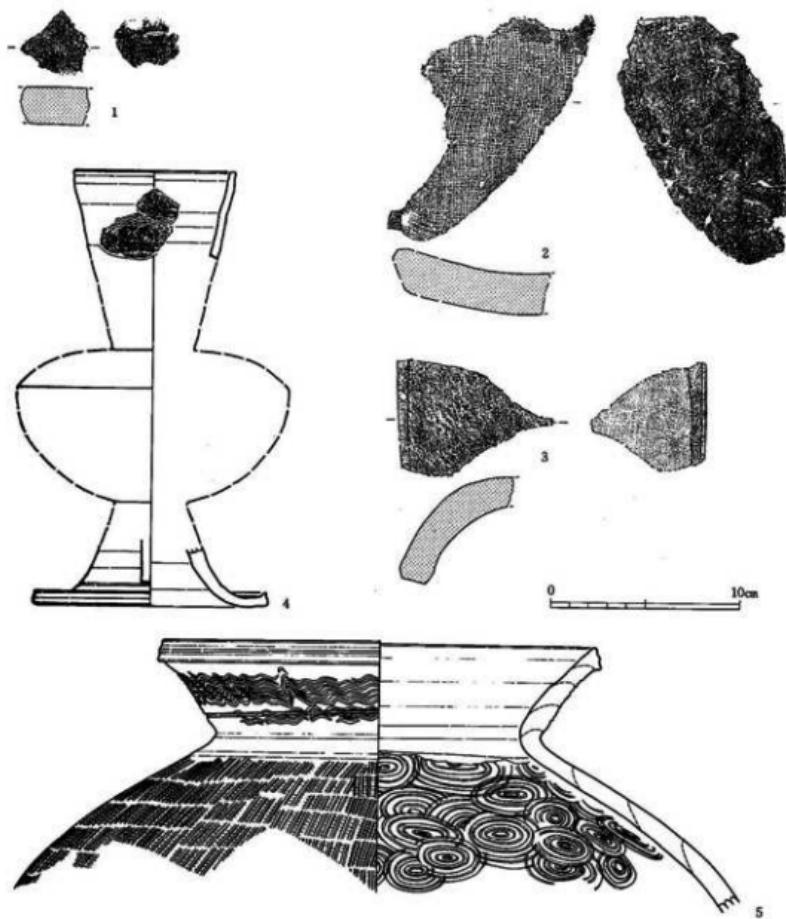
(1) 築地跡と関連遺構

門西側の築地跡については、土地所有者の関係で南半分を対象として調査を実施した。築地の遺構としては、上下に重複する積土（S F 1556 A・B）があり、これに関連する遺構には基礎地業 1 (S X 1562)、積土南側の寄柱穴 1 (S A 1557)、溝 1 (S D 1558) がある。このほか築地南側の 2 箇所で築地に伴う整地層（E 2 層）と崩壊土（E 1 層、F 層）が部分的にみられた。

これらの対応関係についてみると、S X 1562 はこの上に直接 S F 1556 A 積土がのることからその基礎地業である可能性が高いと思われる。E 2 層（整地層）は S F 1556 A 積土より



第 42 図 西半部の構造



1	S X 1562	平瓦 IA類	4	S X 1562	須走羽拂村長頭瓶	脚と頭部の破片
2	S X 1562	平瓦 IB類	5	S X 1562	須走羽拂	
3	S X 1562	丸瓦				

第43図 S X 1562 築地基礎地業の遺物

新しく、S D1558 溝は S A1557 より新しいことが分るが、ともに S F1556 B 積土との関係ははつきりしない。また、S A1557 寄柱穴は新旧の積土のいずれに対応するか、あるいはこれらと別な時期のものか不明である。このように、西半部の築地には 2 時期以上の変遷があったことが知られるものの、時期ごとの築地の実態を把握することが困難な状況である。このため、以下では各遺構を個別に記載する。

S X1562 基礎地業（第 42 図）

東半では旧表土、西半では地山土ないし岩盤上に盛土した基礎地業である。東西 32m、南北 5.5m の範囲に遺存しており、築地の積土から少なくとも 4.1m 南までは延びている。調査区の西南端で 0.8m 程と最も厚く、地山レベルの高い東側に向かって次第に薄くなる。この上面はかなり大きく削平されているが、構築当初の上面レベルを北の築地基底面と同じとみると、厚い所で 2.5m 以上の盛土がなされたと推定される。地業上は褐色砂質土、黄褐色砂質土、暗褐色砂質土が用いられている。

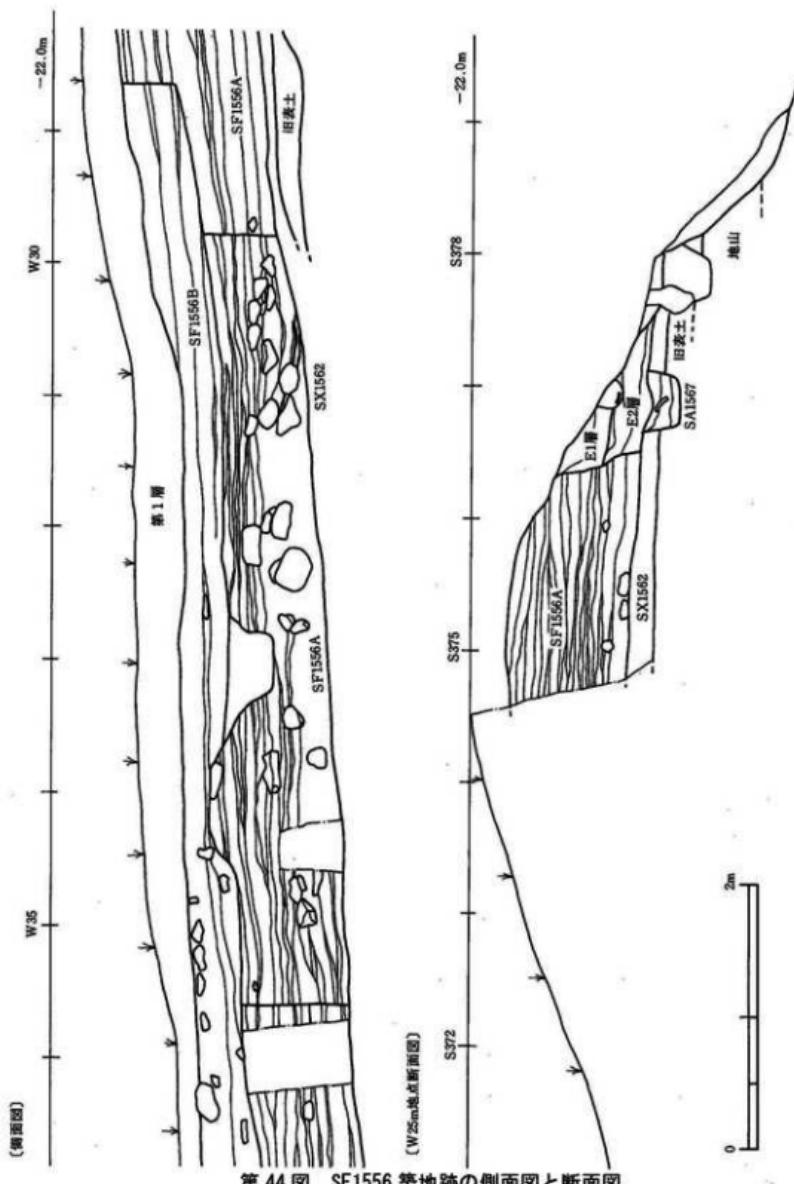
出土遺物には瓦、土師器、須恵器、石器がある（第 43 図）。瓦は平瓦 I A 類 1 点（1）、I B 類 1 点（2）、丸瓦 2 点（3）であり、いずれも政府第 I 期のものである。土師器は内黒の杯の体部 3 点、甕の体部と頸部各 1 点がある。いずれも非クロクロ調整のものであるが、小破片のため詳細は不明である。須恵器は甕（5）と長頸瓶（4）がある。甕は頸部に波状文、体部の表面には平行の叩き目、裏面には同心円のあて具痕がみられる。長頸瓶は口縁部と脚部の破片である。石器にはスクレーパー 2 点と石鏃 1 点がある。

S F1556 A 築地跡（第 42・44 図、図版 14・15）

S F1556 A は S X1562 上に構築された積土により確認した築地跡である。積土は最大の幅 1.9m 以上、高さ 1.1m で、東西 29m の範囲（W21～50m）に遺存している。全体としては、黒褐色土、黄褐色粘質土、黄橙色砂質土などを用いて 5～10cm を単位として丁寧に版築されているが、南からの削平が築地の中心付近まで及んでいる W31～35m の下部では版築の層は認められず、径 10～30cm の自然石がかなり含まれていた。また、中央 3箇所で積み手の違いが認められ、間隔はともに 5.7m である。積土からは遺物は出土していない。

S F1556 B 築地跡（第 42・44 図、図版 15 中）

S F1556 B は、S F1556 A の積土の上部を部分的に削平した後、その上に積まれた積土により確認した築地跡であり、幅 0.6m 以上、高さ最大 0.4m で、東西約 9.1m（W28.6～37.7）の範囲に遺存している。積土はにぶい黄褐色土や赤褐色砂質土を用いて 10～20cm を単位として積まれており、積み手の違いについては不明瞭であった。積土からは遺物は出土していない。



第44図 SF1556 築地跡の側面図と断面図

S A 1557 寄柱穴（第42図、図版15上）

S X 1562 基礎地業上面で検出した4間分の柱穴列で、S D 1558 溝と重複し、これより古い。S F 1556 の南縁に沿ってほぼ等間隔で並ぶことから築地の寄柱穴と思われる。ただし S F 1556 A の積み手の違いとは位置的に対応しない。柱穴は一辺 30~35 cm の隅丸方形で、深さは 30~40 cm である。いずれにも径 15 cm の柱痕跡がみられる。柱痕跡から柱間をみると、西から 2.94m、2.83m、2.82m となり、平均は 2.86m である。方向は東西の基準線に対し東でおよそ 8° 強南へ偏している。遺物は出土していない。

S A 1567 ピット（第42・44図）

E 2 整地層の下の S X 1562 基礎地業の上面で検出した一辺 0.4m の方形のピットである。S F 1556 A の積土南縁からは 30 cm 程離れており、その寄柱穴とはみられない。柱穴中より平瓦 II B 類（政庁第II期）が 1 点出土した。

S D 1558 溝（第42図）

第1層下の S X 1562 基礎地業上面で検出した東西溝であり、S A 1557 と重複し、これより新しい。幅は 30~50 cm、深さ 10 cm で、断面が浅い U 字形である。遺物は出土していない。

築地南側の堆積層（第44図）

築地の南側は現代の削平が著しいが、W25m と W40m 付近で若干の堆積層が遺存していた。W25m 付近の堆積層としては、S F 1556 A の基部に寄せて盛土された E 2 整地層とその上に自然堆積した E 1 層があり、W40m 付近では自然堆積の F 層がある。

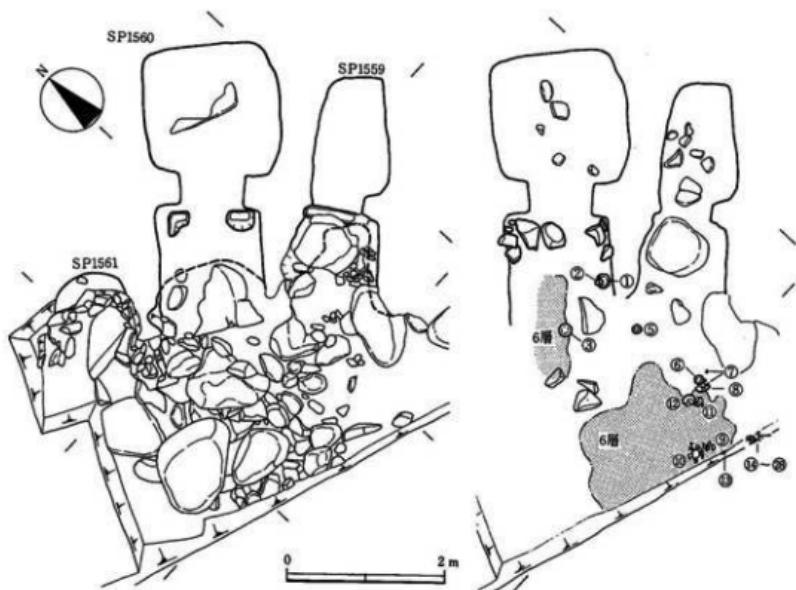
E 2 層（E 2 整地層）：S F 1556 A 積土の南側に寄せて幅 1.1m 以上、厚さ約 30 cm で盛土した整地層であり、黄褐色粘質土や黒褐色土が互層に積まれている。この層は S F 1556 A 積土、S A 1567 ピットより新しく、S F 1556 B 積土との関係は不明である。S F 1556 A より新しい時期の大走りの嵩上げと思われる。出土遺物には第II期の平瓦 II B 類がある。

E 1 層：E 2 整地層の上に乗る自然堆積層であり、S F 1556 B 以降の築地崩壊土と考えられる。出土遺物には軒丸瓦 222 の 1 点（第II期）や平瓦 II B 類（第II期）がある。

F 層：S X 1556 A・B の積土のきわに自然堆積した層であり、S F 1556 B 構築以降の崩壊土と考えられる。出土遺物には少量の丸瓦・平瓦がある。

（2）横穴墓

横穴墓は、調査区西端で築地の基礎地業 S X 1562 の下層から 3 基並んで検出された（図版16）。これらは岩盤（凝灰岩）が露出する南斜面に構築されている。以下では遺存状況の良いものから中央の S P 1560、東の S P 1559、西の S P 1561 の順で記載する。なお、各横



第45図 横穴墓群全体図（左）と遺物の出土地点（右）

穴墓の内部および前面の堆積層の名称については、共通するものが多いため最も複雑なS P 1560の層を基準とした。また、共通する層の遺物については出土位置から横穴墓ごとに分けて記載している。

S P 1560 横穴墓（第45・46図、図版17・19）

S P 1560は、玄室、玄門および羨道の一部が遺存していた。方向は南北発掘基準線に対し北で約49° 東へ偏している。

玄室の平面形は胴張の隅丸方形で、奥行1.65m、奥幅1.4m、中央幅1.7m、前幅1.6mであり、立面形はアーチ形で、高さは0.9mである。床面は平坦で、南に向かって低くなり、内部施設はとくにない。底面のレベルは北側のS F 1556 A築地の基底面より約1.6m低い。

玄門の立面形はアーチ形で、幅0.8m、高さ0.85m、奥行0.4mである。玄門の前には左右に浅い窪みが検出され、ともに玄門側の辺が直線的で壁が直立していることから閉塞に関わる施設の跡と考えられる。この上には計10~40cmの自然石が2ないし3段に重なった状態で並んでおり、閉塞に用いられたものとみられる。

墓道の平面は長方形とみられ、幅 1.3m、長さ 1.5m以上で、天井部は玄門から 0.65m まで遺存している。立面はアーチ形である。玄門前の床面から土師器壊と須恵器平瓶が出土した。

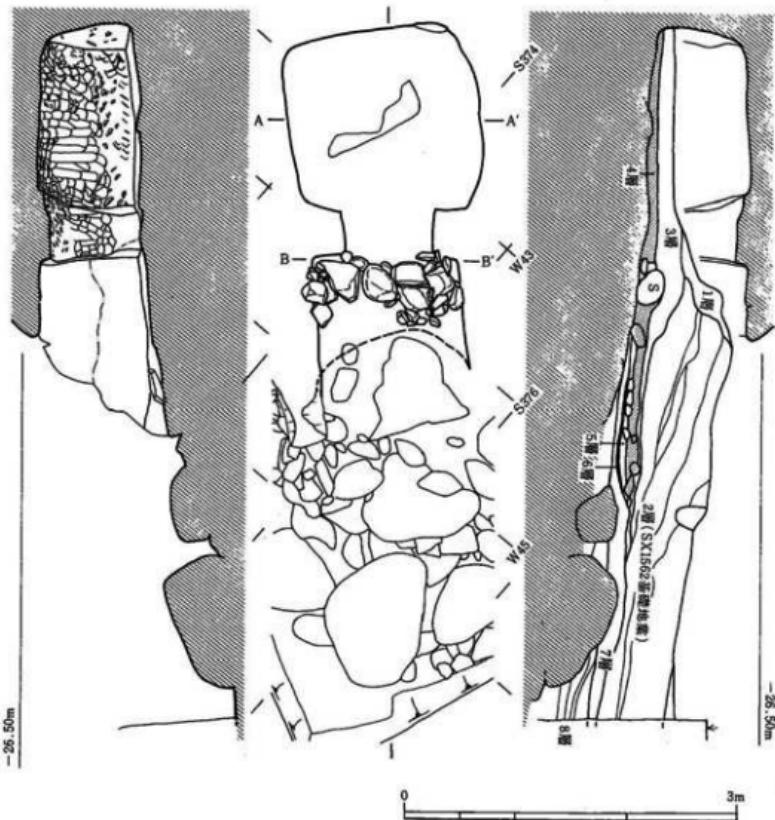
A-A' (北から)



A-A' (南から)



B-B' (南から)



第 46 図 SP 1560 横穴墓

構築技法についてみると、直刃の工具の先端が深く入ったため残った痕跡と、蛤刃の工具（手斧）で面を削った痕跡があり、前者は横穴の掘削時のもの（以下掘削痕という）、後者は内面の整形時のもの（以下整形痕）と考えられる。掘削痕は各面の境界付近を中心として残り、工具の幅は8cm以上とみられる。整形痕は横穴のほぼ全体にみられ、幅は10cm前後である。長さは15cm未満の場合が多いが、天井から側壁にかけて50cm以上になる部分がある。

堆積土には1層から7層まであり、うち「2層」は築地の基礎地業（S X1562）である。

1層：玄室のうち玄門付近にのみ分布するにぶい黄褐色砂質土で、極めて軟質である。築地の基礎地業（2層）が削平されてS P1560の玄門が開口した後に流入したものと考えられる。この層から比較的多量の瓦が出土した。

2層：3基の横穴墓を覆う築地の基礎地業土で、築地の項でS X1562として記載したものである。出土遺物についてはS X1562を参照されたい。

3層：玄室の奥壁から羨道まで分布するやや軟質の黒褐色土で、玄門付近で最も厚く0.25mあるが、南北の両側では次第に薄くなる。灰黄褐色砂質土を層状に含むことなどから築地基礎地業以前の自然堆積土とみられる。遺物は出土していない。

4層：玄室から羨道部にかけて分布する厚さが10cm程の黄褐色粘質土である。玄室内部では床面の岩盤上に、羨道部分では5層上にのっており、閉塞に用いられた石を覆っている。硬くしまっていることや上面が平坦であることから整地層とみられる。遺物は出土していない。

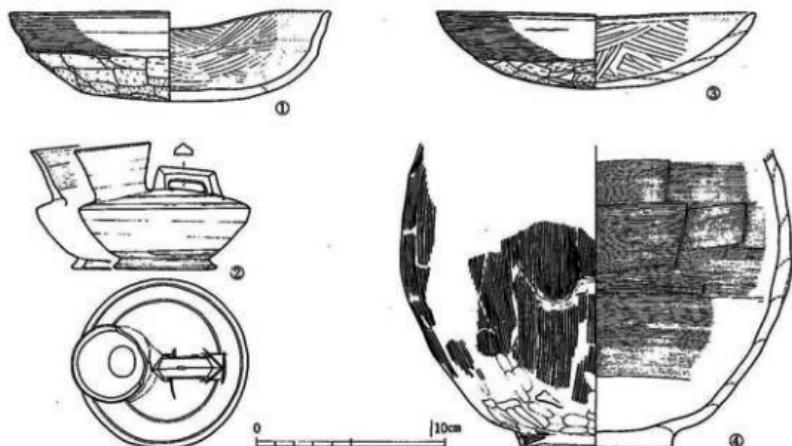
5層：玄門の前方に部分的に分布するにぶい黄褐色の凝灰岩の破碎砂で、自然堆積土と思われる。層中から土師器が少量出土した。

6層：玄門前方に分布するごく薄い炭化物層である。東のS P1559の前方および調査区の南端まで広がる。本横穴墓およびS P1559の前方ではこの層上面で完形の土師器が発見されており、墓前祭に関わるものと考えられる。

7層：玄門前方から調査区の南端まで分布し、東のS P1559と西のS P1561の前方まで広がる褐色の凝灰岩の破碎砂である。後述するS P1559前方での出土遺物の様相から、横穴墓から遺物などを掻き出した時に形成されたものと思われる。厚さは南端が0.2mと最大で、玄門に向かって次第に薄くなる。この層から土師器の小破片が出土した。

なお、7層の下にはこの横穴墓構築以前に堆積したとみられる8層があるが、これについてはS P1561で述べる。

S P1560の出土遺物（第45・47図、図版19）：床面・6層上面・5層から少量の土師器坏・甕や須恵器平瓶が出土した。



①	SP1560 略面底面	土師器坏	非ロクロ・内黒	③	SP1560-6層上面	土師器坏	非ロクロ・内黒
②	SP1560 略面底面	須恵器平瓶	非ロクロ	④	SP1560-8層	土師器坏	非ロクロ

第47図 SP1560横墓穴の遺物

〔床面の遺物〕 玄門前の東端付近で土師器坏1点(①)と須恵器平瓶1点(②)が重なった状態で出土した。

土師器坏は非ロクロ調整で、内黒の丸底坏である。体部外面の中程には稜がみられ、内面にはそれと対応する屈曲がみられる。口縁部はやや急に立ち上がる。外面の調整は稜の上方がヨコナデ、下方がヘラケズリであり、内面は全面にヘラミガキが施されている。

須恵器平瓶は高台と把手の付く小型のものである。把手はヘラで整形されており、断面は五角形をなす。

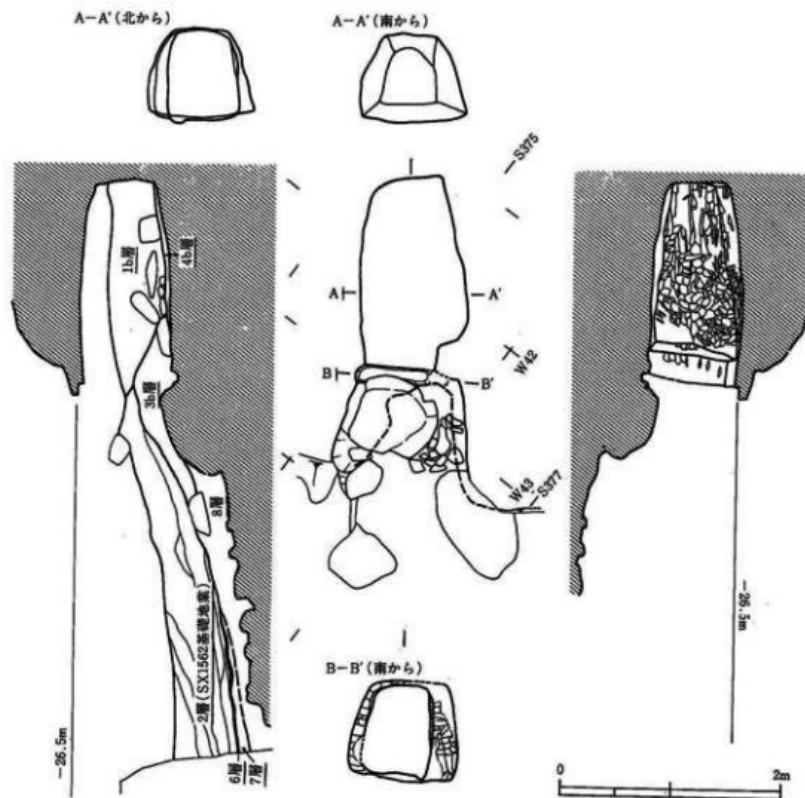
〔6層上面の遺物〕 略道のはば中央で完形の土師器坏1点(③)が出土した。非ロクロ調整で、内黒の丸底坏である。体部は内湾気味に外傾し、体部中程にわずかな段がみられる。外面の調整は上半がヨコナデ、下半がヘラケズリである。内面は全面にヘラミガキが施されている。

〔5層の遺物〕 土師器の内黒坏と甕の小破片が少量出土した。いずれも非ロクロ調整のものである。

〔1層の遺物〕 丸瓦10点と平瓦17点が出土した。平瓦はⅡB類5点とⅡC類12点である。

以上の様相から、この横穴墓はI：当初の構築→II：遺物の掻き出しと、炭化物層(6層)の形成を伴う墓前祭、III：5層の自然堆積後、整地(4層)、その後：3層の自然堆積

後、築地基礎地業（2層）により完全に覆われ、さらに、築地基礎地業土の流出により横穴墓が開口し、1層が自然堆積、という変遷をたどったものと思われる。横穴墓に直接かかる遺物としては、Iの埋葬時に供献された土師器壺（第47図①）・須恵器平瓶（②）と、IIの墓前祭に用いられた土師器壺（③）がある。



第48図 SP 1559 横穴墓

SP 1559 横穴墓（第45・48図、図版18~20）

SP 1559はSP 1560の東に隣接しており、玄室、玄門、羨道の一部が遺存していた。方向は南北基準線に対し北で54°東へ偏している。

玄室は、平面がほぼ長方形、立面が台形に近いアーチ形で、奥行1.3m、奥幅0.6m、

前幅 0.8m、高さ 0.8m である。床面はほぼ平坦で、内部施設はとくにみられない。床面のレベルは北側の S X1556 A 築地の基底面より 1.8m 低い。玄門はほぼ長方形で、幅 0.6 m、高さ 0.8m、奥行 0.2m である。玄門の前に接して閉塞施設に関わるとみられる幅 10 cm 程の溝がある。

羨道の平面形は長方形とみられ、幅 1.1m、長さ 0.9m 以上（天井部は 0.1m 分が遺存）であり、立面は台形をなす。

構築技法については、掘削痕と整形痕跡がみられる。それぞれの幅は S P1560 の場合と同様である。ただし、横穴内部が狭いためか S P1560 にみられた長い整形痕はなく、全体に仕上げが粗い。

堆積層を上から記すと、玄室内では 1 b 層、3 b 層、4 b 層、羨道部以南では 2 層、3 b 層、6 層、7 層となる。このうち 4 b 層と 6 層には直接の層位的関係はない。

1 b 層：玄室のほぼ全域に分布する厚さ 0.4m 程のにぶい黄褐色砂質土で、極めて軟質である。S P1560 の 1 層と同様に築地の基礎地業が削平されて S P1559 の玄門が開口した後に流入したものと考えられる。この層から比較的多量の瓦が出土した。

2 層：S P1560 の 2 層と一連の築地の基礎地業土（S X1562）である。

3 b 層：玄門を中心として分布するやや軟質の黒褐色土で、S P1560 の 3 層と同様に玄門付近で最も厚く 0.25m あるが、南北の両側では次第に薄くなる。

4 b 層：玄室から玄門のやや前方にかけて分布する厚さが 10 cm 程の黄褐色粘質土である。硬くしまっていることや上面が平坦であることなどの点で、S P1560 の 4 層と類似する。遺物は出土していない。

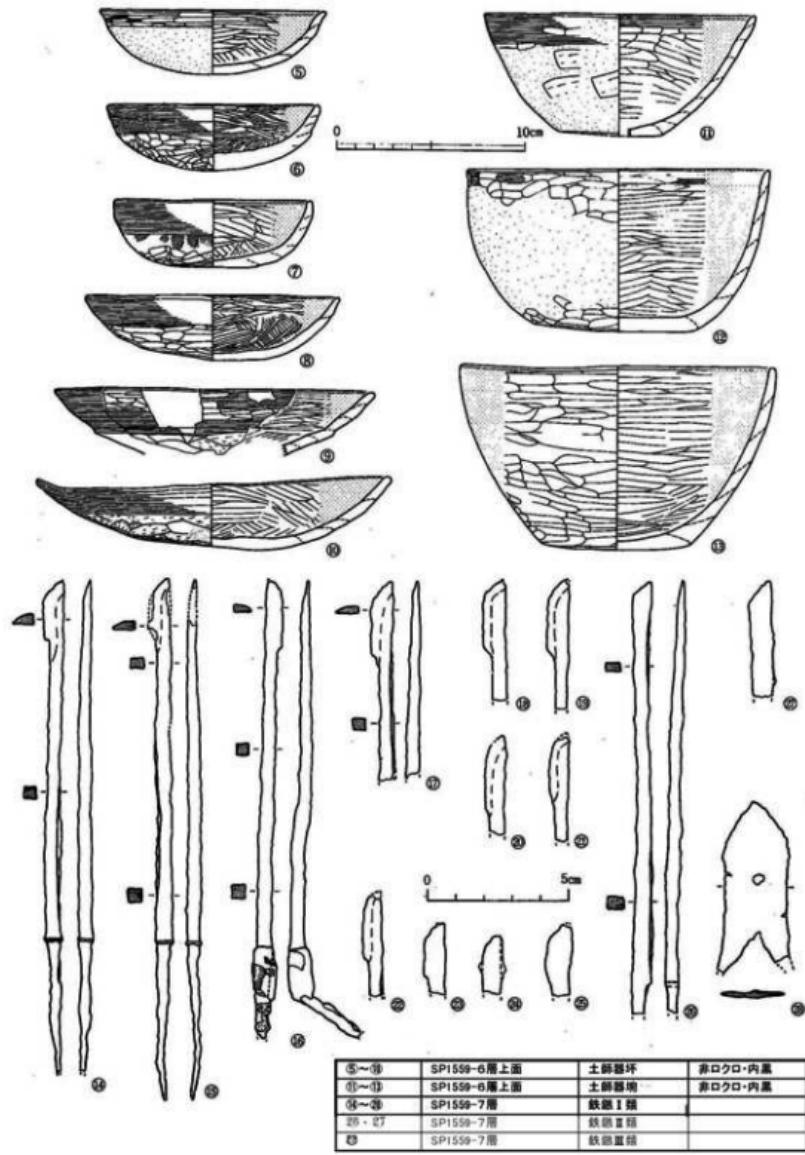
6 層：S P1560 の 6 層と一連のごく薄い炭化物層で、羨道の南から調査区南端まで分布する。この上面から多数の完形土師器が出土した。

7 層：S P1560 の 7 層と一連の凝灰岩の破碎砂である。層中から多数の鉄鏃が出土した。なお、7 層の下にはこの横穴墓の構築以前とみられる 8 層がある。

S P1559 の出土遺物（第 49 図、図版 19・20）：6 層上面から多量の土師器と微量の須恵器が、また 7 層から鉄鏃が出土した。

〔6 層上面の遺物〕 羨道の前方で完形ないし完形に近く復元できた土師器壺 6 点（⑤～⑩）・塊 3 点（⑪～⑬）のほか、土師器と須恵器の壊破片が出土した。

土師器壺は 6 点とも非クロロ調整の内黒、丸底壺である。法量から口径 11 cm 程の小ぶりのもの（⑤～⑦）と口径 13.5～18.8 cm のもの（⑧～⑩）がある。器形はいずれも内湾しながら外傾するものであるが、体部外面の段・稜の有無、外傾度、口縁部の形などは多様である。技法では外面がヨコナデの後、下半部をヘラケズリし、粗いヘラミガキを施すものが大部



第49図 SP1559横穴墓の遺物

分であるが、なかにはヘラケズリが丹念なものやヘラケズリがないものがある。内面はいずれもヘラミガキが施されている。

土師器塊は3点はすべて非クロロ調整の平底塊で、内黒のもの(⑪・⑫)と両黒のもの(⑬)がある。⑪は他に較べやや小ぶりで、外傾度が大きい。⑪・⑫の外面はヨコナデの後、口縁部付近を除きヘラケズリを施し、さらに全面に軽いヘラミガキを施している。⑬の内外面は丁寧なヘラミガキが施されており、前段階の調整痕跡は不明である。

このほかに非クロロ調整の土師器塊と平行叩き目のみられる須恵器塊の体部小破片が少量出土しているが、詳細は不明である。

番号	表		裏	裏	
	設・接の有無	外傾度		口縁	外
⑩	なし	中	外反	ヨコナデ→下平ヘラケズリ→全面ヘラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理
⑪	かずかん種	小		ヨコナデ→下平ヘラケズリ→半周いへラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理
⑫	なし	小	内直	ヨコナデ→下平ヘラケズリ→半周いへラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理
⑬	なし	中		ヨコナデ→下平ヘラケズリ→半周いへラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理
⑭	設あり	大		ヨコナデ→下平ヘラケズリ→半周いへラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理
⑮	なし	大		ヨコナデ→下平ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理
⑯	なし	大		ヨコナデ→口縁部以外ヘラケズリ→全面軽いヘラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理
⑰	なし	小		ヨコナデ→口縁部以外ヘラケズリ→全面軽いヘラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理
⑱	なし	小		ヨコナデ→口縁部以外ヘラケズリ→全面ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ→黒色処理

表3 S P 1559 横穴墓出土の土師器類観察表

【7層の遺物】調査区の南端で多量の鉄鏃がまとまって出土した(第45図)。この出土状況をみると、方向が不定で整然と並ばないことなどから、横穴墓から搔き出されたものである可能性が高いと思われる。鉄鏃はほぼ完形のもの4点のほか、鏃身11点、鏃被や茎部分が多数あり、区を持つ資料の数から個体数は22以上とみられる。鏃身を持つ資料を形態から分類するとI類～III類の3つになる。

I類：鏃身が刀子状の片刃のもので、12点ある(⑩～⑯)。鏃身の長さは2.7cm～3.0cm、幅0.8cm前後で、法量と形に規格性が認められそうである。図には鏃の線をいたが、明瞭ではない。鏃被はいずれも断面が方形で、先端に向かって細まる。完形の3点をみると、先端から区までの長さは12.9cm、茎の長さは5.5cm程度である。うち1点は区付近に矢柄が一部残存している。矢柄は藤状のものを巻いて固定し、漆状の塗料が塗られている。

II類：鏃身が切り出し状をなし、先端のみに刃が付けられているもので、2点ある(⑰・⑱)。茎のみ欠損している26をみると、先端から区までの長さは14.2cmで、鏃身と鏃被との間には明瞭な境はみられない。鏃被の断面は2点とも長方形をなす。

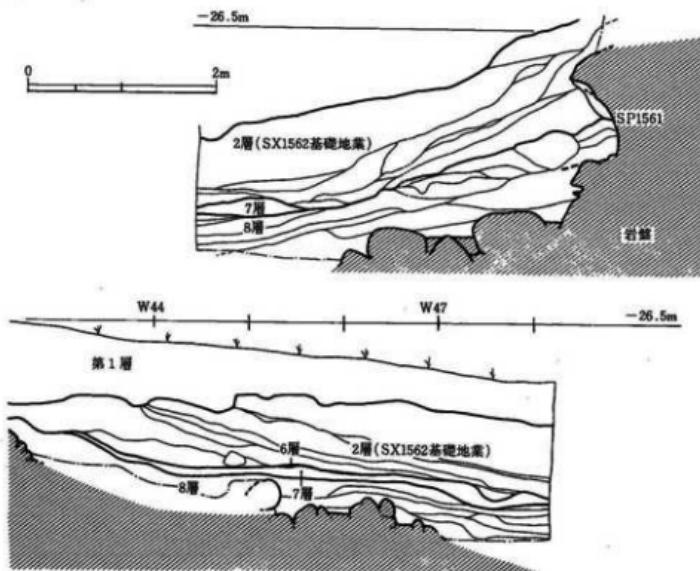
III類：扁平な平根鏃で、1点ある(⑲)。鏃身の幅は2.5cm以上、長さ6.0cm以上で、下半が欠損しているため詳細は不明である。

なお、鏃被部のみの資料をみると大部分が断面方形のもので、この特徴からみるかぎり

I類に属する可能性が高い。

以上の様相から、この横穴墓はI：当初の構築→II：遺物などの掻き出しと、炭化物層（6層）の形成を伴う墓前祭、および整地（4b層）、その後：3b層の自然堆積後、築地基礎地業（2層）により完全に覆われ、さらに築地基礎地業土の流出により横穴墓が開口し、1b層が自然堆積する、という変遷をたどったものと思われる。ここでSP1560と比較すると、5層はみられないが、2・6・7層はSP1560の各層と一連のものであり、しかも1b層、3b層、4b層はSP1560の1・3・4層と層の特徴や堆積状況が共通する。これらの共通性から、この横穴墓はSP1560と同時に構築され、その後も同様の変遷をたどった可能性が高いと思われる。その場合、層位的関係が不明なIIの4b層と6層は時期が異なることになり、6層を伴う墓前祭（IIA）→4b層の整地（IIB）の順になる。

横穴墓に直接関る遺物としては、Iの構築後でIIAの前に横穴墓から掻き出されたと思われる鉄鏃（⑪～⑬）と、IIBの墓前祭に用いられた土器器坏（⑤～⑩）・塊（⑪～⑯）がある。



第50図 SP1561横穴墓と調査区南壁断面図

S P 1561 横穴墓（第 50 図）

S P 1561 は S P 1560 の西に接しており、玄室奥壁の一部が幅、高さとも 0.8m で遺存していたのみである。

堆積土には 2 層、7 层、8 層があり、いずれもこの横穴墓崩壊後のものである。

2 層：S P 1559・1560 の 2 層と一連の築地基礎地業土（S X1562）である。

7 層：S P 1559・1560 の 7 層と一連のもので、調査区南端付近にみられた。この横穴墓前方では遺物は出土していない。

8 層：玄室内部から調査区南端まで分布し、東の S P 1559・1560 の前方まで広がる層で、地山巨岩の間とその上に堆積したオリーブ褐色をなす凝灰岩の破碎砂である。この横穴墓付近で最も厚く 0.6m あるが、東に向かって次第に薄くなる。この層は S P 1561 の削平ないし崩壊後で、S P 1559・1560 の構築以前に形成された堆積層とみられる。

〔8 層の遺物〕S P 1561 の前方では遺物はみられなかったが、S P 1560 の前方で非ロクロ調整の土師器甕 1 点（第 47 図④、図版 20）が出土した。口縁部を欠くが、胴張りで胴部下半が脹らむ。胴部外面はヘラナデ状刷子目の後粗いヘラミガキが、内面は前面にヘラナデが施されている。底部外面はヘラケズリされている。

(C) 第 1・2 層の遺物

第 1・2 層からは表 5 に示したように多量の瓦と少量の土器が出土している（第 51 図）。第 2 層中には近世以降の瓦や陶磁器が含まれているため、ここでは第 1 層・2 層を一括して遺物の種類ごとに概要を記すこととした。なお、第 51 図は、主として土器およびこれまで報告されていない種類の瓦を掲げたものであり、分類記号で示した軒瓦・文字瓦などについては付図を参照されたい。

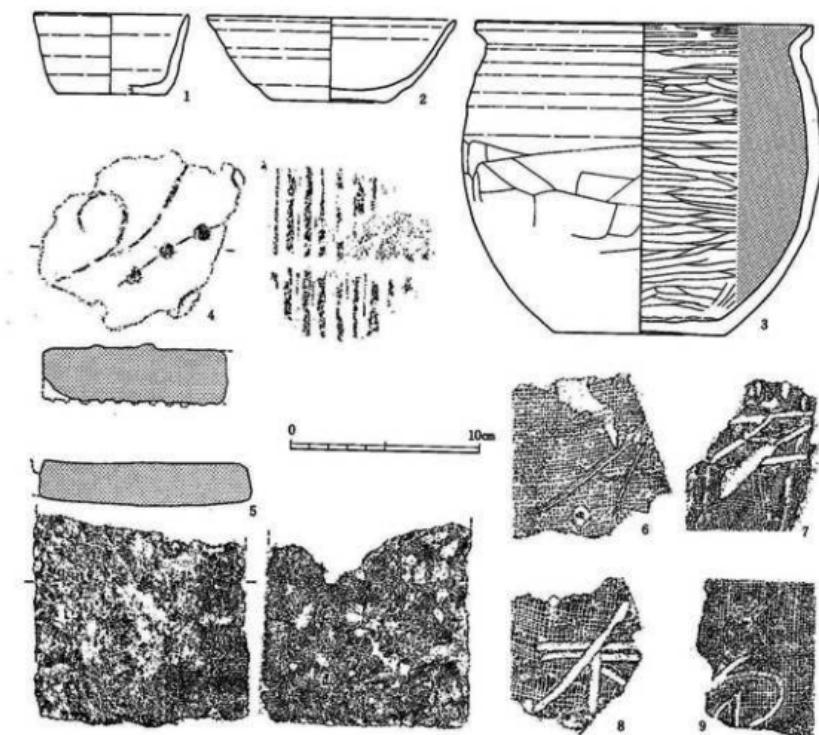
(1) 瓦

古代の瓦では軒丸瓦 35 点、軒平瓦 67 点、道具瓦 11 点の他、多量の平瓦・丸瓦（平箱で 210）がある。このうち軒丸瓦 4 点、丸瓦 18 点、平瓦 63 点に刻印の文字・記号がみられ、平瓦 8 点にヘラ書きの文字・記号がみられた。軒瓦の製作年代を政局遺構期（表中カッコ内）でみると、第 I 期が 24 点、第 II 期が 44 点、第 III 期が 17 点、第 IV 期が 17 点となる。なお、平瓦と丸瓦は基礎整理が終了したものの詳細な分析はなしていない。

このほかに近世以降の瓦が若干みられるが、調査区のすぐ北側にある多賀城碑覆屋に葺かれたものかもしれない。

(2) 土 器

土器には少量の土師器、須恵器、須恵系土器のほか近世以降の陶磁器があるが、ほとん



1	第2層	須恵器坏	手持ヘラケズリ	6	第1層	平瓦Ⅲc類	ヘラ書き(本力)
2	第2層	土師器坏	糸切り無調整	7	第1層	平瓦Ⅲc類	ヘラ書き
3	第1層	土師器便	内墨	8	第1層	平瓦Ⅲc類	ヘラ書き
4	第1層	鬼瓦953		9	第2層	平瓦Ⅲc類	ヘラ書き
5	第1層	のし瓦	第Ⅱ期				

第51図 第1・2層の遺物

どが小破片である。須恵器の破片の中には、内面が磨耗していることから転用硯とみられるものとして、甕・瓶の各1点があり、内面に漆が付着するものとして坏・瓶の各2点がある。

(3) その他

門跡の周辺からスサ入りの焼壁3点が出土している。門の周辺では焼土や焼瓦も認められることから、門の火災によって生じたものと考えられる。

	第一層	第二層
軒丸瓦	123 カー1点、120～1344点(以上5点-第Ⅰ期) 227-1点、228-2点、221～228-1点、240-5点、241-1点(以上10点-第Ⅱ期) 311-3点(以上3点-第Ⅲ期) 420-4点、422-2点、450-1点、452-1点(以上8点-第Ⅳ期)	126 カー1点、120～134-1点(以上2点-第Ⅰ期) 221-228-1点、243-1点(以上2点-第Ⅱ期) 311-1点、431-1点(以上2点-第Ⅲ期) 422-1点、427-1点、451-1点(以上3点-第Ⅳ期)
軒平瓦	511-9点、660-5点(以上14点-第Ⅰ期) 640-27点(以上27点-第Ⅱ期) 641-1点、721A-5点(以上6点-第Ⅲ期) 721B-4点(以上4点-第Ⅳ期)	511-3点(第Ⅰ期) 640-5点(第Ⅱ期) 721A-6点(第Ⅲ期) 721B-2点(第Ⅳ期)
道具瓦	鬼瓦 953-2点、のし瓦-5点(以上7点-第Ⅱ期)	鬼瓦 953 カー1点、のし瓦-3点(以上4点-第Ⅱ期)
刻印瓦	図A: 平瓦-11点、図B: 平瓦-2点、図C: 平瓦-7点、図D: 平瓦-2点、物: 軒丸瓦210-2点、平瓦-9点、図E: 平瓦-2点、図F: 丸瓦-1点、平瓦-2点、図G: 平瓦-1点、図H: 丸瓦-1点、図I: 丸瓦-2点(以上第Ⅱ期) 「本」付図2-12: 平瓦-2点、丸瓦-2点、「田力」付図2-13: 平瓦-3点、丸瓦-1点、「古」付図2-15: 平瓦-1点、付図2-16: 平瓦-1点、付図2-17: 平瓦-1点、付図2-19: 平瓦-1点、付図20: 丸瓦-1点、付図2-21: 平瓦-1点(以上第Ⅳ期)	図A: 平瓦-4点、図B: 平瓦-8点、物: 軒丸瓦240-1点、丸瓦-2点、平瓦-1点、図C: 丸瓦-1点、図D: 丸瓦-3点、図E: 軒丸瓦243-1点、丸瓦-1点(以上第Ⅱ期) 「本」付図2-12: 平瓦-2点、付図2-19-丸瓦-1点、平瓦-1点、「田力」付図2-13: 丸瓦-1点、平瓦-1点(以上第Ⅳ期)
鎧書瓦	第51図6-8等: 平瓦-6点(第Ⅳ期)	第51図9等: 平瓦-2点(第Ⅳ期)
他の瓦	平瓦・丸瓦は平箱で147、近世以降の瓦若干	平瓦・丸瓦は平箱で53、近世以降の鬼瓦1点
土師器	坏(糸切り無調整-4点、ヘラ切り無調整-2点、手持ちヘラ削り-1点)、高台坏-3点、甕少量	坏(糸切り無調整-7点、ヘラ切り無調整-1点、手持ちヘラ削り-2点)、甕少量
須恵器	坏(糸切り無調整-2点、回転ヘラ削り-2点)、高台坏-2点、その他蓋・瓶・甕が少量	坏(糸切り無調整-1点、ヘラ切り無調整-1点、手持ヘラ削り-1点)、瓶・甕少量
須恵系土器	坏-13点、高台坏-7点、鉢カ-1点	坏12点、高台坏5点
その他	焼壁-3点、陶磁器少量	陶磁器少量

表4 第1・2層出土の遺物

4. 考 察

今回の調査で出土した古代の遺構には、門跡、築地跡、これらの基礎地業、柱列跡、土壙、溝などがあり、このほか築地基礎地業下から発見された横穴墓がある。以下では、多賀城外郭の南門と築地、横穴墓の2点について記述する。

A. 外郭南門と築地

門跡はほぼ政庁中軸線上で、政庁南門跡から約310m南の位置にある。築地跡は南門の東側部分と西方部分に遺存しており、東側の築地跡は比較的保存が良く、その構造と変遷および門との関係が把握できたが、西方の築地跡は削平あるいは調査区の制約もあって不明瞭な点が多い。このため、まず門と東側の築地の変遷について整理し、ついでこれと西方

の築地の対応関係を検討し、最後に全体的な南門・築地の様相をまとめることとしたい。

(1) 南門と東築地

南門位置では S B201A門→S A1538 柱列→S B201B門という重複がみられ、その東では S F202A築地→S F202B₁築地→S A1538 柱列→S F202B₂築地という重複がみられた。また、築地の犬走り部分のB₂整地層などの存在から S F202B₂より新しいS F202C築地が推定された。

門と築地の対応

これらの遺構のうち S B201A門と S F202B₁築地は、ともに S X205 基礎地業の上に構築され、S A1538 柱列に切られている点で共通することから、同時期のものと考えられる。

これ以前の遺構としては S F202A築地があるが、調査区内においてはこの時期の門の痕跡を見つけることができなかった。これについては、①門の位置が別の場所にあった、②門の痕跡が完全に削平された、③S B201A門が S F202A築地と同時期に構築され、S F202B₁築地の時期まで存続した、の3つの場合が想定できる。

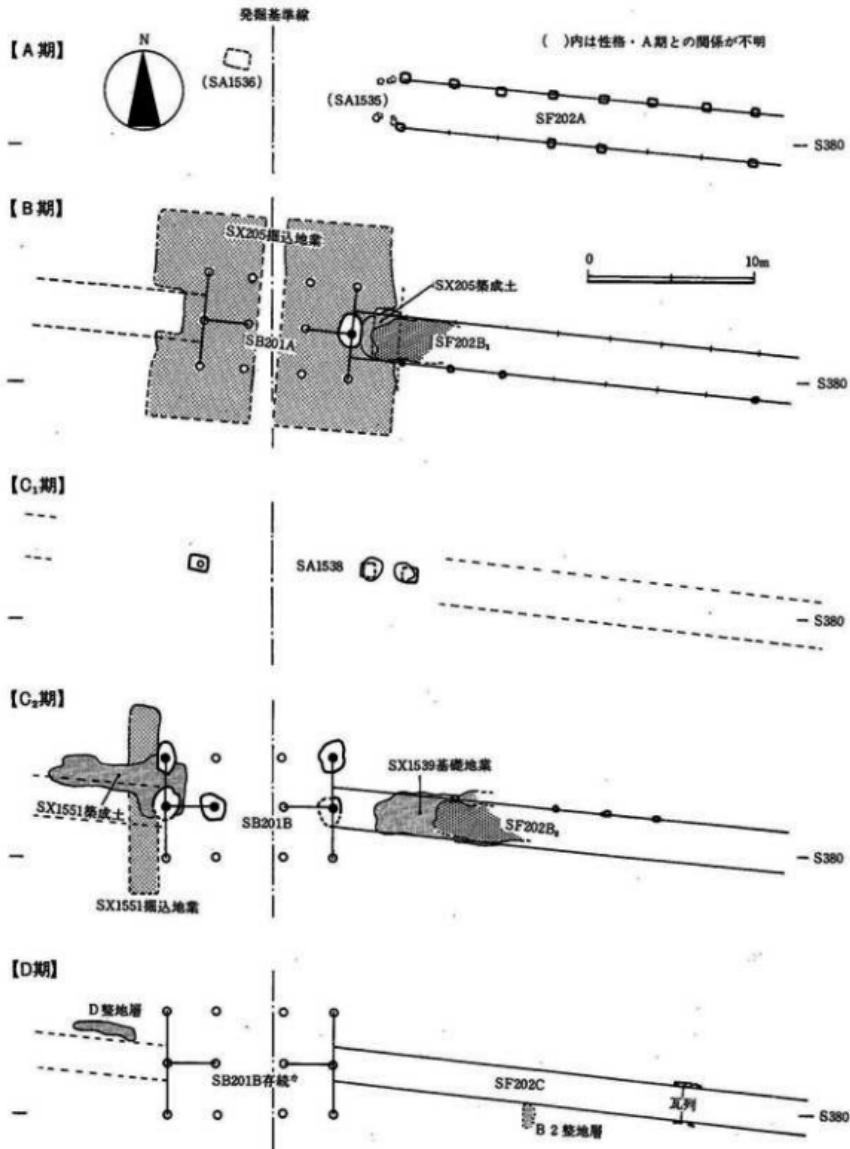
このうち①は、政庁と外郭南門を結ぶ道路が政庁第Ⅰ期のうちに造られ、第Ⅳ期の終末まで維持されていることが確認されており⁽¹⁾、いずれの時期においても区画施設を設けた場合必ずこの位置に門があったと考えられることから、除外して考えてよいであろう。

②は門が掘立式の場合(②-1)と礎石式の場合(②-2)が想定される。②-1は門と築地の技法が共通する。ただし、柱穴の深さを外郭西門の柱穴を参考に仮に1.5m程として、削平面のうち最も高く残っている部分から1.5m上のレベルに基壇面を想定すると、門のすぐ東の築地基底面レベルよりも1m以上高くなり、S B201B門の推定基壇レベルや周辺の地形との関係でやや不自然さを感じる。②-2の場合は門が礎石式、築地が掘立式で、門と築地に技法的な相違が生ずる。③も、②-2と同様に門と築地に技法的な相違が生ずる。

②・③とも不自然さが残り断定はできないが、後述するように S F202Aが政庁第Ⅰ期に対応するものであり、政庁第Ⅰ期では全く礎石式の遺構がみられないことを考慮すると、S F202Aと組む門は掘立式のものと思われ、掘立式の門が完全に削平されたとみる②-1の可能性がより高いものと思われる。

S B201A門の後には門跡から築地跡にかけて、S A1538 柱列が造られている。構造は不明であるが、簡易な構造で部分的な施設であることから、仮設的なものとみられる。

S B201B門と S F202B₂築地は S A1538 柱列の直後に構築されており、同時期のものとみられる。



第 52 図 外郭南門と築地の変遷

整地層の存在と第7次調査の築地両側の瓦列から推定したS F 202Cは、最も新しい時期の築地と思われるが、これに組む門はみられず、この時期までS B 201B門が存続していたことも考えられる。

遺構期

以上の対応関係の検討より、門と東の築地には、A期：門不明・S F 202A築地、B期：S B 201A・S F 202B築地、C1期：S A 1538柱列、C2期：S B 201B門とS F 202B築地、D期：門不明（S B 201Bが存続か）・S F 202C築地という変遷があったものと考えられる。

なお、このほかに門あるいは区画施設に関する可能性がある遺構としてS A 1536柱穴とS A 1535小柱穴群がある。これらは、B期以前の遺構でしかも上記A期の遺構とは共存しない位置関係にあることから、A期を細分する必要も生じ得るが、前述したように性格が不明なため、ここではその可能性を持つことを指摘するにとどめておきたい。

ところで、門跡の周辺では部分的ながら焼け面が認められたほか、多量の焼土や焼瓦を含む整地層が分布し、焼壁も出土していることから、門に火災があったことが推定される。この火災は、C2期の門の礎石据穴に焼土・焼瓦が含まれることからC2期の構築より古いことが知られ、また、B期の構築に伴う門東の削平面に焼け面が形成され、この上に焼土を含むA2整地層がのことからB期の構築より新しいことが知られる。B期とC2期の間にはC1期のS A 1538柱列があるが、柱の抜き穴に全く焼土が入らず、また、火災によって多量の焼土や焼瓦が生ずる施設とは考え難い。したがって、火災にあったのはB期の門と考えられ、C1期のS A 1538は火災直後の仮施設とみてよいであろう。

各期の年代

B期の火災は、火災直後のB2整地層の様相が焼土・焼瓦を多量に含むことや、出土の瓦が政府の第I期と第II期の瓦に限定される点で政府の火災後の第3次整地層と共にしていることから、第II期終末の火災と同時期のものとみられる。したがって終末は伊治公皆麻呂の乱による火災のあった780年とみられる。構築年代については、S X 205の築成土とS F 202B築地積土出土の瓦18点が第I期のものに限られることから、第I期から第II期初頭頃までの間と考えられる。さらに、すべての建物が掘立式により構築された政府の第I期に対応する時期に、外郭南門のみに礎石式の技法が採用されたとは考え難く、B期の構築は政府第II期と同様の8世紀中頃とみるのが妥当と思われる。

これより古いA期は、B期との関係および掘立式であることから第I期対応とみて矛盾がなく、8世紀前半のうちと考えられる。

一方、火災後の仮設的なC1期のS A 1538柱列とその後に構築されたC2期のS B 201B

門・S F 202B₂築地は、政庁の火災直後の暫定的な第Ⅲ₁期とその後の本格的な第Ⅲ₂期の遺構にそれぞれ対応するとみてよいであろう。したがって、構築年代はC₁期が780年の火災直後、C₂期が8世紀末頃とみられる。

D期は第7次調査でS F 202Cが基部に第Ⅲ₂期の瓦を用いていることから、第Ⅲ₂期以降のうちでも当初には遡らない可能性が高く、また、調査区内から第Ⅳ期の瓦がかなり多量に出土し、その時期まで門や築地が維持されたと推定される状況を勘案すると、政庁第Ⅳ期にほぼ対応するものと思われる。これにより構築年代はおよそ9世紀の後半とみておきたい。

その他の遺構

明らかに門廃絶以降とわかる遺構を除いたその他の遺構について、門・築地の変遷との関係を検討する。まず、門の西側で検出した遺構をみると、S A 1555 小柱穴群・C 整地層・D 整地層がある。S A 1555 小柱穴群は、埋め土中に焼土・焼瓦が入ることとC₂期門の基礎地業に覆われることからC₁期のものと考えられる。また、このS A 1555より古いC 整地層はA期ないしB期となる。この上面および下層の地山面ではA期のS F 202Aに対応する築地寄柱穴がないことから、S F 202Aを削平した後すなわちB期の整地層である可能性が高いように思われる。D 整地層はC₂期の門の基礎地業S X 1551より新しいことから、D期築地に関する整地かと思われる。

つぎに、門の北西で検出した遺構をみると、S A 1564 柱穴・S K 1547～1550・1553・1554・1563 土壙がある。S K 1548・1549は門・築地との重複がなく、遺物もないため位置付けが不明確であるが、他の遺構はすべてC₂期より新しく、出土遺物からみると多賀城存続期間中の遺構と考えられる。うちS K 1550・1553・1554 土壙は埋め土から第Ⅳ期の瓦が出土していることからD期に属するとみられる。この状況からD期を中心とした時期に門・築地の北西側に土壙が掘り込まれたことが知られる。

(2) 門西方の築地跡

西方(調査区西半部)の築地跡としては、2時期の積土(S F 1556A・B)とその南側に1時期の寄柱穴(S A 1557)と犬走りの嵩上げかとみられるE 2 整地層を検出し、2時期以上の変遷があることを確認した。ただし、築地南半部のみの調査という限界もあって寄柱とE 2 整地層の位置付け、西方築地と門・東築地との関係についても不明な点が多い。

S X 1562 基礎地業上に構築されたS F 1556Aは、この地区で最も古い区画施設であること、また西方築地の立地する地形が西に向かって急に低くなることを考慮すると、この地形を大きく改変したS X 1562 基礎地業以前には築地がなかったとみられることから、東半

部のA期に対応する可能性が高い。この場合、S X1562 中には政庁第I期の瓦片が含まれており、A期の造営が政庁第I期の造営より遅れて行われた可能性が高くなる。なお、今回の調査区西方を対象とした第20次調査でもやはり最も古い築地の基礎地業（S X216）中から第I期の瓦が出土している。⁽⁴⁾

E 2 築地層は S F1556 A 積土より新しいもので、その後の築地修築に関するものとみられる。この層は、下層の小柱穴から第II期の瓦が出土したことから、東半部のB期以降であることが知られるが、時期を限定できない。

S F1556 B 積土と S A1557 寄柱穴は全く遺物が出土していないこともあり、東半部との対応は不明である。

なお、築地の方向については、S A1557 寄柱穴が東西発掘基準線に対し東で約8°南へ偏しており、S F1556 A・Bも積土の残存状況からこれとほぼ同じとみられる。

（3）まとめ

以上東半部の遺構を中心として南門と築地の変遷をA期からD期に分けてとらえてきたが、ここで各期の様相をまとめておきたい。なお、築地の方向については門の東側が東西発掘基準線に対し約6°、門西方の築地が約8°南に偏しており、時期による変化はみられない。

〔A期〕 挖立式のS F202 A築地が造られた時期で、門は不明である。東の築地は地山面に構築されており、基底幅が約2.7m、桁行柱間が約3.0m等間である。これに対応する西側の築地は、西半部のS X1562 基礎地業上のS F1556 A築地とみられる。想定される門は、政庁と外郭南門地点を結ぶ道路との関係からB期以降の門とほぼ同位置にあったと考えられる。年代は政庁第I期にはほぼ対応する時期のものであり、西半部の基礎地業S X1562中の瓦からみて政庁第I期の造営より遅れて構築されたものと思われる。なお、B期より古くA期との関係が不明なS A1536 柱穴・S A1535 小柱穴群の性格は確定することができなかった。

〔B期〕 磔石式のS B201 A門とS F202 B1築地が造られた時期である。門はS X205 基礎地業（回形の掘込地業とその上の築成土からなる）の上に構築されている。門は遺存状況が極めて悪いが、掘込地業の形と礎石据穴との位置関係から桁行総長9mほどの八脚門で、方向は東側の築地と同じく東西発掘基準線に対し東で約6°南に偏していたものと推定された。また、周辺から第II期の瓦が多量に出土したことからこの門は瓦葺であったとみられる。築地は基底幅約2.7m、桁行約3.0m等間である。この期の門は政庁第II期と同時期とみられる火災にあっており、B期の終末年代は伊治公皆麻呂の乱のおこった

780年と考えられる。構築年代についてはS X205 築成土とS F202B1 積土の出土瓦から政府第Ⅱ期と同じく8世紀中頃と考えられる。

なお、B期の構築時には、門のすぐ東で築地の南側では東西7m、南北2m以上の部分がA期の遺構面より約30cm前後掘り下げられ、平坦な面が造り出されている。これは、A期の東築地が地形の傾斜に沿って西に向かって低くなり門に取り付いたのに対し、門の基壇東側をレベルダウンさせることによって、門に取り付く部分での築地の傾斜を緩やかにするためのものかと思われる。

〔C1期〕 B期の門跡からその東にかけて掘立式のS A1538 柱列を建てた時期で、このほかの遺構にS A1555 小柱穴群がある。S A1538の構造および性格は明確でないが、簡易な門と部分的に造られた埠の複合かと思われ、仮設的なものとみられる。構築年代は政府第Ⅲ1期に対応し780年の火災直後と考えられる。

〔C2期〕 磐石式のS B201B門とS F202B2築地が造られた時期である。門はS X205の西に接して行われたS X1551 基礎地業(匁形の掘込地業とその上の築成土からなる)の上に構築されており、5個の磐石据穴から桁行長約9.9mの八脚門であること、また、位置がB期の門より1m弱西へ寄っていることが確認された。方向は東西基準線にはほぼ一致し、築地の方向とは約6°異なっていたことが知られる。また、出土瓦の点からこの期の門も瓦葺であったとみられる。東の築地はS X1539 基礎地業の上に構築されており、基底幅約2.4m、桁行約3.0m等間である。構築年代は政府第Ⅲ2期に対応し、8世紀末頃と考えられる。

〔D期〕 築地の際で検出したB2 整地層と第7次調査の瓦列からS F202C築地が構築されたと推定したことにより設定した時期である。築地の基底幅は約2.1mとみられる。年代はおよそ9世紀後半頃と考えられる。門位置の周辺にはこの時期の瓦(政府第Ⅳ期)が多量に出土したことから、瓦葺の門が維持されていたとみられ、C2期のS B201B門が屋根の葺き換えを経てこの時期にも存続していた可能性が高い。

B. 横穴墓

横穴墓は調査区西端の築地基礎地業下で3基発見された。築地構築以前の地形は南西に向かって低くなる急斜面で凝灰岩が露出していたと思われる。今回は築地基礎地業を部分的に除去しただけであり、検出した3基のほかにも横穴墓が分布して群を形成する可能性がある。

横穴墓相互の関係

西のS P1561 横穴墓は8層の堆積前のものであるのに対し、中央のS P1560 横穴墓と東

の S P 1559 横穴墓は 8 層の堆積後に構築されており、S P 1561 は S P 1560・1559 より古い時期のものであること 知られる。S P 1561 が玄室奥壁を残すにすぎないのに対し、他の 2 基が玄室から羨道にかけて遺存しているのは、東 2 基が S P 1561 の大部分が削平ないし崩壊後、掘り込まれたためと考えられる。

S P 1559 と S P 1560 はともに 8 層堆積後に構築されたもので、その後ある期間を経て行われた墓前祭の痕跡が共通してみられ、しかも両者の痕跡が同一層の上面に認められた。以上のことから、両横穴墓の墓前祭は同時期に行われたことが知られ、構築もほぼ同じとみてよいであろう。また、両墓では墓前祭の後に類似した整地がみられるが、上面に遺体や遺物の痕跡が全くないことから追葬に関するものとはみられず、横穴墓としての機能を失ってから別の用途（例えば倉庫など）に使われた可能性が強いように思われる。

年 代

これらの年代についてまず築地との関係から整理すると、S X 1562 基礎地業の下層であることから、政庁第 I 期のうちに造られたとみられる外郭南辺築地より古く、下限は 8 世紀前半と考えられる。

次に出土遺物を検討する。構築時に供献されたものに S P 1560 の玄門前の床面で出土した土師器坏（第 47 図①）と須恵器平瓶（②）があり、その後の墓前祭に使用された遺物としては、S P 1560 の土師器坏 1 点（第 47 図③）と S P 1559 の土師器坏 6 点（第 49 図⑤～⑩）・塊 3 点（第 49 図⑪～⑬）がある。S P 1561 からは遺物は出土していない。

埋葬時に供献された①の土師器坏は、非ロクロ調整の丸底のもので、外面の中程に稜を持ち、上方が外傾気味に立ち上がる。この坏に類似した器形・技法をとる例は官城県塙沢北遺跡の第 2 群土器⁽¹⁾のなかにみられる。第 2 群土器は栗遺跡の栗圓式より新しく、様様遺跡の国分寺下層式より古い段階に位置づけられているもので、その年代は 8 世紀初頭頃と考えられていたが、7 世紀に遡る可能性も指摘されている。⁽²⁾

須恵器平瓶の②についてみると、平城京や猿投山窯跡の編年では高台の付く平瓶の出現は 8 世紀後半頃と考えられている⁽³⁾が、それらの把手の形状は断面長方形のもので、今回出土した五角形のものとは相違する。把手の形状が②と類似する平瓶の例は 7 世紀後半から 8 世紀初頭とされる砂山横穴墓群から出土しており、把手の点では古い要素を持つとみられる。したがって、高台の出現時期の点では問題を残すものの、②を 8 世紀後半以降に限定して考える必要はないようと思われる。

墓前祭の土師器坏はすべて非ロクロ調整の内黒丸底坏である。細部の器形は多様であるが、外面に段・稜の有るものと無いものがみられ、胴部から口縁部にかけての形は内湾気味に外傾するものが多い。これらの特徴からみると、S P 1559・1560 の土器は、有段で口

縁部が外傾するものが大部分を占める栗遺跡の土師器坏群⁽⁹⁾（栗圓式）よりは新しく、丸底と平底の両者がみられ、段がほぼ消失し沈線化したものが主体を占める糠塚遺跡の第1群の土師器⁽¹⁰⁾（国分寺下層式）より古いものと思われる。

このうち⑤の土師器坏は小ぶりで口縁端部が外反する内黒坏である。このような器形と法量の点で共通するものとして、内黒坏ではないが清水遺跡第V群土器の土師器第3類⁽¹¹⁾や郡山遺跡外郭溝底面出土の土師器⁽¹²⁾、御駒堂遺跡の第1群土器⁽¹³⁾にみられ、これらは関東地方の鬼高式後葉のものに近似するもので、年代は7世紀中・後葉から8世紀初頭頃と指摘されている。⑥の内面がヘラミガキ・黒色処理された点はこれが在地化したためと思われる。

以上述べた遺構の重複から知られる下限年代とS P1559・1560の構築時と墓前祭の土器の検討により、両横穴墓の年代はおよそ7世紀後葉から8世紀前葉までの間と考えておきたい。

S P1561の崩壊後に堆積した8層や築地基礎地業土から出土した須恵器長頸瓶（第43図4）・甕（5）、土師器甕（第47図④）はいずれも7世紀後葉から8世紀前葉とみられるもので、本横穴墓群に関係したものであった可能性がある。また、この周辺から出土した遺物全体をみても7世紀後葉より古いものがないことから、S P1559・1560より古いS P1561も両横穴墓と年代的にそう大きな違いはないと思われる。

なお、横穴墓の発見は多賀城内では初めてであり、この横穴墓群の名称を小字名をとつて田屋場横穴墓群とする。

註1 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡』（宮城県多賀城跡調査研究所年報1983）1984

2 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡－政府跡本文編－』1982

3 註2と同じ

4 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡」（宮城県多賀城跡調査研究所年報1973）1974

5 宮城県教育委員会・日本道路公團「塩沢北遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』（宮城県文化財調査報告書第69集）1980

6 辻秀人「宮城県の横穴と須恵器」『宮城の研究1』1984

7 名古屋大学植崎彰一教授の御教示による

8 宮城県教育委員会・宮城県企業局『砂山横穴古墳群調査報告書』（宮城県文化財調査報告書第44集）1976

9 仙台市教育委員会・東北学院大学考古学研究部「栗遺跡発掘調査報告書」（仙台市文化財調査報告書第14集）1979

- 註 10 宮城県教育委員会「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報—昭和 52 年度分—』(宮城県文化財調査報告書第 53 集) 1978
- 11 宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書—V—』1981
- 12 仙台市教育委員会『郡山遺跡発掘調査概報一年報 1』(仙台市文化財調査報告書第 23 集) 1980
- 13 宮城県教育委員会「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書 VI』(宮城県文化財調査報告書第 83 集) 1982

IV 第49次調査

第49次調査は多賀城市市川字丸山22番地のうち、約450m²を対象として、昭和60年8月1日から12月17日まで実施した。この成果については、次年度の当研究所年報で報告することにし、ここでは調査の目的と成果の概要を簡単に記すに留めたい。

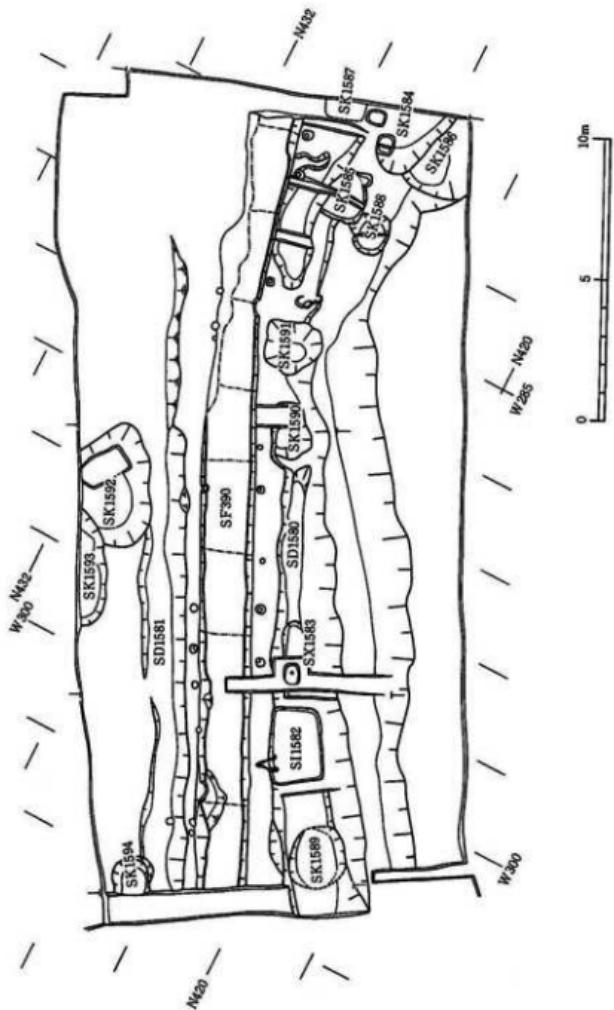
〔調査目的〕

第49次調査は第4次5ヶ年計画の第2年次として、外郭北辺区画施設の構造と変遷を調査することを目的として実施した。調査の対象とした丸山地区の丘陵は、六月坂（政府北側）の西隣にある舌状の丘陵で、緩やかに外郭線の北側に延びている。また、今回の調査対象地区は、東・南・西門が丘陵尾根上に築かれていることから、北門の推定地として最も有望視されていた所である。

〔調査成果の概要〕

今回の調査で検出した遺構には築地跡1、溝2、竪穴住居跡1、屋外カマド跡1、土壙11がある。したがって、門跡こそ発見されなかつたものの、外郭北辺区画施設が築地であることを確認した。築地(S F 390)の規模を本体基底幅でみると1.85m前後で、積み手の違いはほぼ3mおきにみられた。築地本体は、凝灰岩礫を多量に含む褐色シルトを積み重ねた版築によって構築されている。また、寄柱は確認されなかつたものの、構築時に仮枠板を押されたとみられる柱穴が検出された。構造的には寄柱をもたないものと推定される。さらに、瓦の出土量も少なく、その出土状況も考えあわせると瓦葺きではなかつたものと思われる。築地に関連する施設としては、築地両側のS D1580・1581溝があり、その部分では築地基礎が基壇状に削り出され、犬走りが形成されている。その他の部分の築地基礎は、削平整形もしくは盛土整地によって本体構築のための平坦面を確保するに留まっている。また、本築地は丘陵尾根を境にして、挾角167°で屈曲しており、地形の制約などに伴うものと考えられる。

S F 390 築地の構築時期は、本体およびその基礎から遺物が出土していないが、遺構の重複関係から9世紀前半以前とすることができる。また、本築地は構築後における本体の補修痕跡や柱穴の重複などがみられず、築地を維持するための補修・修復が行われないままに崩壊したものと考えられる。その崩壊過程において、8世紀末から9世紀前半頃にS I 1582竪穴住居が構築・廃絶され、9世紀後半頃にはS X 1583屋外カマドが構築・廃絶され、徐々に築地としての高まりは失われていく。そして、灰白色火山灰が降灰した10世紀前半頃には、現状に近い状態にまで築地は崩壊したものと思われる。



第 53 図 第 49 次調査遺構配置図

V 付 章

1. 関連研究普及活動・普及活動

昭和 60 年度は多賀城跡の発掘調査のほかに、以下のような関連研究や普及活動を行った。

(1) 多賀城関連遺跡の発掘調査

当研究所では多賀城に関連する古代遺跡について計画的な調査研究を実施している。本年度は多賀城関連遺跡調査第 3 次 5 ヶ年計画の第 2 年次にあたり、昭和 60 年 9 月 2 日から 10 月 20 日まで古川市名生館遺跡の発掘調査(第 6 次)と、この官衙に瓦を供給した瓦窯の一つと考えられる岩出山町合戦原窯跡の発掘調査を行った。事業費は 6,300 千円(うち 50% 国庫補助)である。その成果は多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 11 冊『名生館遺跡 VI』として刊行する。

(2) 多賀城跡の環境整備

当研究所では多賀城跡の保存・活用を目的として計画的に環境整備を実施している。本年度は環境整備第 4 次 5 ヶ年計画の初年度にあたり、作貫地区の第 IV 期工事として中・近世の土塁と空堀の露出展示とその覆屋、東屋、遊歩園路の設置を行った。また、委託事業として多賀城跡の地形図 1/1,000 の作成を行った。総経費は 27,000 千円(うち 50% 国庫補助)である。

(3) 遺構調査研究事業

本年度の事業は東北古代城柵官衙遺跡の外郭区画施設に関する総合研究 5 ヶ年計画の 3 年次にあたり、築地についての考古学・建築史学・文献史学・保存科学の各面からデータ収集に力点を置いた。総経費は 1,305 千円(全県費)である。

(4) 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般の人々に公開するため下記の現地説明会を実施した。

「多賀城跡第 48 次調査について」 昭和 60 年 9 月 14 日 高野芳宏

「名生館遺跡第 6 次調査について」 昭和 60 年 7 月 27 日 白鳥良一

(5) 他機関の発掘調査などへの協力

遺 跡 名	期 間	調 査 機 閣	協 力 所 員
城生遺跡(宮城県中新田町)	60. 7	中新田町教育委員会	白鳥良一
馬場壇遺跡(宮城県古川市)	60. 4 ~ 5	東北歴史資料館	進藤・白鳥・高野・丹羽・後藤

(6) 講演会などへの協力

白鳥良一 60. 5. 28 「古代の白石地方」 白石市文化財愛護友の会 白石市中央公民館

白鳥良一 60. 10. 9 「多賀城跡について」東北・北海道地区国立大学病院実務研究会
白鳥良一 60. 10. 24 「古代東北における多賀城の役割について」多賀城市職員親交會
進藤秋輝 61. 3. 1 「7世紀から8世紀初頭の大崎地方」古川市市民郷土史講座
古川市図書館

(7) 研究発表・執筆など

佐藤和彦・高野芳宏 「多賀城跡」 『木簡研究』第7号 昭和60年11月
高野芳宏・丹羽 茂 「多賀城跡—第48・49次調査—」 (第12回古代城柵官衙遺跡検討会 昭和61年2月8日発表)
白鳥良一・後藤秀一 「名生館遺跡」 (第12回古代城柵官衙遺跡検討会 昭和61年2月8日発表)

佐藤和彦 「駿河国」 『復元天平諸国正悦帳』 昭和61年2月

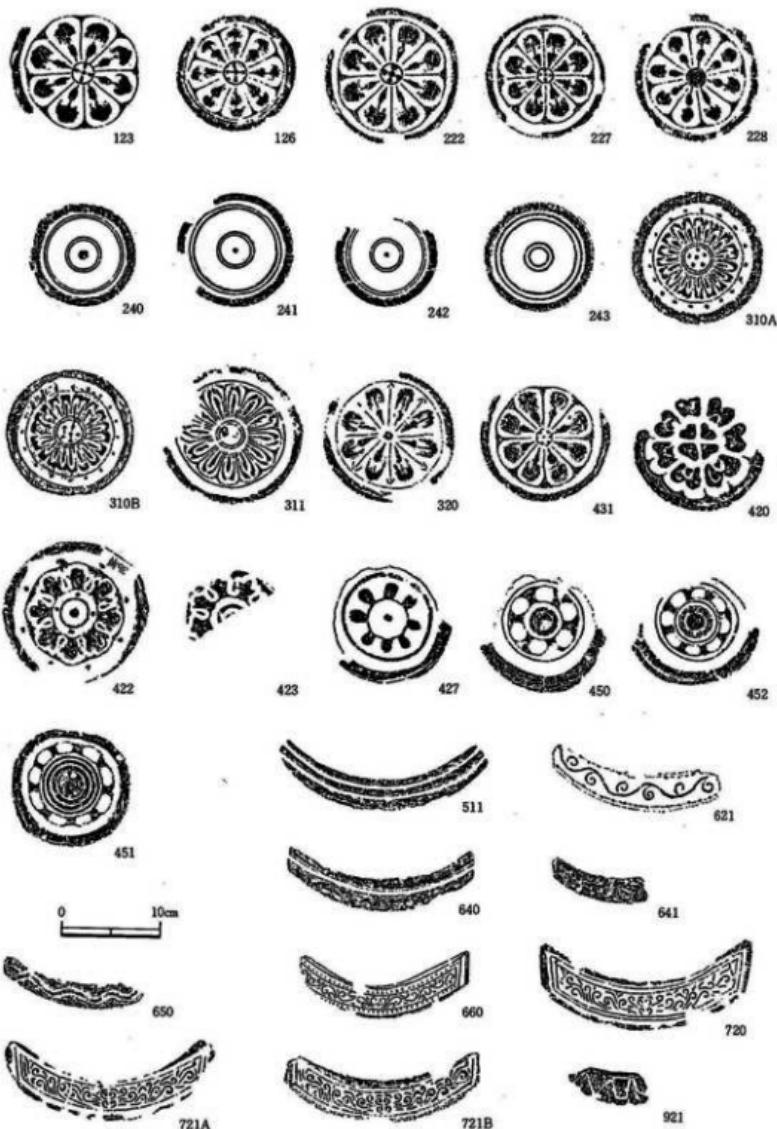
(8) その他

佐々木光雄	陸奥国分寺跡整備審議会委員	志波城跡発掘調査顧問
	郡山遺跡調査指導委員	多賀城市史執筆委員
	徳丹城跡調査指導委員	
進藤秋輝	多賀城市文化財保護委員	秋田県遺跡調査専門指導委員
	石巻市史執筆委員	払田柵跡環境整備審議会委員
	関和久上町遺跡調査指導委員	
白鳥良一	宮沢遺跡環境整備委員会委員	
高野芳宏	多賀城市史執筆委員	
古川雅清	山王町遺跡環境整備計画策定指導 宮沢遺跡環境整備委員会委員	払田柵跡環境整備審議会委員 徳丹城跡保存整備基本計画策定指導

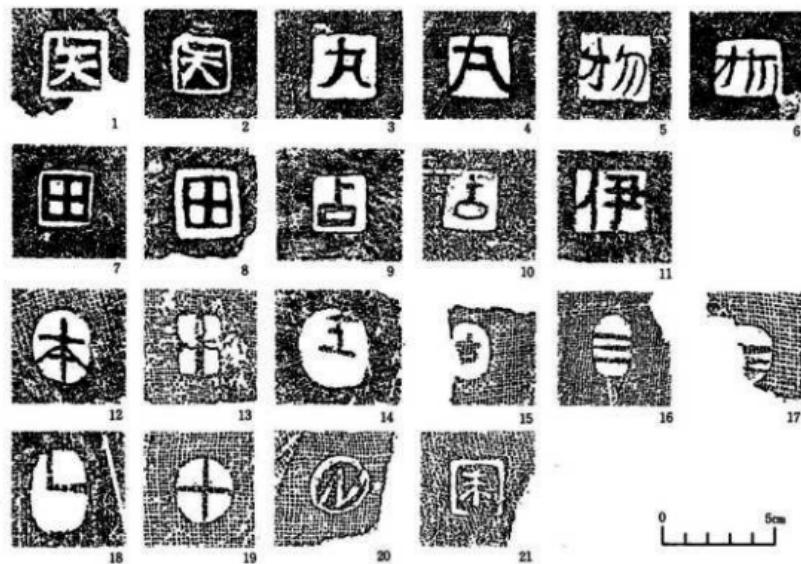
2. 研究成果刊行物

- (1) 『多賀城跡』 (宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984) 1985. 3
- (2) 『名生館遺跡 V』 (多賀城関連遺跡発掘調査報告書第10冊) 1985. 3

付図1 軒瓦の分類番号



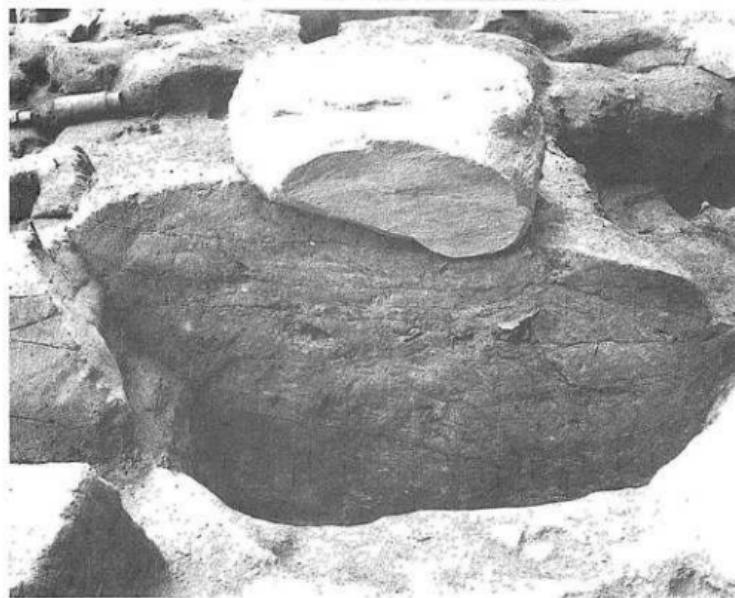
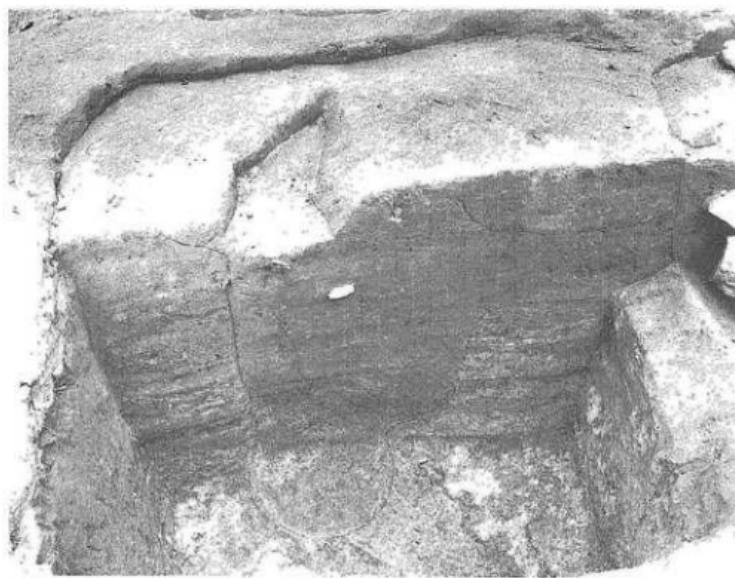
付図2 刻印瓦



図版1 第46次調査

上 全景（北から）
下 全景（西から）





図版2 第46次調査

上 SB1095A門柱穴と抜取穴(西から)

下 SB1095B門の礎石(南から)



図版3 第46次調査

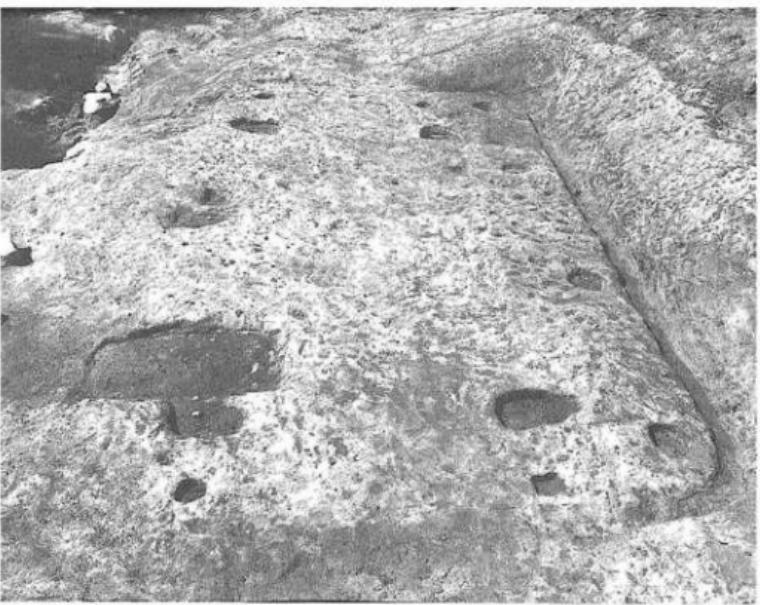
上 SB 1095C の礎石据穴
(西から)

下 SF 1471 墓地と SB 1095
門の取り付き状況
(南から)



図版4 第46次調査

上 SB1095C門とその南のSD1472溝（南から）
下 SD1472溝の（西から）



図版5 第46次調査

上 SB1497 全景（南から）

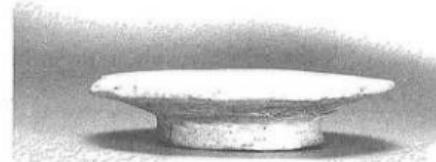
下 SD1492 溝（北から）



1



2



3



4

図版6 第46次調査

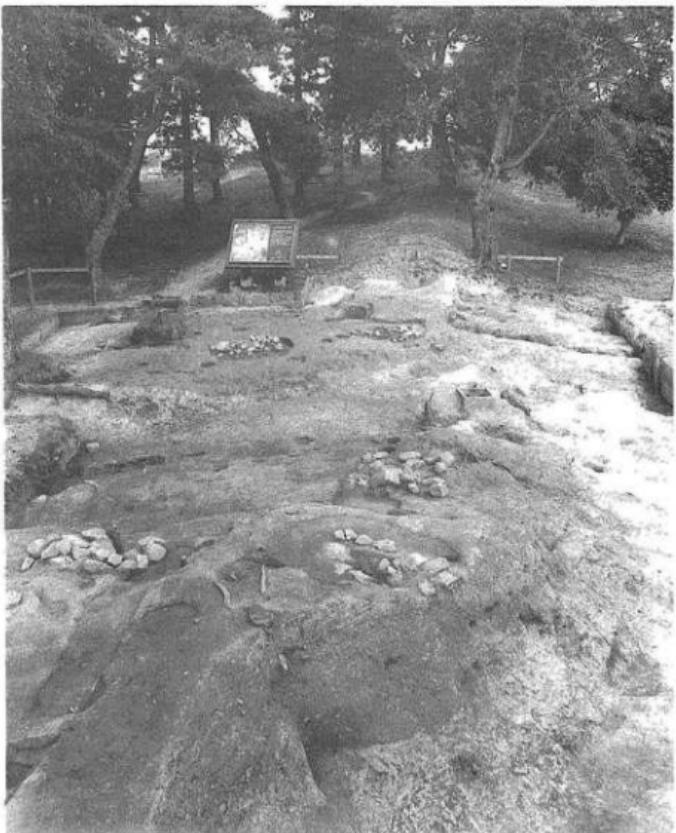
上 SD1493 溝（西から）

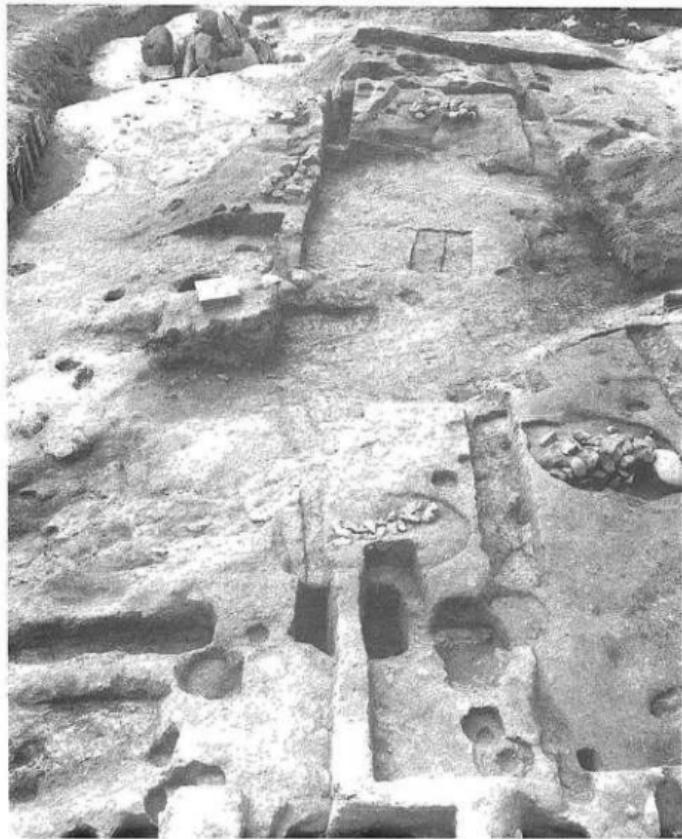
- 下 出土遺物 1. 須恵器 第2層（第23図10）
2. 須恵器 SK1491（第23図4）
3. 須恵系土器 第3層（第23図7）
4. 須恵系土器 第3層（第23図9）



図版7 第48次調査

- 上 調査区東半部全景
(南から)
下 S B 201 B 南門跡
(西から)





図版8 第48次調査

S B 201 南門跡

上 基礎地業の部分的
除去後（南から）

下 同上（東から）



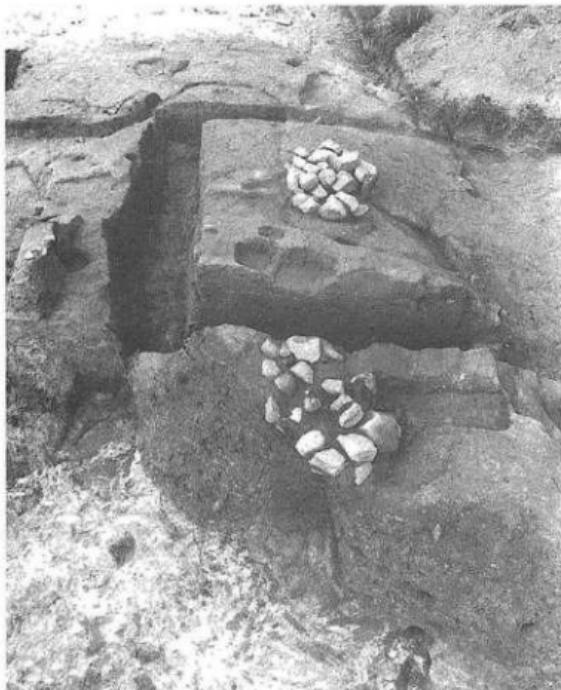
図版9 第48次調査

S X 205 基礎地業

上 東半部（南から）

中 東西断面（北から）

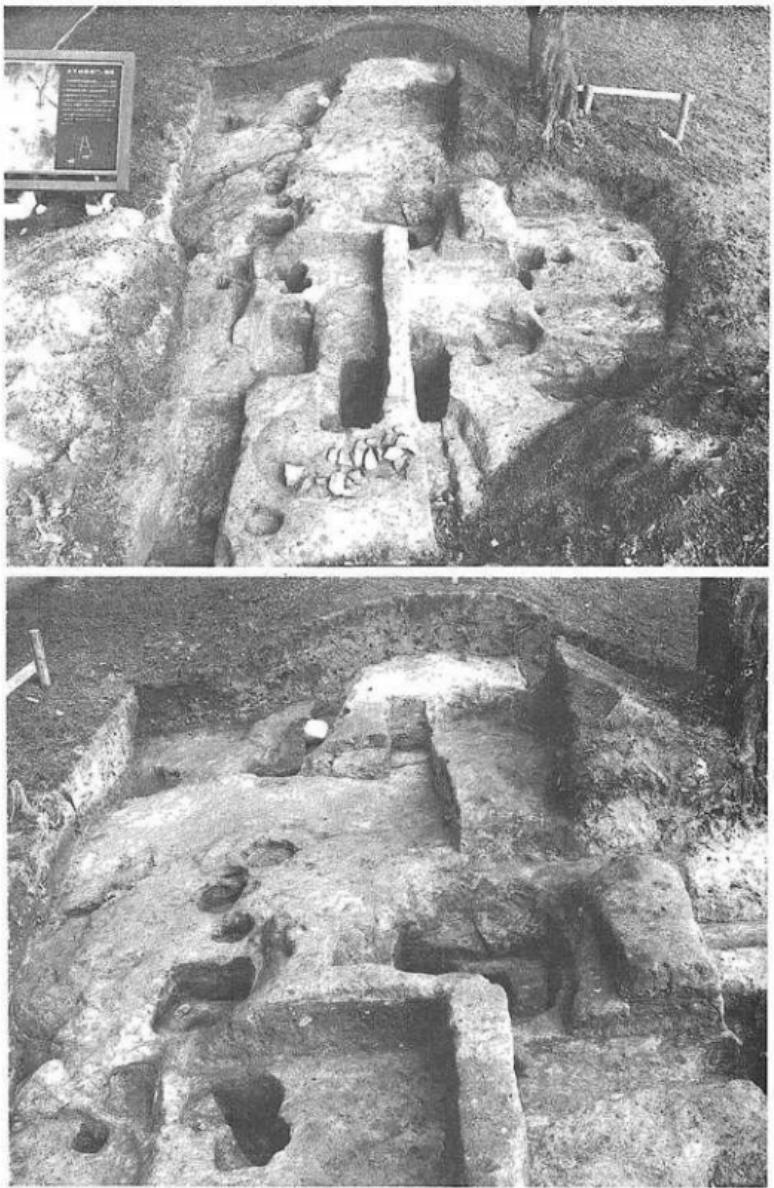
下 同上（細部）



図版 10 第 48 次調査

上 SX1551 基礎地業（南から）
下 同上の張り出し部（東から）





図版 11 第 48 次調査

上 SF 202 築地跡（西から）

下 同上



図版 12 第 48 次調査

- 上 S F 202B₂築地跡（東から）
- 中 S F 202B₁築地跡（南から）
- 下 S F 202A寄柱穴とB₂寄柱礎石の重複（北から）



図版 13 第 48 次調査

上 S B 201 門西側の遺構
(北から)

中 S B 201 門西側、C 整
地層上面 (東から)

下 S A 1538 柱列 (東から)



図版 14 第 48 次調査 調査区西半部

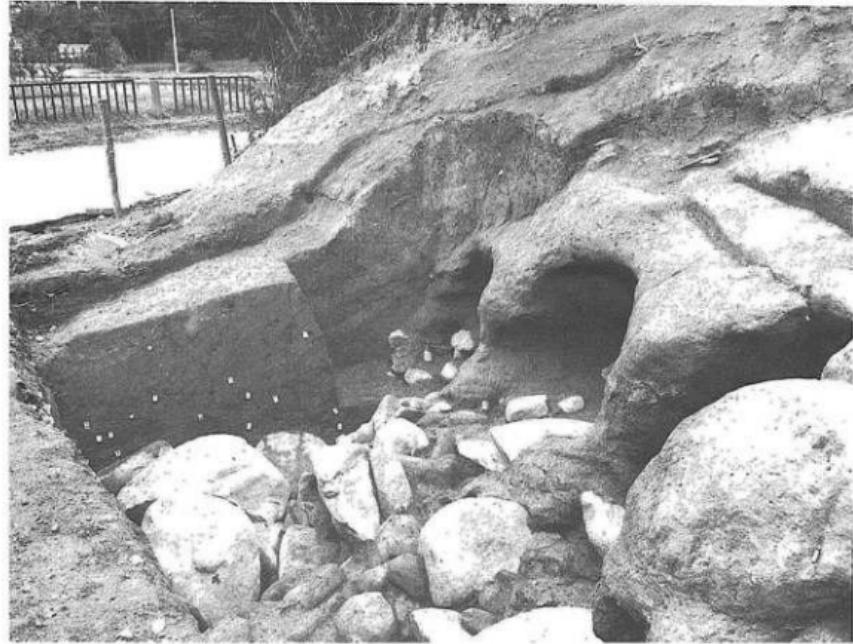
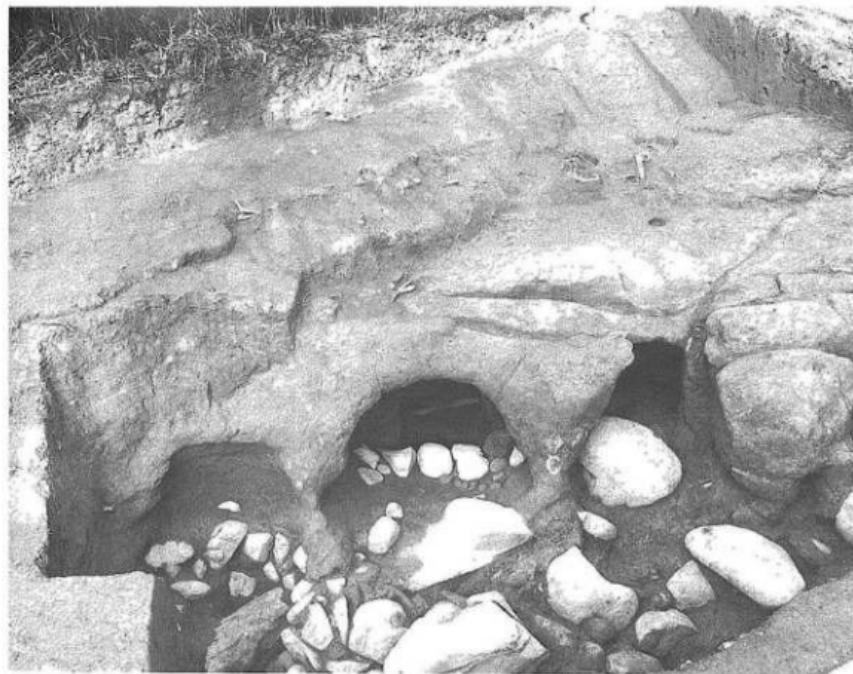
上 全景（南東から）

下 S F 1556 築地跡（南東から）



図版 15 第 48 次調査

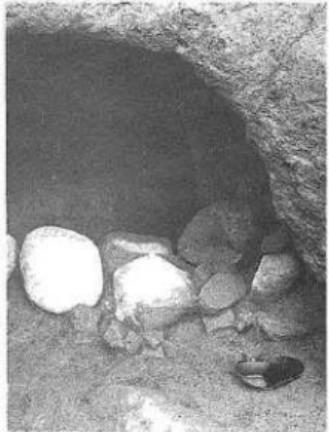
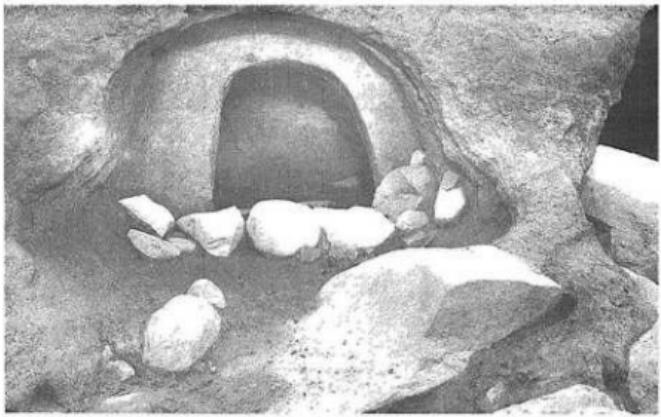
- 上 SA1557 寄柱穴（東から）
- 中 SF1556A・B 積土の重複（南から）
- 下 SF1556A 築地の断面（南西から）



図版 16 第 48 次調査

上 横穴墓群全景（南から）

下 横穴墓群全景（東から）



図版 17 第 48 次調査

S P 1560 横穴墓

上 全景（南から）

中左 6 層上面の遺物

中右 床面の遺物

下 閉塞石除去後



図版 18 第 48 次調査

S P 1559 横穴墓

上 全景（南から）

中 玄室内部

下 6 層上面の遺物



1



7



2



8



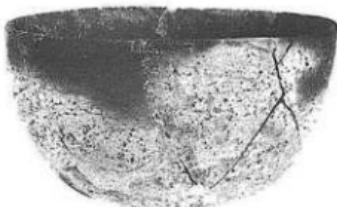
3



9



4



10



5



6



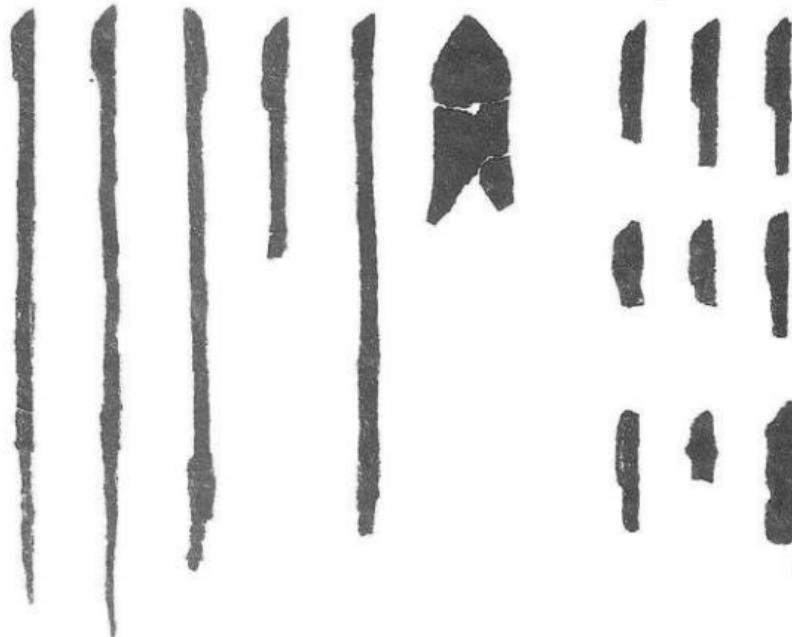
11

図版 19 第 48 次調査 横穴墓出土遺物

1・3～8 土師器壺 9～11 土師器椀 2 須恵器平瓶

1・2 SP1560 床面 (第 47 図①・②) 3 SP1560-6 上面 (第 47 図③)

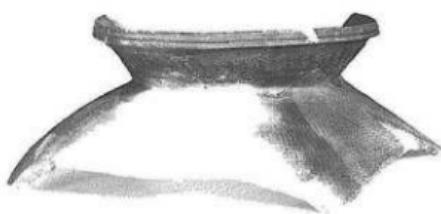
4～11 SP1559-6 層上面 (第 49 図⑤～⑧・⑩・⑪)



1



2



3



4

図版 20 第 48 次調査

- 1 鉄鏃 S P 1559-7層 (第 49 図⑩~⑫)
- 2 土師器 S P 1560-8層 (第 47 図④)
- 3 須恵器甕 S X 1562 基礎地業 (第 43 図)
- 4 土師器甕 第 1 層 (第 51 図 3)

宮城県多賀城跡調査研究所年報 1985
多賀城跡

昭和 61 年 3 月 25 日印刷
昭和 61 年 3 月 31 日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市浮島字宮前 133
TEL (02236) 8—0101
印刷所 小泉印刷株式会社
